081
Y978
T
00974939

古代歌謡集

全

081
Y978
T III
(69)

消

國會圖書館
49.4.15

數 5938 正

974039

緒言

本集は太古より近古に至る謠ひ物の代表文學を系統的に輯錄し、題して古代歌謠集と云ふ。即ち古事記及び日本書紀載する所の歌謠を首めとして、郢曲と總稱する所の神樂、催馬樂、東遊、風俗、今樣、雜藝、朗詠より、降りて宴曲、延年唱歌に及べり。

紀記の歌は、專ら江戸の人、林諸鳥の編せる紀記歌集を採り、傍ら契沖阿闍梨の厚顏抄、本居宣長の古事記傳、荒木田久老の日本紀歌之解などに據りて頭註を加へたり。紀の歌は、其の題材概ね單純、詞藻極めて幼稚淳朴にして、詩形句格亦頗る區々なれども、萬葉集に於ける短歌、長歌、旋頭歌等の源泉として、我が韻文史上に逸すべからざるもの也。

神樂又神あそびは神祇を祭る舞樂にして、その謠ひ物を神樂歌と稱し、古くより世に傳はれり。其の譜は一條雅信公の定むる所なりといふ。催馬樂は其の名義數說あり、要するにもと路頭巷里の謠歌にして、當時の風俗人情の反映せるものと稱すべし。其の譜は同じく雅信公の所作と傳ふ。右の二書は橘守部の入綾に據りて本文を立て、傳承の異同の如きも、

亦同書に準じゝとして之を示し、頭註亦多くは之れを參考せり。されど古くは梁塵愚案抄より、賀茂眞淵の神樂歌考、催馬樂考までをも合せ勘へたり。

東遊又東舞ともいふ、東國の風俗にあはするが故の名也。其の歌神樂歌の類に過ぎず。風俗歌は諸國の俚謠とおほしく、催馬樂の歌と性質を同じうす。守部は催馬樂の撰定に漏れたる類ならんと說けり。右の二書は群書類從管絃部に收めたる本文に據り、今井似閑の萬葉緯、賀茂眞淵の神遊考、風俗歌考等を參考して略注を加へたり。

今樣は新しき風の歌の義にして、和讃の流れと見るべく、後には句格整ひて七五調四拍子となれり。宴遊に用ひられし樣諸書に見ゆ。

雜藝と稱するは、五節の謠ひ物の類にて、何くれとなく數々傳はれり。今古き舟歌、田植歌の類をも之れに附加して收めたり。今樣と共に伴信友の中古雜唱集より抽出す。

朗詠は和漢文人の詩文につきて、主として雅興豐かなる駢儷の句を朗吟するものの謂にして、上流の間に行はれし樣物語書などに見ゆ。和漢朗詠集は藤原公任の撰にして、古來最

も多く行はる。新撰朗詠集は藤原基俊の撰也。今此の二書は流布刊本を收め、前者は古註數種を參考して本文を訂し、略註を加へ、後者は群書類從管絃部所收の書と對校せり。

宴曲は朗詠及び今樣の亞流にして、而も長編として發達し、用語、句法、題目、內容共に著しく鎌倉時代文學の特徵を發揮せり。浮屠明空の徒の作歌調曲に成る。歌唱の系統は聲明道の影響なるべきか。續群書類從遊戲部に收むるもの、宴曲集五卷、宴曲抄三卷、眞曲抄、究百集、拾菓集二卷、拾菓抄、別紙追加曲、玉林苑二卷あり。曲目百六十一を算す。嘗て吉田東伍氏と共に數種の古寫本を以て對校したる總集を剞劂に附したる事あり。今其の中について七十番を選出し、最今發見の善本に據り、本文を訂してこゝに之を收め、私注を首書としたり。

延年は、主として南都北嶺に行はれたる僧家の舞樂にして、もと祝言の意を寓するものなること、その名已に然り。その役柄、詞、歌、さては舞の手ぶり等、後の猿樂能に著しく影響せり。今傳はる所の興福寺延年舞式によりて、こゝに其の詞書及び歌謠を收めたり。因

みに、宴曲及び延年唱歌は、其の墨譜今日尙現存せる事、亦我が音樂史上最も重要の事といふべし。

大正四年四月

校訂者　野村八良

古代歌謠集　目錄

紀記歌集　一—八八

日本紀神代上一首……三
同神代下五首……三
同神武紀八首……五
同崇神紀六首……九
同景行紀五首……一一
同神功皇后紀六首……一四
同應神紀八首……一七
同仁德紀二十三首……二〇
同允恭紀七首……三〇
同安康紀二首……三三
同雄略紀九首……三三
同顯宗紀四首……三八
同武烈紀九首……四〇
同繼體紀四首……四三
同欽明紀二首……四六
同推古紀三首……四七
同舒明紀一首……四八
同皇極紀七首……四九
同孝德紀二首……五二
同齊明紀八首……五三
同天智紀五首……五五
古事記上四首……五八
神武天皇段七首……六三
景行天皇段八首……六五
應神天皇段三首……六九
仁德天皇段九首……七一
履仲天皇段二首……七四
允恭天皇段七首……七五
雄略天皇段十二首……七八

清寧天皇段四首……八五

神樂歌

八九—一一八

庭燎……八九
阿知女作法……八九
採物……九〇
榊……九〇
或說……九〇
幣……九一
杖……九一
或說……九二
篠……九一
或說……九三
弓……九三
或說……九四
劒……九四
或說……九五
鉾……九五
杓……九六
片折……九六
諸擧……九七
韓神……九七
或說……九八
大前張……九八
宮人……九九
難波潟……九九
木綿志天……九九
前張……一〇〇
階香取……一〇〇
井奈野……一〇一
脇母古……一〇一
小前張……一〇二
薦枕……一〇二
閑野……一〇三
磯等……一〇三
篠波……一〇四
殖槻……一〇四
總角……一〇五
大宮……一〇五
湊田……一〇六
蜚……一〇六
或說……一〇六
千歲……一〇七
早歌……一〇七
明星……一一一
吉々利々……一一三
得錢子……一一三
木綿作……一一三
書目歌……一一三
或說……一一四
弓立……一一四
朝倉……一一五
或說……一一五
其駒……一一六
或說……一一六
竈殿歌……一一六
酒殿歌……一一七
或說……一一七

催馬樂

一一九—一四四

律……一一九
我駒……一一九
澤田川……一一九
高砂……一二〇
夏引……一二一
貫河……一二一
東屋……一二二
走井……一二三

飛鳥井……一三三
青柳……一三三
伊勢海……一三四
庭生……一三四
我門爾……一三四
我門乎……一三五
大路……一三五
大芹……一三六
淺水……一三六
插櫛……一三六
鷹子……一三六
逢路……一三七
道口……一三七
更衣……一三七
何爲……一三七
鷄鳴……一三八
老鼠……一三八
隱名……一三八
呂……一三九
安名尊……一三九
新年……一三九
梅枝……一三〇
櫻人……一三〇
葦垣……一三一
山城……一三一
眞金吹……一三三
紀伊國……一三三
葛城……一三四
竹河……一三五
河口……一三五
此殿者……一三五
此殿西……一三六
此殿奥……一三六
鷹山……一三七

美作……一三七
藤生野……一三八
妹與我……一三八
淺緣……一三八
青馬……一三九
妹之門……一三九
席田……一三九
大宮……一四〇
總角……一四〇
本滋……一四〇
美濃山……一四〇
眉止之女……一四一
酒飲……一四一
田中井戸……一四一
無力蝦……一四一
難波海……一四二
鈴之川……一四三
石川……一四三
奥山……一四三
奥々山……一四三
我家……一四三

東遊　一四五—一四六

駿河歌……一四五
求女子歌……一四六
於保比禮……一四六

風俗　一四七—一五四

小筑波……一四七
小由流支……一四七
玉垂……一四七
鶯鶯……一四八
之太乃浦……一四八
君乎置天……一四八

越方……一四八
小車……一四九
陸奥……一四九
甲斐……一四九
常陸……一四九
同……一四九
筑波山……一五〇
月面……一五〇
大鳥……一五〇
奈末不利……一五〇
荒田……一五一
東路……一五一
菅牟良……一五一
知々良々……一五一
我門……一五一
乎之高倍……一五二
伊勢人……一五二
加比加禰……一五二
鳴高……一五三
八乎止女……一五三
彼乃行……一五三

今様

一五五—一六四
春の初……一五五
蓬萊山……一五五
りやうぜんみやま……一五五
ふるき都……一五六
よろづの佛の……一五六
君をはじめて……一五六
佛も昔は……一五六
君があげこし……一五七
心のやみの……一五七
はくろは……一五七
佛の方便……一五七

さまも心も……一五八
月も同じ……一五八
ありのすさびの……一五八
わかれのことに……一五八
春はさくらの……一五八
あたりの野邊の……一五九
月影のみ……一五九
別のことさら……一五九
をさまりなびく……一五九
信濃にあるなる……一六〇
竹のよながは……一六〇
よしなの我等が……一六〇
心の內には……一六〇
藥師の十二の……一六一
まぜのうちなる……一六一
像法轉の……一六一
四大聲聞……一六一
熊野にましま……一六二
ちはやぶる神……一六二
春のはじめ……一六二
峰の嵐の……一六二
松の木陰に……一六三
大宮權現……一六三

雜藝

一六五—一七〇
鬢多々良……一六五
思之津……一六五
物云舞……一六五
水猿曲……一六七
伊佐立奈牟……一六八
白薄樣……一六八
春の野……一六八
國のかた……一六九
川そひ柳……一六九

ほとゝぎす……一六九
夜は誰と……一六九
又……一六九

和漢朗詠集

一七一—二九二

卷上

春……一七一
立春……一七一
早春……一七二
春興……一七三
春夜……一七四
子日 附若菜……一七五
若菜……一七六
三月三日 附桃……一七七
桃……一七八
暮春……一七八
三月盡……一七九
閏三月……一八〇
鶯……一八一
霞……一八二
雨……一八二
梅 附紅梅……一八四
紅梅……一八五
柳……一八六
花 附落花……一八八
落花……一九〇
躑躅……一九一
歎冬……一九一
藤……一九二
夏……一九二
更衣……一九三
首夏……一九三
夏夜……一九四

端午……一九四
納涼……一九五
晩夏……一九六
花橘……一九七
蓮……一九七
郭公……一九八
螢……一九九
蟬……二〇〇
扇……二〇一
秋……二〇二
立秋……二〇二
早秋……二〇三
七夕……二〇三
秋興……二〇四
秋晩……二〇六
秋夜……二〇六
八月十五夜 附月……二〇七
月……二〇九
九日 附菊……二一〇
菊……二一一
九月盡……二一二
女郎花……二一三
萩……二一三
蘭……二一四
槿……二一五
前栽……二一五
紅葉 附落葉……二一六
落葉……二一七
雁 附歸雁……二一九
歸雁……二二〇
蟲……二二〇
鹿……二二一
露……二二二
霧……二二二

擣衣……二二三
冬……二二四
初冬……二二四
冬夜……二二五
歲暮……二二五
爐火……二二六
霜……二二六
雪……二二七
氷 附春氷……二二九
春氷……二二九
霰……二三〇
佛名……二三〇

卷下

雜……二三一
風……二三一
雲……二三三
晴……二三四
曉……二三五
松……二三六
竹……二三七
草……二三八
鶴……二三九
猿……二四一
管絃 附舞妓……二四二
文詞 附遺文……二四三
酒……二四四
山 附山水……二四六
山水……二四七
水 附漁父……二四九
禁中……二五〇
古京……二五一
故宮 附故宅……二五二
仙家 附道士隱倫……二五三

山家……二五五
田家……二五六
隣家……二五七
山寺……二五八
佛事……二五九
僧……二六二
閑居……二六三
眺望……二六五
餞別……二六六
行旅……二六七
庚申……二六九
帝王 附法皇……二六九
親王 附王孫……二七一
丞相 附執政……二七二
將軍……二七四
刺史……二七五
詠史……二七六
王昭君……二七六
妓女……二七七
遊女……二七九
老人……二八〇
交友……二八一
懷舊……二八二
述懷……二八四
慶賀……二八六
祝……二八七
戀……二八一
無常……二八九
白……二九〇

新撰朗詠集

卷上

春……二九三—四〇四

立春……二九二
早春……二九四
春興……二九五
春夜……二九六
子日……二九六
若菜……二九七
三月三日 附桃……二九八
暮春……二九九
三月盡……三〇〇
閏三月……三〇一
鶯……三〇二
霞……三〇三
雨……三〇四
梅 附紅梅……三〇五
紅梅……三〇六
柳……三〇七
花……三〇八
落花……三一〇
躑躅……三一一
歎冬……三一二
藤……三一二
夏……三一三
更衣……三一三
首夏……三一四
夏夜……三一四
端午……三一五
納涼……三一六
晩夏……三一七
花橘……三一七
蓮……三一八
郭公……三一九
螢……三一九
蟬……三二〇
秋……三二一

立秋……三二一
早秋……三二二
七夕……三二三
秋興……三二四
秋晩……三二五
秋夜……三二五
十五夜 附月……三二七
月……三二八
九日 附菊……三三〇
菊……三三〇
九月盡……三三一
女郎花……三三一
萩……三三三
蘭……三三四
槿……三三四
前栽……三三五
紅葉……三三五
落葉……三三六
雁……三三八
歸雁……三三九
蟲……三三九
鹿……三四〇
露……三四一
霧……三四一
擣衣……三四二
冬……三四三
初冬……三四三
冬夜……三四三
歳暮……三四四
爐火……三四四
霜……三四五
雪……三四六
氷……三四七
春氷……三四七

霰……三四八
佛名……三四八

卷下

雜……三五〇
風……三五〇
雲……三五一
晴……三五一
曉……三五二
松……三五三
竹……三五四
草……三五五
鶴……三五六
猿……三五七
管絃……三五八
文詞 附遺文……三五九
酒……三六〇
山 附山水……三六一
山水……三六二
水 附漁父……三六三
禁中……三六五
故京……三六六
故宮 附古宅……三六六
仙家 附道士……三六八
隱倫……三六九
山家……三七〇
田家……三七一
隣家……三七二
山寺……三七三
佛事……三七五
僧……三七七
閑居……三七八
眺望……三七九
餞別……三八〇

行旅……三八一
庚申……三八三
帝王 附女帝法皇行幸……三八三
親王 附王孫……三八五
丞相 附執政……三八六
將軍……三八七
刺史……三八八
詠史……三八九
王昭君……三九〇
妓女……三九〇
遊女……三九二
老人……三九二
交友……三九四
懷舊……三九五
述懷……三九六
慶賀……三九八
祝……三九九

宴曲　四〇五—五〇二

戀……四〇〇
無常……四〇二
白……四〇三
春……四〇五
花……四〇五
春野遊……四〇七
夏……四〇八
郭公……四〇九
秋……四一〇
月……四一一
秋興……四一二
冬……四一三
雪……四一四
祝言……四一五
嘉辰令月……四一六

不老不死……四一七
神祇……四一八
吹風戀……四一九
名所戀……四二〇
樂府……四二三
伊勢物語……四二二
源氏……四二四
海道上……四二五
同中……四二七
羇旅……四二八
留餘波……四三〇
行餘波上……四三〇
同下……四三一
無常……四三三
朝……四三四
夕……四三五
年中行事……四三六

草……四三八
上下……四三九
顯物……四四一
酒……四四二
閑居……四四三
熊野參詣……四四四
同二……四四六
同三……四四七
同四……四四八
同五……四五〇
善光寺修行……四五二
同次……四五三
十六……四五五
夙夜忠……四五七
文武……四五九
朋友……四六〇
山寺……四六一

松竹……四六二
懷舊……四六三
馬德……四六五
船……四六八
寄山祝……四六七
釋教……四六八
雨……四七〇
和歌……四七一
長恨歌……四七三
風……四七四
君臣父子道……四七六
遊仙謌……四七八
雲……四八〇
管絃曲……四八一
仙家道……四八三
旅別秋情……四八五
江島景……四八六

諏訪效驗……四八八
源氏紫明兩榮花……四九〇
聖廟靈瑞譽……四九二
巨山龍峯讚……四九五
鶴岡靈威……四九七
山王威德……四九八
衣……四九九

延年唱歌　五〇三—五一二

興福寺延年舞式披露之詞……五〇三
當辨……五〇四
越天樂歌物……五〇四
開口之詞……五〇五
亂拍子一聲……五〇五
絲綸一聲……五〇六
白拍子の歌……五〇七
遊僧拍子歌……五〇七

舞催歌……五〇八
如意寶珠連事……五〇八
白拍子……五〇九

此例言は凡て原本のまゝ

紀記歌集

一日本紀古事記兩書に出たる歌は、日本紀の方にのみ出す。異同あるは、首にあぐ。但古と云は、古事記を略。

一齋明紀六年童謠は、古説有といへども、甘心しがたければ、かんな並傍書もくはへず。後の君子を待。

一左に傍書するは、一説にして、學者好所にまかす。

一下卷は古事記の歌のみ。日本紀に出たるをば出さず。

081.6
Y

こは、日本紀古事記の中に載たりける歌をとり
すべて、好けるどちのために、かつやすけくも見
えなんと、をみなもじをさへ加て、紀記歌集とぞ
いふなる。

天明八年戊申仲秋　　林居士諸鳥

古都作豆昧作微廻作衰

いづもやへがき―宣長の説に、いづもは出でたる雲にて國名に非ず、やへがきは實際の垣にあらずして、雲の立出づる形容

古妹作米同乙作於同磨墨下有美須麻流邇五字同無廻字同禰下有能迦微曾也五字

日本紀神代上一首

是時素戔嗚尊、自天、而降到於出雲國簸之川上、云云、於彼處建宮、　或云、時

武素戔嗚尊歌　之曰、古曰、玆大神初作須賀宮之時、自其地雲立騰爾作御歌其歌曰、

夜句茂多菟　伊都毛夜覇餓岐、菟磨語昧爾、夜覇餓枳菟俱盧、贈廻夜覇餓岐廻、
彌雲　やくもたつ、　出雲　いづもや　八重墻　へがき、　妻籠　つまごめに、　八重墻　やへがきつくる、　造　その　其　八重墻　やへがきを、

同　神代下五首

一書云、天照大神勅天稚彦曰、云云、或云、味耜高彦根神之妹下照媛欲令衆人知
映丘谷者是味耜高彦根神、故歌之曰、古曰、故阿治志貴高日子根神者、愁而飛去之時、其伊呂妹高比賣命思顯其名故歌曰、
阿妹奈屢夜、乙登多奈波多廻、汙奈餓勢屢、多磨廻彌素磨屢廻、阿奈陀磨波夜、彌多爾

もとたなばた―契沖云、弟織女也、久老云、音棚機也、うながせる―首に懸けたるたまのみすまる―緒にて玉を貫き統べたる也、いわたらす―いは接頭語、いしかはかたふち―久老云、一方に石あれば一方は淵なるべし、めるよしに―契沖久老等めると讀み、めは女也、るは助詞也とす、よしは久老寄せの意とす、おきつも―契沖云、萬葉にも興津藻の名延之妹など多く女に喩ふ、吾田津姫にたとへ給へり、へには―邊には也、海邊也、さねとこ―さは接頭語、はまつちどり―契沖云、千鳥は妻を戀ふる鳥なれば自らよそへ給へり

輔拖和拖邏須、阿泥素企多伽避顧禰、
天在 あめなるや、大織女 おとたなばたの、嬰 うながせる、玉統 たまのみすまるの、孔玉 あなだまはや、みたに谷
二耳 ふたわたらす、味耜高彦根 あぢすきたかひこね、

又歌之曰、

阿磨佐箇屢、避奈菟謎迺、以和多邏素西渡、以嗣箇播箇拖輔智、箇拖輔智爾、阿彌播利
和拖嗣、妹盧豫嗣爾、豫嗣豫利據禰、以嗣箇播箇拖輔智、
天離鄙女 あまさかる、ひなつめの、渡 いわたらすせと、瀬石川片淵 いしかはかたふち、片淵 かたふちに、網張 あみはり
亘見由 わたし、めるよしに、寄來 よしよりこね、石川片淵 いしかはかたふち、

皇孫因幸豐吾田津姫、則一夜而有身、云云 皇孫憂之乃爲歌之曰、

憶企都茂隋、陛爾幡譽戻耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒个茂譽、播磨津智耐理譽、
海藻濱 おきつもは、海雌寄 へにはよれども、寢床 さねとこも、不能 あたはぬかもよ、千鳥濱 はまつちどりよ、

一書云、彦火火出見尊、云云、海神則以其子豐玉姫妻之、云云、彦火火出見尊還鄉、

おきつとり―鴨の枕詞、かもつく―古事記にはかもどくとあり、わすらに―忘れず也、よのことごと―世の限也

古娜作陀又比詞利播阿利登作袁佐間比迦禮杼又比鄧播伊珮耐作斯良多麻能

あかたま―久老は吾珠とし葺不合尊をさして御母の宣へるなりとす、宣長は此說を非とせり、古事記にはあかだまはとあり

云云、豐玉姫、云云、知天孫視其私屏、深懷慙恨、云云、乃涉海徑去、于時彦火火出見尊乃歌之曰、

飫企都鄧利、軻茂豆句志磨爾、和我謂禰志、伊茂播和素邏、珥譽能據鄧駁鄧母、
澳鳥 おきつとり、鴨着島 かもつくしまに、我牽寢 わがるねし、妹不可得忘 いもはわすらに、齡盡 よのことごとも、

是後豐玉姫、聞其兒端正、云云、奉報歌曰、

阿軻娜磨迺、比訶利播阿利登、比鄧播伊珮耐、企弭我譽贈比志、多輔妬句阿利計利、
明玉 あかたまの、光有 ひかりはありと、人雖云 ひとはいへど、君裝 きみがよそひし、貴有 たふとくありけり、

同　神武紀八首

戊午年、秋八月、云云、天皇使徵兄猾及弟猾、猾此云字小志 是兩人菟田縣之魁帥者也、云云、
時兄猾不來、云云、潛伏其兵、權作新宮、而殿內施機、欲因請饗以作難、云云、
自蹈機壓死、云云、天皇云云、乃爲御謠之曰、

古離作流

たかき―契沖云、高城也、久老云、田垣也なこはさは―宣長の説には、魚(ナ)乞はさば也

なけくを―少なけくをかと宣長云ふ

こけしひゐね―宣長は、こきしと讀みて幾許とし、ひゐねは肉を薄く小さく切れの意とす

こけたひゐね―宣長は、こきだはこきしに同じと云へり

古於費異之作意斐志又珥下無夜異二字之上倍作富又布字有伊波下又能比母登富理字知氏志夜麻牟十四字之下至務三十七字無

于儻能多伽機珥、辭藝和奈破盧、和餓末菟夜、辭藝破佐夜羅孺、伊殊區波辭、區施羅佐夜離、固奈瀰餓、那居波佐麽、多智曾麽能未迺、那雞句塢、居氣儻被惠禰、宇破奈利餓、那居波佐麽、伊智佐个幾未廼、於朋雞句塢、居氣儻被惠禰、

兎田高木雛羅張我待うたのたかきに、しぎわなはる、わがまつや、雛不障しぎはさやらず、勇妙いすくはし、鯨障くぢらさやり、前妻こなみか、女子なこはさは、植たち枫棱實そばのみの、無なけくを、こけしひゐね、後妻うはなりが、女子なこはさは、嚴賢木實いちさかきみの、多おほけくを、こけたひゐね、

冬十月、癸巳朔天皇、云云、擊八十梟帥於國見丘斬之、云云、爲御謠之曰、古曰、自其地幸行到忍坂大室之時、云云然後將擊登美毘古之時歌曰、

伽牟伽筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍屢、之多儻瀰能、之多儻瀰能、阿誤豫阿誤豫、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智曳之夜莽務、于智曳之夜莽務、

神風かんかぜの、伊勢いせのうみの、海大石おほいしにや、葡匍廻いはひもとへる、細螺したどみの、細螺したどみの、吾子あごよあごよ、吾子細螺したどみの、葡匍廻いはひもとへり、擊而將息うちてしやまん、擊而將息うちてしやまん、

もとへる―諸抄もとほると讀めり

したどみ―小贏子、之太々美

もとへり―諸抄「もとほり」

古無苔毛二字

又無選字

みづみづし―宣長云、滿々しにて圓(マド)々しと言はんが如し、此は目の圓に大なる貌を云へるにて久米の枕詞也

くぶつくい―くぶはかぶに同じ、つくいはつち也、頭椎の太刀なり

あゝしやを―ああは笑聲、しやをは可笑し也

既而餘黨猶繁、云云、酒酣之後、吾則起歌、汝等聞吾歌聲、則一時刺虜、云云、道臣命乃起而歌之曰、古曰、到忍坂大室之時、云云、故明將打其土雲之歌曰、

於佐箇迺、於朋務露夜珥、比苔琥破而、異離烏利苔毛、比苔琥破而、枳伊離烏利苔毛、

瀰都瀰都志、倶梅能固邏餓、勾鶩都都伊、異志都都伊毛智、于智曳之夜莽務、古、有美都美都斯、久米能古良賀、久夫都都伊、伊母知、伊麻字多婆余良志、之句、忍坂

おさかの、大室おほむろやに、屋ひとさはに、人多いりをりとも、雖入居ひとさはに、人多きいりをりとも、來入雖居

瑞々みづみづし、來目子等くめのこらが、頭槌くぶつゝい、石槌いしつゝいもち、持擊而止うちてしやまん

時我卒聞歌、云云、仰天而咲、因歌之曰、

伊莽波豫、伊莽波豫、阿阿時夜塢、伊莽儻而毛阿誤豫、伊莽儻而毛阿誤豫、

今いまはよ、今いまはよ、あゝしやを、今いまだにもあこよ、吾子今いまだにもあこよ、吾子

又歌之曰、

愛瀰詩烏、毘儻利毛毛那比苔、比苔破易倍耐毛、多牟伽毗毛勢儒、

ひたりもゝなひと―一人を百人並みと云ふことにて一人當千の強敵の意也

古隈作惠
又輪開作須氣
伊那瑳山在兎田郡山路村一名山路山

たゝなめて―契沖云、一つには只榧をつき並べてと宣へるか、二つには其意乍ら次の伊を射になして弓を射る意につゞけさせ給へるか　われはや―はやは助詞　しまつとり―鵜の枕詞

夷（えみし）を、一人百人（ひたりもゝなひと）、人雖言（ひとはいへども）、手對不爲（たむかひもせず）、

十有一月、癸亥朔、己巳、皇師大舉、云云、而介冑之士、不無疲弊（アラツカレツヒユルコトニ）、故聊爲御（イサヽカ）

謠以慰將卒（ナグサメタマフ）之心焉、謠曰、

哆哆奈梅弖、伊那瑳能椰麻能、虛能莽由毛、易喩者麻毛羅毗、多多个陪麼、和例破椰隈奴、之摩途等利、宇个譬餓等茂、伊莽輪開珥虛禰、

盾並（たゝなめて）、いなさのやまの（山）、このまゆも（從木間）、いゆきまもらひ（行守）、たゝかへば（戰）、われはやゐ（我飢）ぬ、島鳥（しまつとり）、鵜養部（うかひがとも）、今援來（いますけにこね）、

十有二月癸巳朔丙申皇師遂擊長髓彥、云云、意欲窮誅（キハメコロサン）、乃爲御謠之曰、

瀰都瀰都志、倶梅能故邏餓、个耆茂等珥、阿波赴珥破、个瀰羅毗苔茂苔、曾廼餓毛苔、曾彌梅屠那藝、弖于苔弖之夜莽務、

瑞々（みづみづし）、久米子等（くめのこらが）、垣本（かきもとに）、栗田一莖（あはふには）、其之本（そのがもと）、

其茅繫（そねめつなぎて）、擊而將止（うちてしやまむ）、

古舊作志

われはわすれず―皇兄五瀬命の薨じ給へる憤りを忘れ給はずと也

やまとなす―契沖云、日本國を作り成す也、久老云、大和に座す也　もはものぬし―大己貴命の一名なり

又謠之曰、

瀰都瀰都志、倶梅能故邏餓、个耆茂等珥、于恵志破餓个瀰、勾致弭比倶、和例破涎輸例儒、于智弖之夜莽務、

瑞々（みづみづし）、來目子等（くめのこらが）、垣本（かきもとに）、植薑（うゑしはじかみ）、口疼（くちひゞく）、我不忘（われはわすれ）ず、擊而將止（うちてしやまむ）、

同　崇神紀六首

八年、夏四月、庚子朔、乙卯以高橋邑人活日（ノノ）、爲大神（ミワノ）之掌酒（サカヒトト）、冬十二月、云云、是日活日自擧神酒、獻天皇、仍歌之曰、

許能彌枳破、和餓瀰枳那羅孺、椰磨等那殊、於朋望能農之能、个瀰之瀰枳、伊句臂佐伊句臂佐、

此酒（このみきは）、非我酒（わがみきならず）、日本作成（やまとなす）、大物主（おほものぬしの）、釀酒（かみしみき）、幾久幾（いくひさい）

いくひさ—幾久しく聞召せ、久老は活日が自らの名を云へるにやと云へり

うまさけ—醴酒也、今のあま酒也、神に奉る酒をみわと云ふより三輪の枕詞とす

おしひらかね—押開けの意

此歌者武埴安彦將謀反之表者也

おのがををしせんと—契沖云、將殺己之夫也、久老云、己之雄略將爲也

ぬすまくし—契沖は宜ふ意とし久老は盜む意として埴安彦の帝位を窺ふ事とす

くひさ、

如此歌之宴、于神宮、卽宴竟之諸大夫等歌之曰、

宇磨佐開、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、伊弟氏由个那、瀰和能等能渡塢、

旨酒　うまさけ、大神殿　みわのとの、朝戸　あさとにも、出行　いでてゆかな、大神門戸殿　みわのとのとを、

於茲天皇歌之曰、

宇磨佐階、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、於辭寐羅箇禰、瀰和能等能渡烏、

旨酒　うまさけ、大神殿　みわのとの、朝戸　あさとにも、押開　おしひらかね、大神門戸　みわのとのとを、

十年、九月丙戌朔、甲午、以大彦命遣北陸、云云、云到於和珥坂上、時有少女、

歌之曰、

瀰磨紀異利寐胡播椰、飫廼餓烏、塢志齊務苫、農殊末句志羅珥、比賣那素寐殊望、一云於朋菩妬

庸利、于个伽卑氏、許呂佐務苫、須羅句塢志羅珥、比賣那素寐須望、

御間城入彦　みまきいりびこはや、之　おのがを、食爲　をしせんと、竊　ぬすまくしらに、不知　ひめなそびすも、

おほさか—大和葛下郡にあり

こしがてむかも—越し敢むかな

さはまき—太刀の柄に蔓を多く卷きたる也

さみなし—さみはさびに同じく刀劍の刃也

一云、自大城門　おほきどより、窺　うかがひて、將殺　ころさんと、不知　すらくをしらに、媛遊爲　ひめなそびすも、

是後、倭迹迹日百襲姫命、云云、薨、云云、是墓者、日也人作、夜也神作、故運大坂山石而造、人民相踵、以手遞傳而運焉、時人歌之曰、

飫朋佐个珥、菟藝迺煩例屢、伊辭務邏塢、多誤辭珥固佐縻、固辭个氏務个茂、

大坂　おほさかに、續登　つぎのぼれる、石礫　いしむらを、手踵　たごしにこさば、將難踵乎　こしがてむかも、

六十年、秋七月丙申朔己酉、云云、出雲振根、云云、猶懷恨忿、有殺弟之志、欺弟曰、云云、兄竊作木刀、云云、弟不得拔木刀、云云、殺之、故時人歌之曰、

椰句毛多菟、伊頭毛多雜流餓、波雜流多知、菟頭邏佐波磨枳、佐微那辭珥阿波禮、

彌雲起　やくもたつ、出雲梟師　いづもたける、帶劍　はけるたち、黑葛多纏鞘　つづらさはまき、無身何怜鋤　さみなしにあはれ、

同　景行紀五首

十七年、春三月、戊戌朔、己酉、幸予湯縣、云云、憶京都而歌之曰、

波辭枳以下至知區暮三句古以爲片歌出于後　古邇摩作呂波試下古有又歌曰三字古曾作多又志羅作久麻又延作波又許曾作

はしきよし―いとも愛すべき、よしは助詞也　まはらま―契沖は眞秀（マホ）に助詞らまの添へるとし、久老は眞平庭也とす　まそけむひと―全かちん人　たゞみこも―重（ゝ）と續けて平群のこ―此子にて陪從の臣下をさす　あさしもの―消え易き意よりきえの約けに續けて御木の枕詞とす　まへつぎみ―まうちぎみに同じ、百寮有司也

波辭枳豫辭、和藝弊能伽多由、區毛位多知區暮、夜摩苔波、區珥能摩保邏摩、多多儺豆久、阿烏伽枳夜摩許莽倒屢、夜摩苔之于漏破試、異能知能、摩曾祁務比苔波、多多瀰計莽、弊遇利能夜摩能、志羅伽之餓延塢、于受珥左勢許能固、

愛はしきよし、従吾家わぎへのかたゆ、雲居起來くもゐたちくも、倭やまとは、國くにのまほらま、秀たゝなづく、疊付

青垣山隱有倭麗あをかきやまこもれる、やまとしうるはし、命いのちの、在まそけむひとは、人たゝみこも、疊薦

平群山へぐりのやまの、白檮枝しらかしがえを、髻華刺舞臣うずにさせこのこ、

十八年、秋七月、云云、到筑紫後國御木、云云、有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、

阿佐志毛能、瀰開能佐烏麼志、魔弊菟耆彌、伊和多羅秀暮、瀰開能佐烏麼志、

朝霜あさしもの、御木渡みけのさをばし、群臣まへつぎみ、いわたらすも、御木小橋みけのさをばし、

四十年、冬十月、云云、日本武尊、云云、歷常陸至甲斐國、居于酒折宮、時擧燭而進食、是夜以歌之問侍者曰、古曰、悉言向荒夫流蝦夷等、云云、卽自其國越出甲斐、坐酒折宮之時歌曰、

にひばり―久老云、筑波にかゝる發語、新治の作墾（ツクバリ）といふ意にかさねたる也　かゞなめて―かがなべて也、指を用め並べて數ふる也、一說かかなめてと清みて讀み、日々並にて、日に日を重ねての意とす　流下古有衰邇能佐岐那流七字又阿波例作阿藝衰

はけ―佩かせ

珥比麼利、菟玖波塢須擬氏、異玖用加禰菟流、

新墾にひばり、筑波つくばをすぎて、幾夜寢いくよかねつる、

諸侍者、不能答言、時有秉燭者、續王歌之末、而歌曰、古曰、爾其御火燒之老人、續御歌以歌曰、

伽餓奈倍氏、用珥波虛虛能用、比珥波苔塢伽塢、

屈並而かゞなめて、夜九よにはこゝのよ、日夜ひにはとをかを、十日

昔日本武尊、向東之歲、停尾津濱、而進食、是時解一劍置於松下、遂忘而去、

今至於此、劍猶存、故歌曰、古同意

烏波利珥、多陀珥務伽弊流、比苔菟麻菟阿波例、比等菟麻菟、比苔珥阿利勢麼、岐農岐勢摩之塢、多知波開摩之塢、

尾張をはりに、直たゞに所むかへる、向ひとつ松まつあはれ、柯伶ひとつ松まつ、在ひとにありせば、人衣着きぬきせましを、劍佩たちはけましを、

伊與也通

あらくまつばら―久老云、まばちなる松原を云ふなるべしまりや―久老は目あり矢にて八目鏑ならんと云へり

うまびとぬちや―ぬちはどち、やは助詞

たまきはる―枕詞

うちのあそ―武内宿禰をさすいさごあれや―あれやはあらんやにて反語也

同　神功皇后紀六首

攝政元年、三月、丙申朔、庚子、命武内宿禰云云、令撃忍熊王云云、時有熊之凝者爲忍熊王軍之先鋒、則欲勸己衆、因以高唱之歌曰、

烏智箇多能、阿邏々摩莵歷邏、摩莵歷邏珥、和多利喩祇弖、莵區踰瀰珥、末利椰塢多俱陪、宇摩比等破、于摩臂苫奴知野、伊徒姑幡茂、伊徒姑奴池、伊弗阿波那和例波、多摩岐波屢、于池能阿曾餓、波邏濃知波、異佐誤阿例椰、伊弗阿波那和利破、

をちかたの（彼方）、あらくまつばら（霰松原）、まつばらに（松原）、わたりゆきて（渡往而）、つくゆみに（槻弓）、まりやをたぐへ（曾矢副）、うまびとは（貴人）、うまびとぬちや（貴人共）、いつこはも（奴）、いつこぬち（奴共）、いざあはなわれは（去來將遇我）、たまきはる（極）、うちのあそが（内朝臣）、はらぬちは（腹中）、いさごあれや（砂有）、いざあはなわれは（去來將遇我）、

時武内宿禰令三軍云云、及于狹狹浪栗林而多斬云云、忍熊王逃無處入、則喚五十狹茅宿禰而歌之曰、古云云、此時忍熊王云云、乘船浮海、歌曰、

古倍廼作本杼

あぎ―久老は吾君（アギミ）と親しみ呼ぶ辭とすかづきせな―入水せんとなり

廼倍當作耐

めにしみえねば―屍を目に見ぬ間はの意

たなかみ―近江栗本郡にて宇治川の水上也

伊裝阿藝、伊佐智須區禰、多摩枳波屢、于知能阿曾餓、句夫莵智能、伊多弖於破孺破、珥倍廼利能、个豆岐齊奈、古个上有阿布美能字美遲七字

去來吾子　五十狹茅宿禰　玉極

いざあぎ、いさちすくね、たまきはる、

内朝臣　頭槌　痛手不負

うちのあそが、くぶつちの、いたでおはずは、

鵠　鵠　潛　爲

にほどりの、かづきせな、

則共沈瀨田濟而死之、于時武内宿禰歌之曰、

阿布瀰能瀰、齊多能和多利珥、伽豆區苫利、梅珥志瀰曳泥麼、異枳廼倍呂之茂、

近江海　瀨田濟　潛　鳥　目不見　憤

あふみのみ、せたのわたりに、かづくとり、めにしみえねば、いきどほろしも、

於是探其屍而不得也、然後數日之、出於莵道阿、武内宿禰亦歌曰、

阿布瀰能瀰、齊多能和多利珥、个豆區苫利、多那伽瀰須疑氐、于旎珥等邏倍莵、

近江海　瀨田濟　潛　鳥　田上過　於莵道捕

あふみのみ、せたのわたりに、かづくとり、たなかみすぎて、うぢにとらへつ、

十三年、春二月、云云、命武内宿禰云云、皇大后擧觴以壽于太子、因以歌曰、古曰、卽入海共死也、故建内宿禰命云云、其御祖息長帶日賣命釀得酒以獻、爾其御祖御歌曰、

古等豫作加牟又茂苔作玖流又訶武作登余又玖流作母登

虛能彌企波、和餓彌企那邏孺、區之能伽瀰、等虛豫珥伊麻輸、伊波多多須、周玖那瀰伽未能、等豫保枳、保枳茂苔保之、訶武保枳、保枳玖流保之、摩菟利虛辭彌企層、阿佐孺塢齊佐佐、

くしー久老云、酒の古名也　すくなみかみー少彦名神　ほぎもとほしー祝ひめぐらし　ほぎくるほしー祝ひ狂ひて　さゝー拍子の詞

古娜作陀墓下古有麻比那都迦美祁禮禮加母十字彌企能下同有美岐能三字

このみきは、わがみきならず、くしのかみ、とこよにいます、いはたゝす、すくなみかみの、とよほぎ、ほぎもとほし、かむほぎ、ほぎくるほし、まつりこしみきぞ、あさず爲飲をせさゝ、

此酒　非我酒靈神　常世在　磐立　少御神　祝戻　祝神祝　祝來　奉來酒　不淺

武内宿禰、爲二太子一答歌之曰、

許能彌企塢、伽彌雞武比等破、曾能菟豆彌、于輸珥多氏氐、于多比菟菟、伽彌雞梅伽墓、許能彌企能、阿椰珥于多娜濃芝作沙、

このみきを、かみけんひとは、そのつゞみ、うすにたてて、うたひつて、かみけめかも、

此酒　釀人　其鼓　臼立　歌作　釀

古伽豆怒作葛野

伽豆怒ー「かづぬ」と訓ずべし、原本古事記による也　くにのほー宣長云、山の周れる中の平原也

古阿藝作古杼母三字　又無珥字　又弭作能　又辭上有波字　又无羅字　又比等未那等利作比登登理　賀良斯　又府保語茂利作本都毛理四字

同　應神紀八首

六年、春二月、天皇幸二近江國一至二菟道野上一、而歌之曰、古曰、一時天皇、越幸二近淡海國一之時、御二立宇遲野上一、望二葛野一歌曰、

知婆能、伽豆怒塢彌例麽、茂茂智儴蘆、夜珥波母彌喩、區珥能朋母彌喩、

ちばの、かどのをみれば、もゝちたる、やにはもみゆ、くにのほもみゆ、

千葉　見葛野　百箇足　家庭見　國秀見

十三年、秋九月、云云、於是天皇知二大鷦鷯尊、感二髮長媛一、而欲配、云云、因以上坐於宴席一、時搖二大鷦鷯尊一、以指二髮長媛一、乃歌之曰、古云云、於髮長比賣、令握二大御酒一、柏賜二其太子一、彌御歌曰、

伊裝阿藝、怒珥比蘆菟彌珥、比蘆菟瀰珥、和餓喩區瀰智瀰、伽愚破志、波那多智麽那、辭豆曳羅波、比等未那等利、保菟曳波、等利委餓羅辭、瀰菟愚利能、那伽菟曳能、府保語茂利、阿伽例盧塢等咩、伊弩佐伽麽曳那、

いざあぎ、ぬにひるつみに、ひるつみに、わがゆくみちに、かぐはし、はなたちばな、し、づえらは、ひとみなとり、ほづえは、とりゐからし、みつぐりの、なかつえの、ふほご

去來吾子　野蒜摘　蒜摘　我行路　香妙　花橘　下枝　人皆採　末枝　鳥集枯　三栗　中枝　含

又例作良
又无盧
又伽作佐
又曳那作余良
斯那四字

佐伽麼―さかばと訓ずべし、原本古事記によるあかれる―女のうるはしきを云ふ、いざさゝば―宣長は誘ふ意とす

古珥作能
又委愚比至辭
羅四句无
又河作知
又辭下有叙字
又于古作袁古

いやうごにして―久老はうごを痴騃の意とす

木幡地名也

こはたをとめ―髮長媛を云ふ、日向國諸縣の君が女也

古阿上有波字
又茂布作意母
布三字

もり、紅顏女あかれるをとめ、いざさゝば愛えな、

於是大鷦鷯尊、云云、便知得賜髮長媛、而大悅之、報歌曰、

瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒珥、奴那波區利、破陪雞區辭羅珥、委愚比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭雞區辭羅珥、阿餓許居呂辭、伊夜于古珥辭氏、古有伊麻叙久夜斯岐七字、

水淳みづたまる、依網池よさみのいけに、菷操ぬなはくり、延はへけくしらに、不知堰杙著るぐひつく、川派江かはまたえの、菱殼ひしがらの、刺指兼不知さしけくしらに、我心あがこゝろし、彌動而いやうごにして、

大鷦鷯尊、與髮長媛既得交殷勤、獨對髮長媛歌之曰、

瀰知能之利、古波儻塢等綿塢、伽未能語等、枳虛曳之个耐、阿比摩區羅摩區、

道後みちのしり、木幡少女こはたをとめを、神如かみのごと、雖聞きこえしかども、相枕あひまくらまく、枕

又歌曰、

瀰知能之利、古破儻塢等綿、阿羅素破儒、泥辭區塢之敍、于蘆波辭瀰茂布、

古蘆作斯

かしのふ―ふは生(フ)也、かしのふは地名
まろがち―宣長云、ちは尊稱にて吾君の意也

道後みちのしり、木幡少女こはたをとめは、不あらそはず、ねしくをしぞ、愛うるはしみもふ、思

十九年、冬十月戊戌朔、幸吉野宮、時國樔人來朝之、因以醴酒獻于天皇、而歌之曰、

伽辭能輔珥、豫區周塢菟區利、豫區周珥、伽綿蘆於朋瀰枳、宇摩羅珥、枳虛之茂知塢勢、

磨呂餓智、

白檮上かしのふに、橫曰よくすをつくり、作よくすに、橫曰かめるおほみき、釀大御酒美うまらに、きこしもちをせ、飲めし同音我まろがち、父

二十二年、春三月甲申朔戊子、天皇幸難波居於大隅宮、丁酉登高臺而遠望、時妃兄媛侍之、望西以大歎、兄媛者、吉備臣祖御友別之妹也、於是天皇問、云云、對曰、近日妾有戀父母之情、云云、聽之、云云、兄媛自大津發船而往之、天皇居高臺、望兄媛船、以歌曰、

阿波旎辭摩、異椰數多那羅弭、阿豆枳辭摩、異椰數多那羅弭、豫呂辭枳辭麼之麼、儻伽多佐例阿羅智之、吉備那流伊慕塢、阿比瀰菟流慕能、

たかたされあらちし―契沖は誰が隔て去りて有らせし意とす、久老は誰が片去らせ荒しく意とす

鏗鏘玉篇曰金玉之聲

古無紀字

しか―久老は其(シ)がとして餘りに續けて解けり

なつのき―浸漬(ナツ)の木といふ説を正しとすべし

さやさや―鏘々たる音也、本文によれば「きさやさや」と訓ずべき也

大山守者太子之異母兄太子者菟道稚郎子也

淡路島(彌二並)あはぢしま、いやふたならび、小豆島(彌二並)あづきしま、いやふたならび、美島(島)よろしきしまじま、たか(一句未詳)たされあらちし、在吉備妹(相見者)きびなるいもを、あひみつるもの、

三十一年、秋八月、云云、枯野者、伊豆國所貢之船也、是朽之不堪用、云云、取其船材爲薪、而燒鹽、云云、有餘燼(モエクヒ)、則奇(アヤシミテ)其不燼(モエ)而獻之、天皇異以令作琴、其音鏗鏘(サヤカニシテ)而遠聆(キコユ)、是時天皇歌之曰、

訶羅怒烏、之褒珥椰枳之餓阿摩離、虛等珥菟句離、訶枳譬句椰、由羅能斗能、斗那訶能異句離珥、敷例多菟、那豆能紀能紀佐椰佐椰、

枯野(燒)からぬを、(鹽餘燼)しほにやきしがあまり、(琴作)ことにつくり、(搔彈)かきひくや、(由良門兼玲瓏之音門中)ゆらのとの、となかの石(觸立)いくりに、(夏木清清)ふれたつ、なつのきのさやさや、

同　仁德紀二十三首

大山守皇子、云云、殺(コロシテ)太子(ニ)、遂登(ニラレ)帝位、云云、詣菟道(ニ)將渡(レ)河、云云、誂(アツラエテ)渡子(ニ)(ワタシモリニ)蹈(レ)船而傾(カタムケシム)、於是大山守皇子墮(レ)河而沒、更浮流之歌曰、(古曰、浮出隨水流下、卽流歌曰、)

知破椰臂苦、于旎能和多利珥、佐烏刀利珥、破椰雞務臂苦辭、和餓毛胡珥虛務、

ちはやびと(千早人)、うぢのわたりに(菟道渡)、さを(棹)とりに(取)、はやけむひとし(將捷人)、わがもこにこむ(我許)、

然伏兵多起、不得著岸、遂沈而死焉、云云、時太子視屍、歌之曰、

智破椰臂等、于旎能和多利湍、和多利湍珥多氏屢、阿豆瑤由瀰摩由彌、伊枳羅牟苦、虛虛呂破望閇耐、伊斗羅牟苦、虛虛呂破望閇耐、望苦弊破、枳瀰烏於望臂泥、須惠弊破、伊暮烏於望比泥、伊羅那雞區、曾虛珥於望比、伽那志鷄區、虛虛珥於望臂、伊枳羅儒層區屢、阿豆瑤由瀰摩由瀰、

古知破椰臂苦作知破夜夫流務恐禰之誤

ちはやびと―枕詞

古湍作是

古伽上有傳字又伊上有傳字

わたりぜに―ぜの訓古事記に據る

いらなけく―難くにあちず、苦痛(イラナク)にて、ことの外に、いたく等の義に解すべからん

ちはやびと(千早人)、うぢのわたりに(菟道渡)、わたりぜにたてる(渡瀨植)、あづさゆみまゆみ(梓弓檀弓)、いきらんと(射斬)、こころはもへど(心雖思)、いとらんと(射取)、こゝろはもへど(心雖思)、もをおもひで(思出)、いらなけく(幾歎)、そこにおもひ(彼處思)、もとへは(本邊)、きみをおもひで(君思出)、するへは(末邊)、いもを(妹)、あづさゆみまゆみ(梓弓檀弓)、いきらずぞく(不射斬來)、こゝにおもひ(此處思)、かなしけく(悲)、

十六年、秋七月戊寅朔天皇以宮人桑田玖賀媛、示近習舍人等曰、朕欲愛是婦女、苦皇后之妬不能合、以經多年、云云、卽歌曰、

瀰儺會虛赴、於瀰能烏苦咩烏、多例椰始儺播務、
水底經　臣少女　誰將養
みなそこふ、おみのをとめを、たれやしなはむ、

於是播磨國造祖速待、獨進之歌曰、

瀰箇始報、破利摩波椰摩智、以播區娜輸、伽之古俱等望、阿例椰始儺破務、
大潮　播磨速待　石崩　雖畏　吾將養
みかしほ、はりまはやまち、いはぐやす、かしこくとも、あれやしなはむ、

みなそこふ―枕詞

松記云三日之潮其流急速みかしほ―はやにかゝる枕詞也、契沖はみかに大の義ありとし、久老は嚴（イカ）の意とす

二十二年、春正月、天皇語皇后曰、納八田皇女將爲妃、時皇后不聽、爰天皇歌以乞於皇后曰、

于磨臂苦能、多菟屢虛等太氏、于磋由豆流、多由磨菟餓務珥、奈羅陪氏毛餓望、
君子　建立　設弓弦　絕間繼　雙　雖畏
うまびとの、たつることだて、うさゆづる、たゆまつがんに、ならべてもがも、

皇后答歌曰、

虛呂望虛會、赴多弊茂豫耆、瑳由耐虛烏、那羅陪務耆瀰破、箇辭古耆呂箇茂、
衣二重吉夜床雙君可畏哉
ころもこそ、ふたへもよき、さゆとこを、ならべんきみは、かしこきろかも、

かしこきろかも―ろは助詞也、よくもあらず畏き御心哉の意

天皇又歌曰、

於辭氏屢、耶珥破能瑳耆能、那羅弭破莽、那羅陪務苦虛層、曾能古破阿利雞梅、
押照難波碕濱並雙其子在
おしてる、なにはのさきの、ならびはま、ならべんとこそ、そのこはありけめ、

おしてる―枕詞

皇后答歌曰、

那菟務始能、譬務始能虛呂望、赴多弊耆氏、箇區瀰夜儻利破、阿珥豫區望阿羅孺、
夏蟲火蟲衣二重著而圍瀰人豈好乎
なつむしの、ひむしのころも、ふたへきて、かくみやたりは、あによくもあらず、
按如此邊者

ひむし―蛾、ひむしの衣は二重といふ爲めの序

天皇又歌曰、

阿佐豆磨能、避箇能烏瑳箇烏、箇多那耆珥、瀰致喩區茂能茂、多愚譬氏序豫枳、
朝妻小坂片泣道行者副好
あさづまの、ひかのをさかを、かたなきに、みちゆくものも、たぐひてぞよき、

皇后遂謂不聽、故默之亦不答言、

三十年秋九月、乙卯朔乙丑、皇后遊行紀國、云云、天皇伺皇后不在而娶八田皇女、納於宮中、時皇后到難波濟、聞天皇合八田皇女、而大恨之、云云、天皇不知皇后忿不著岸、故親幸大津待皇后之船、而歌曰、

那珥波譬苔、須儒赴泥苔羅齊、許辭那豆彌、會能赴泥苔羅齊、於朋彌赴泥苔禮、

難波人　なにはびと、　鈴船執　すゞふねとらせ、　腰惱　こしなづみ、　其船執　そのふねとらせ、　大御船執　おほみふねとれ、

すゞふねー久老云、鈴船は官船にて鈴は驛鈴の類なるべし　とらせー綱手を執れの意

時皇后、不泊于大津、更引之泝江自山背廻而向倭、明日天皇、遣舍人烏山、令還皇后、乃歌曰、古曰、天皇聞看大后自山代上幸而使舍人名謂烏山人送御歌曰、

夜莽之呂珥、伊辭鷄苔利夜莽、伊辭鷄之鷄、阿餓茂赴菟摩珥、伊辭枳阿波牟伽茂、

山背　やましろに、　及鳥山　いしけとりやま、　及及　いしけしけ、　我思妻　あがもふつまに、　及遇欲得　いしきあはんかも、

皇后不還、猶行之至山背河、而歌曰、

菟藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、箇波能朋利、涴餓能朋例婆、箇波區莽珥、多知瑳箇蹈屢、毛毛多羅儒、椰素麽能紀破、於朋耆瀰呂箇茂、毛毛以下紀破以上二句古作佐斯夫、袁佐斯夫能紀、斯賀斯多遲、游斐陁氏流、波毘呂由都婆都婆岐、斯賀波那能氏理伊麻

すゞふねー久老云、鈴船は官船にて鈴は驛鈴の類なるべし　とちせー綱手を執れの意

古之上有伊字　又茂赴菟摩作　波斯豆摩

いしけーいは接頭語、しけは追及の意

古赴下有夜字　又流作和　又區莽作能倍　又多知瑳箇蹈屢作於斐陁氏流

斯芝賀波能比呂理伊麻須波之七句、

次嶺經山背河　つぎねふ、やましろがはを、　河泝　かはのぼり、　我泝　わがのぼれば、　河隈　かはくまに、　植榮　たちさかゆる、

百不足彌抓梭　もゝたらず、やそばのきは、　大君　おほぎみろかも、　哉　おほぎみろかも、

つぎねふー枕詞也、宣長云、繼苗生山代の意也　もゝたらずー八十(ヤソ)にかゝる枕詞　おほぎみろーろは助詞

即越那羅山、望葛城歌之曰、古曰、即自山代廻到坐那良山口歌曰、

菟藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、瀰椰能朋利、和餓能朋例麽、阿烏珥豫辭、儺羅烏輸疑、烏陀氏夜莽、苔烏輸疑、和餓瀰餓朋辭區珥波、箇豆羅紀多伽瀰椰、和藝弭能阿多利、

次嶺經　つぎねふ、　山背河　やましろがはを、　宮上泝　みやのぼり、　兼我泝　わがのぼれば、　青丹吉　あをによし、　平城過　ならをすぎ、　小　を

楯山倭　だてやま、やまとを、　過　すぎ、　我見之欲　わがみがほしくには、　葛城高宮　かつらぎたかみや、　我家邊　わぎへのあたり、

一曰倭國之山如立楯也　葛城和名抄葛上郡高宮

古赴下有夜字　又苔上有夜麻二字

あをによしー奈良の枕詞也、宣長は青土(アヲニ)よし(助詞)の義とす

更還山背、興宮室於筒城岡南、而居之、古曰、如此歌而還、暫入坐筒城宮、太韓人、名奴理能美之家也、

冬十月、甲申朔、遣的臣祖口持臣、喚皇后、云云、口持臣之妹、云云、侍皇后之側、見其兄沾雨、而流涕之歌曰、

椰莽辭呂能、菟菟紀能瀰椰珥、茂能莽烏輸、和餓齊烏瀰例麽、那瀰多愚摩辭茂、

山背やましろの、筒城宮つゝきのみやに、請謂ものまをす、我兄見わがせをみれば、涙偏なみだぐましも、

云云、皇后謂之曰、告汝兄令速還、吾遂不返焉、口持臣則返之、復奏天皇、十一月、云云、天皇浮江幸山背、時桑枝沿水而流、天皇視桑枝歌之曰、

蒐怒瑤破赴、以破能臂謎餓、飫朋呂伽珥、枳許瑤怒、于羅愚破能紀、豫屢麻志枳、箇破能區莽愚莽、豫呂朋譬喩玖伽茂、于羅愚破能紀、

つぬさはふ（枕詞）、いはのひめが、おほろかに、きこさぬ、うらくはのき、よるまじき、かはのくまぐま、よろほひゆくかも、うらくはのき、

明日、乘輿詣于筒城宮、喚皇后、皇后不參見、時天皇歌曰、古曰、爾天皇御立其大后所坐殿戸、歌曰、

蒐藝泥赴、椰摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和珥、儺餓伊弊齊虛曾、于知和多須、那餓波曳儺須、企以利摩韋區例、

次嶺經つぎねふ、山背やましろめの、小鯊持こくはもち、うちしおほね、清清さわさわに、汝家ながいへせこそ、うちわたす、長莫ながはえなす、來入參來きいりまゐくれ、

つぬさはふ（枕詞）

さわ〳〵に（清清）　說驗々に也

ながいへせこそ　ながい（せこ）そ（契沖云、汝言へれこそ也）

まかずけばこそ　そ（久老は、けばを來ればの意とす）

亦歌曰、

蒐藝泥赴、夜莽之呂謎能、許玖波茂知、于知辭於朋泥、泥士漏能、辭漏多娜武枳、摩箇比佐箇多能、阿梅箇儺麼多、謎耐利餓、於瑠箇儺麼多、波梛步佐和氣能、瀰於須譬鵝泥、

次嶺經つぎねふ、山背やましろめの、小鯊持こくはもち、うちしおほね、根白ねしろの、白腕しろたゞむき、不纏まかずけばこそ、不知しらずともいはめ、

四十年、春二月、納嶋鳥皇女欲爲妃、以隼別皇子爲媒、時隼別皇子密親娶、而久之不復命、於是天皇不知有夫、而親臨嶋鳥皇女之殿、時爲皇女織繒、女人等歌之曰、古曰、女鳥王坐機而織服、爾天皇歌曰、蒐杼理能和賀意富岐美能、淤呂須波多、他賀多(爲)泥呂迦母、女鳥王答歌曰、多迦由久夜、波夜夫佐和氣能、美淤須比賀泥、

比佐箇多能、阿梅箇儺麼多、謎耐利餓、於瑠箇儺麼多、波梛步佐和氣能、瀰於須譬鵝泥、

久堅ひさかたの、天金機あめかなばた、嶋鳥めとりが、織金機おるかなばた、隼別はやぶさわけの、御環みおすひがね、

爰天皇、知隼別皇子密婚而恨之、云云、隼別皇子之舍人等歌曰、古曰、云云、其夫速總別王到來之時其妻女鳥王歌曰、比波理波、阿米迦迦氣流、多迦由玖夜、波夜夫佐和氣、佐邪岐登良佐泥、

ひさかたの（枕詞）　あめかなばた（久老云、天綺（アメカリ）の機也）

みおすひがね　（環は上の衣の類、がねは「設」の意にて「にする爲めの物」と解すべし）

破夜歩佐波、阿梅珥能朋利、等弖箇慨梨、伊兎岐餓宇倍能、娑弖岐等羅佐泥、
とらさね―取らせ給へ
隼はやぶさは、上あめにのぼり、飛翔とびかけり、いつきがうへの、槻上さゞぎとらさね、

天皇聞是歌、而勃然大怒之曰、云云、時皇子率鵠鳥皇女、云云、急走而越山、於是皇子歌曰、古曰、共逃退騰于倉埼山、於是速總別王歌曰、云云、又歌曰、波斯多氏能、久良波斯夜麻波、佐賀志祁杵、伊毛登能煩禮波、佐賀斯玖母阿良受、

破始多氏能、佐餓始杵椰摩茂、和藝毛古等、赴駄利古喩例麽、椰須武志呂箇茂、
梯立はしたての、嶮山さがしきやまも、吾妹子わぎもこと、二人越ふたりこゆれば、安席やすむしろかも、

五十年、春三月、云云、河内人奏言、於茨田堤鴈産之、云云、天皇於是歌、以問

古無破字又等保作那賀乃三字
又无儺虚曾以下至等二句
又阿耆豆辭莽作蘇良美都
又儺波企箇輸椰作岐久夜三字

武内宿禰曰、古曰、天皇云云、幸行日女島之時、於其島鴈生卵、爾召建内宿禰云云、其歌曰、

多莽耆破屢、宇知能阿曾破、儺虚曾破、豫能等保臂等、儺虚曾破、區珥能那餓臂等、阿
耆豆辭莽、椰莽等能區珥珥、箇利古武等、儺波企箇輸椰、
玉極たまきはる、内朝臣うちのあそは、汝なこそは、齢遠よのとほひと、汝なこそは、國長くにのながひと、秋あ
津洲きつしま、日本國やまとのくにに、鴈産かりこむと、汝不聞なはきかずや、

よのとほひと―世上第一の命長き人
くにのながひと―國中第一の長命者
かりこむ―鴈卵（コ）産む也、うを略す
やすみしゝ―八方を知らす也、知らすは治め給ふ意也　眞淵宣長は安けく見給ふ意とす

武内宿禰答歌曰、

夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰波、于倍儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、阿企菟辭摩、椰莽等能
俱珥珥、箇利古武等、和例波枳箇儒、古曰、多迦比迦流、比能美古、宇倍志許曾、斗比多麻閑、麻許曾邇、斗比多麻閑、阿禮許曾波、余能那賀乃、比登蘇良美都夜、麻登能久邇國、加理古牟登、伊麻陀岐加受、
八隅知之やすみしし、我大王わがおほきみは、諾諾うべなうべな、我問われをとはすな、秋津洲日本やまとの
國くにに、鴈産かりこむと、我不聞われはきかず、古曰、如是白而殺給御琴、歌曰、那賀美古夜、都邑邇斯良牟登、加理波古牟良斯、

八十七年、春正月、云云、爰仲皇子畏有事、將殺太子密興兵圍太子宮、云云、
扶太子令乘馬、而逃之、云云、至于飛鳥山、遇少女於山口、問之曰、云云、
宜廻自當摩徑踰之、太子於是以爲聆少女言、而得免難、則歌之曰、古曰、伊邪本和氣命、云云、
爾天皇歌曰、多遲比奴邇、云云、到於波邇坂、云云、亦歌曰、波邇布邪迦、云云、故到幸大坂山口之時云云、爾天皇歌曰、

於朋佐箇珥、阿布夜烏等謎烏、瀰知度沛麽、哆駄珥破能邏孺、哆嵯摩知烏能流、
大坂おほさかに、遇逢少女おあふやをとめを、路問みちとへば、直不告たゞにはのらず、當摩徑告たぎまちをのる、

一古沛作閑
たゞにはのらず―直徑（タヾ

ミチ）を告げざる也　たぎまぢ―大和の當麻に至る路にて岩屋越と云ふ

さくがねのくも原本―さくがねを山名として、くもを雲とせり、普通には蜘蛛の事也、さくがねは篠に住む蟹の義と云ふ、久老は篠が根の組むといふにかけて蜘蛛の枕詞とすと也、さくがねは又さくがにと訓じ、小蟹の義とする説もあり　さゞらかた―細紋也　はなぐはし―櫻をほむる詞、櫻は衣通姫をたとふ　ことめでば―久老はことを如是の意とす、めでば、と濁れるは原本、一説ことめでは、と清みて訓じ、斯く特に愛する事は、の義とす、從ふべかちん　きみもあへやも―やもは願の辭　奈能利曾毛―莫告（ナノリソ）藻也、神馬藻（ホンダハラ）のこと

古娜作陋下同　又那企作杼比　又儺句菟摩作登布伊毛袁　又箇作斯　又曾下有波字　又津娜作波陀　或去曾衍　又摩下有袁字

わがとふ、したなき―凡て古事記に依りて訓じ、原文と一致せず　はだふれ―逢ふ

同　允恭紀七首

八年、春二月、幸于藤原、云云、是夕衣通郎姫戀天皇而獨居、其不知天皇之臨而歌曰、

和餓勢故餓、句倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、
わがせこが（吾夫）、くべきよひなり（可來夜也）、さゞがねの（篠嶺）、くものおこなひ（雲行）、こよひしるしも（今夜驗）、

天皇聆是歌、則有感情、而歌之曰、

佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳舍氣帝、阿麻哆絆泥受邇、多儺比等用能未、
さゞらかた（小形）、にしきのひもを（錦紐）、ときさけて（解離）、あまたはねずに（數不褻）、たゞひとよのみ（唯一夜而已）、

明旦、天皇見井傍櫻華、而歌之曰、

波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麽、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、
はなぐはし（花細）、さくらのめで（櫻愛）、ことめでば（殊）、はやくはめでず（早不愛）、わがめづるこら（吾愛子等）、

十一年、春三月、云云、幸茅渟宮、衣通郎姫歌之曰、

等虛辭倍邇、枳彌母阿閉椰毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、
とこしへに（常）、きみもあへやも（君遇哉）、いさなとり（鯨魚取）、うみのはまもの（海濱）、よるときどきを（寄時時）、

時天皇謂衣通郎姫曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱藻、謂奈能利曾毛也、

二十三年、春三月云云、木梨輕皇子、云云、同母妹輕大娘皇女、云云、遂竊通、云云、歌之曰、（古曰、天皇崩之後云云、奸其伊呂妹輕大郎女而歌曰、）

阿資臂紀能、椰摩娜烏菟絢利、椰摩娜箇彌、斯哆娜烏和之勢、志哆那企貳、和餓儺句菟摩、箇哆儺企貳、和餓儺句菟摩、去罅去曾、椰主區津娜布例、
あしびきの（足曳）、やまだをつくり（山田佃）、やまたかみ（山高）、したひをわしせ（下樋爲弖）、したとひに（下問）、わがとふいもを（吾問妹）、したなきに（下泣）、わがなくつまを（吾泣妻）、こぞこそは（昨夜）、やすくはだふれ（易膚觸）、

二十四年、夏六月、云云、太子是爲儲君不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、是時太

子歌之曰、

於褒企瀰烏、志摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓弊利去牟鋤、和餓哆哆瀰由梅、去等烏許曾、哆哆瀰等異絆梅、和餓菟摩烏由梅、

大君者指皇女
わがたゝみ―久老云、古旅行人の後に疊にあやまち有る時は其旅人に禍ありといふ諺あれば、屋中をもはかずつゝしめる意
古瀰作志

おほぎみを、しまにはぶり、ふなあまり、いかへりこんぞ、わがたゝみゆめ、ことをこそ、たゝみといはめ、わがつまをゆめ、

大君 放流於島 舟餘 歸來 我疊 努力 言 我妻 努 將 云 疊

又歌之曰、

古曰、故大前小前宿禰云云、其太子被捕歌曰、

阿摩儺霧、箇留惋等賣、異哆儺个歷、臂等資利奴陪瀰、幡舍能夜摩能波刀能、資哆儺企邇奈句、

あまたむ、ゐるをとめ、いたなかば、ひとしりぬべみ、はさのやまのはとの、したなきになく、

天飛 輕娘子 痛泣 人可知 羽狹山鳩 下泣 泣

同　安康紀二首

あまたむはとぶに同じ、飛ぶ鳥の雁とかけて輕といふ地名の枕詞とす
羽狹山在大和國吉野郡

時太子、云云、匿物部大前宿禰之家、穴穂皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穂皇子歌之曰、

古允恭段曰、穴穂御子興軍圍大前小前宿禰之家、爾到其門時、零大氷雨、故歌曰、

於朋摩弊、烏摩弊輸區逕餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅泥、阿梅多知夜梅牟、

大前 小前宿禰 金門蔭 如此立寄 雨忽止

おほまへ、をまへすくねが、かなとかけ、かくたちよらね、あめたちやめん、

大前宿禰答歌之曰、

古曰、爾大前小前云云、其歌曰、

瀰梛比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥岐等、瀰梛比等等豫牟、佐杜弭等茂由梅、

宮人 脚帶 小鈴 宮人 響動 里人 亦努力

みやびとの、あゆひのこすゞ、おちにきと、みやびとゝよむ、さとびともゆめ、

古多智豫羅泥作余埋許泥四字
かなとかげ―久老云、垣之門陰也

同　雄略紀九首

眉輪王、云云、逃入圓大臣宅、云云、天皇復益興兵、圍大臣宅、大臣出立於庭索脚帶、時大臣妻持來脚帶、愴矣傷懷、而歌曰、

ユヒヲ　カナシミイタミテ

飫瀰能古簸、多倍能婆伽摩鳴、那那陛鳴絁、儞播儞陀陀始諦、阿遙比那陀須暮、

なゝへをしーをしは召す也、著ること

吉野磨等能作美延斯怒能又羅能作漏賀又柯作曾又乍擧能居登四字一本麼陛作枳彌古飫袁上有夜須美斯志和賀古簸作能古賊據以下枳能以上二句作斯志麻邪登一句一本陀陀伺作伊麻伺古同古施邪以下西麼以上六句作斯漏多閇能猷氏岐猷那布二句

臣子おみのこは、拷たへのはかまを、七重爲なゝへをし、庭立にはにたゝして、脚帶正あよひなだすも、

四年秋八月、云云、幸于河上小野、云云、欲躬射而待、虻疾飛來嚙天皇臂、於是蜻蛉忽然飛來、齧蠅將去、天皇嘉厥有心、詔羣臣曰、爲朕讃蜻蛉歌賦之、群臣莫能敢賦者、天皇乃口號曰、

野磨等能、鳴武羅能陀該爾、之之符須登、拖例柯擧能居登、飫袁磨陛爾麻鳴須、飫袁枳瀰簸、賊據鳴枳舸斯題、拖磨磨枳能、阿娛羅爾陀陀伺、施都麼枳能、阿吳羅爾陀陀伺、斯斯麼都登、倭我伊麻西麽、佐謂麻都登、倭我陀陀西麽、陀俱符羅爾、阿武柯枳都枳都、曾能阿武鳴、婀枳豆波野俱辟、波賦武志謀、飫袁枳瀰爾磨都羅符、儺我柯陀播於柯武、婀岐豆斯麻野麻登、一本以波賦武志謀以下、易柯矩能御等、雜儛於婆武登猷羅瀰豆、野磨等能矩爾鳴、婀岐豆斯麻登以府、

大和やまとの、小室嵩をむらのたけに、鹿伏しゝふすと、誰此たれかこのこと、大前奏おほまへにまをす、大王おほきみは、其聞而そこをきかして、玉纏たまきの、胡床立あぐらにたゝし、倭文纏しづまきの、胡床立あぐらにたゝし、しまつと、朕坐わがいませば、猪待しゝまつと、朕立わがたゝせば、手肪たくぶらに、虻掻着あむかきつき、其そ

一本波賦武志謀以下云云同于古無都字又俱符作古牟

たくぶらー臂はふむしー昆蟲そちみつー枕詞

古無阿西鳴三字阿西恐阿吳誤契曰與阿阿波例同意

うだきー吼ゆること

ありをー在尾也、尾は山の峯の引延へたる所

虻のあむを、蜻蛉疾齧あきつはやくひ、蚊蟲はふむしも、大王奉仕おほきみにまつらふ、汝形置ながかたはおかん、秋津洲日本きつしまやまと、一本はふむしも以下、如斯名負虛空見そちみつ、日本國やまとのくにを、秋津洲あきつしまといふ、

因讃蜻蛉、名此地爲蜻蛉野、

五年春二月、天皇挂獵于葛城山、云云、嗔猪從草中暴出逐人、云云、天皇詔舍人曰、云云、舍人性懦弱、云云、於是田罷、欲斬舍人、舍人臨刑而作歌曰、古曰、其猪怒而字多岐依來云云、故天皇畏其字多岐、登坐樑上、爾歌曰、

野須瀰斯志、倭我飫袁枳瀰能、阿蘇麽斯志、斯斯能古有夜斯斯志能五字、宇拖枳、舸斯固瀰、倭我尼碍能褒利志、阿理鳴能宇倍能、波利我曳陀阿西鳴、八隅知やすみしし、我大王わがおほきみの、遊あそばしし、猪しゝのうだき、抱畏かしこみ、我逃登わがにげのぼり、荒立上しゝありをのうへの、樑ばりがえだ枝あせを、

六年春二月、壬子朔乙卯、天皇遊于泊瀨小野、觀山野之體勢、慨然興感歌曰、

舉暮利矩能、播都制能野磨播、伊底拖智能　與盧斯企野磨、和斯里底能、與盧斯企野磨

こもりくの―眞淵は山に圍まれたるこもり國の義とす、長谷にかゝる枕詞也
いでたち―出の立てる姿
やまと―原文に據れば「と」の字衍か
わしりで―山の引延へたる姿
うちぐはし―うちは心の義也、心にしみてよき意

能、據暮利矩能、播都制能夜麻播、阿野儞于羅虞波斯、阿野儞于羅虞波斯、
こもりくの、はつせのやまは、いでたちの、よろしきやまと、わしりでの、よろしきや
まの、こもりくの、はつせのやまは、あやにうらぐはし、あやにうらぐはし、
於是名小野、曰道小野、
十二年冬十月、癸酉朔壬午天皇、云云、木工闘鷄御田、云云、時有伊勢采女、云云、覆所擊
饌、天皇使疑御田奸其采女、自念將刑而付物部、時秦酒公侍坐、欲琴聲使悟
於天皇、横琴彈曰、
柯武柯嗤能伊勢能、伊勢能奴能、娑柯曳鳴、伊褒甫流柯枳底、志我都矩屢麻泥儞、飫
褒枳瀰儞、柯拖倶都枳倍、麻都羅武騰、倭我伊能致謀、那我倶母鵝騰、伊比志拖倶瀰皤
夜、阿拖羅陀倶彌皤夜、
かむかぜのいせの、いせのぬの、さかえを、いほふるかきて、しがつくるまでに、おほ
ぎみに、かたくつかへ、まつらむと、わがいのちも、ながくもがなと、いひしたくみはや、

疑伊勢能三字衍
いほふる―契沖は、いは發語の詞、ほふるは所含なりとし、久老は五百世經なりとす
がなと―原文に據れば「な」の字衍か

やまのめの―めはべと通ず
こしまこゆるに―小島子の爲めなれば
しがなけば―汝が亡き身となりたちんには

あたらたくみはや、
於是天皇悟琴聲而赦其罪、
十三年春三月、狹穗彦玄孫齒田根命、竊姦采女山邊小島子、天皇聞、云云、齒田根命、
以馬八匹大刀八口、被除罪過、既而歌曰、
耶麼能謎能、古思麼古喩衞爾、比登涅羅賦、宇麼能耶都礙播、鳴思稽矩謀那斯、
やまのめの、こしまこゆるに、ひとねらふ、うまのやつげは、をしけくもなし、
秋九月、木工猪名部直根、云云、付物部使刑於野、爰有同伴巧者、歎惜眞根、而
作歌曰、
婀拖羅斯枳　偉儺謎能陀倶瀰、柯該志須彌儺播、旨我那稽麼、拖例柯柯該武豫、婀拖羅
須瀰儺播、
あたらしき、ゐなめのたくみ、かけしすみなは、しがなけば、たれかかけむよ、あたら
すみなは、

天皇聞是歌云云、乃以赦使乘於甲斐黑駒馳詣刑所止而赦之、用解徽纏復作歌曰、

農播拖磨能、柯彼能炬盧古麽、矩羅枳制播、伊能致志儺麽志、何彼能倶盧古麽、
射干玉ぬばたまの、甲斐黒駒かひのくろこま、鞍被くらきせば、命死いのちしなまし、甲斐黒駒かひのくろこま、

一本伊能致志儺麽志作伊志柯孺阿羅麽志

ぬばたまの一扇扇の實の黑きより、黑の枕詞とす

二十三年八月、云云、是時征新羅將軍吉備臣尾代、云云、從家來會蝦夷於娑婆水門、合戰射蝦夷等、云云、乃立弓執末、而歌曰、

瀰致儞阿賦耶、嗚之慮能古、阿每儞舉曾、枳舉曳孺阿羅每、矩儞儞播、枳舉曳底那、
路逢みちにあふや、尾代をしろのこ、子天あめにこそ、不聞有きこえずあらめ、地くにには、聞きこえてな、

唱訖自斬數人、

同　顯宗紀四首

白髮天皇二年、冬十一月、云云、天皇謂兄億計王曰、避亂於斯年踰數紀、顯名著貴方屬今宵、云云、乃起節歌曰、

伊儺武斯廬、哿簸泝比野儺擬、寐逗愈凱麽、儺弭企於己陀智、曾能泥播宇世儒、
稻席いなむしろ、河傍かはそひやなぎ、水行みづゆけば、靡起なびきおこたち、彼根不亡そのねはうせず、

五年春正月白髮天皇崩、是月皇太子億計王、與天皇讓位、久而不處、由是天皇姊飯豐青皇女、於忍海角刺宮臨朝、秉政、云云、當世詞人歌曰、

野麻登陛儞、瀰我保指母能婆、於尸農瀰能、莒能拖苛紀儺屢、都奴娑之能瀰野、
日本邊やまとべに、見之欲者みがほしものは、忍海おしのみの、此高城在このたかきなる、角刺つのさしのみや、

元年二月、戊戌朔壬寅詔曰、先王遭離多難、殞命荒郊、云云、求御骨莫能知者、云云、
置目知オキメ御骨埋處、云云、於蚊屋野中、云云、老嫗奉詔鳴鐸而進、天皇遙聞鐸聲、歌曰、
古曰、此天皇求其父王市邊王之御骨、云云、賜名號置目、云云、其所住屋者、近作宮邊、每日必召、云云、欲召其嫗之時、必引鳴其鐸、爾作御歌曰、云云、

阿佐臘簸囉、嗚贈禰嗚須擬、謨謀逗拖甫、奴底喻羅倶暮與、於岐每倶羅之慕、
淺茅原あさぢはら、尾曾村をそねをすぎ、過もゝづたふ、傳鐸ぬでゆらぐもよ、琦置おきめくらしも、

いなむしろ一枕詞也、東滿の說に、褥席（イネムシロ）皮といふを川に言ひ掛くあてたち一ふきたちと訓むべし

おしのみの一久老はおしぬみのと訓めり

古鳴贈禰鳴須擬作褥陀禰褥須疑氏古與作夜あさぢはら云々

一延佳の説に第三句迄は鐸といふべき序也もゝづたふ―久老云、百道（モヽチ）傳也、野道（ヌテ）とつゞきて鐸に掛くもよ―咏歌辭

古與作夜又甫作布

二年九月、置目老困、云云、願歸桑梓、以送厥終、云云、乃賜歌曰、古曰置目云云、天皇見送歌曰、

於岐毎慕與、阿甫彌能於岐毎、阿須用利籤、彌野磨我倶利底、彌曳孺哿謨阿羅牟、

置目　淡海置目　自明日　山隱　不見　有

おきめもよ、あふみのおきめ、あすよりは、みやまがくりて、みえずかもあらむ、

同　武烈紀九首

一本以之褒世易彌儺斗

十一年億計天皇崩、云云、於是太子、云云、期會、影媛會妊眞鳥大臣男鮪、云云、奉待海柘榴市巷、云云、執影媛袖、云云、俄而鮪臣來、排太子與影媛間立、由是太子放影媛袖、移廻向前立、直當鮪歌曰、

之褒世能、儺嗚理嗚彌黎麽、阿蘇寐倶厦、思寐我籤多泥儞、都摩陀氏理彌喩、

潮瀬　波殘見　遊來　鮪　妻立見

しほせの、なをりをみれば、あそびくる、しびがはたでに、つまたてりみゆ、

鮪答歌曰、

飫瀰能古能、耶陛耶哿羅哿枳、瑜厦世登耶瀰古、

臣子　韓垣　縱　與ノ意　皇子

おみのこ、やへやからがき、ゆるせとやみこ、

太子歌曰、

飫褒拖揖嗚、多黎播枳多揖弓、農哿儒登慕、須衞婆陀志弓謀、阿波夢登茹於謀賦、

大刀　垂帶立　雖不避　末果　逢　念

おほだちを、たれはきたちて、ぬかずとも、すゑはたしても、あはむとぞおもふ、

鮪臣答歌曰、

飫褒枳瀰能、耶陛能矩瀰哿枳、哿々梅騰謀、儺嗚阿摩之耳彌、哿々農倶彌柯枳、

大王　八重組垣　雖結　不結組

おほぎみの、やへのくみがき、かゝめども、なをあましにや、かゝぬくみがき、

（みに）

太子歌曰、

於彌能姑能、耶賦能之魔柯枳、始陀騰余瀰、那爲我與黎據魔、耶黎夢之麽柯枳、一本以耶賦能之

臣子　八重柴垣　下響　地震　沟來　將破柴垣

おみのこの、やふのしばがき、したとよみ、なゐがよりこば、やれむしばがき、

太子贈影媛歌曰、

魔枳、易耶陛哿羅哿枳、

を鮪の名によりて鱘手とのたまへり

やへやからがき―原本「やえ」に作る、久老云、八重竹幹垣也

ぬかずとも―久老云、雖不拔也、影媛をゆるさぬに譬ふ

くみがき―久老は隱（コモリ）垣の義とす

耳彌―契沖は弭儞の誤とす

なをあましにや―久老云、名を甘鮪に也

賦疑陛歟

契云八府

よりこば―よはゆに通ず

舉臘我瀰爾、枳謂屢箇皚比謎、梔摩儺羅麽、婀我褒屢柁摩能、婀波寐之羅陀魔、
琴頭　來居影姫　珠有
ことがみに、きゐるかげひめ、たまならば、
吾欲珠　顯眞珠
あがほるたまの、あはびしらたま、

あはびしらたま―影媛の美容を譬ふ

鮪臣爲影媛答歌曰、

於褒枳瀰能、瀰於寐能之都波拖、夢須寐陀黎、陀黎耶始比登謀、阿避於謀婆儺倶爾、
大君　御帶　倭文機　結　垂　誰　人　不　相　念
おほぎみの、みおびのしづはた、むすびたれ、たれやしひとも、あひおもはなくに、

たれやし―やしは助詞

太子甫知鮪曾得影媛、云云、戮鮪臣於乃樂山、是時影媛逐行戮處、云云、遂作歌曰、
ハジメテ　コロシツ　ヲ　ナラヤマニ　コロサル、トコロ
伊須能箇瀰、賦屢鳴須擬底、舉慕摩矩羅、拖箇播志須擬、暮能娑播儺、於褒野該須擬、播
屢比能、箇須我鳴須擬、逗摩御暮屢、鳴佐褒鳴須擬、拖摩該儺播、伊比佐倍母理、拖摩
暮比儺、瀰逗佐倍母理、儺岐曾褒遲喩倶謀、柯碍比謎阿婆例、
石上　過布留　蒋枕　高橋過　物多　大宅過　春
いすのかみ、ふるをすぎて、こもまくら、たかはしすぎ、ものさはに、おほやけすぎ、はる
日　春日　過　妻隱　佐保過　玉笥　飯　盛　玉
びの、かすがをすぎ、つまごもる、をさほをすぎ、たまけには、いひさへもり、たま
盌　水盛　泣沾　行　影媛　何怜
もひに、みづさへもり、なきそぼちゆくも、かげひめあはれ、

こもまくら―枕詞也、枕の高き意につゞくものさはに―枕詞也、公とつゞけて地名の大宅に掛く

於是影媛收埋畢、云云、歌曰、
五字未詳脫句歟、
婀鳴儺與志、乃樂能婆娑摩儺、斯々貳暮能、瀰逗矩陛御暮黎、瀰儺曾々矩、思寐
能和倶吾鳴、阿娑理逗那偉能古、
青丹吉　乃樂谷　鹿　子　勿求食　猪子　水潤邊隱　水灑　餙　稚
あをによし、ならのはざまに、しゝじもの、みづくべごもり、みなそゝぐ、しびのわく
ごを、あさりつなるのこ、

同　繼體紀四首

七年九月勾大兄皇子、親聘春日皇女、於是月夜清談、不覺天曉、斐然
カヲ　ノ　ヲスガラモノガタリシテ　アケヌルヲ　フミツクル
之藻忽形於言、乃口唱曰、
ノミヤビ　ニ　フラバル
野絁磨倶儺、都磨磨祁哿泥底、播屢比能、賀須我能倶儺儺、倶婆絁謎鳴、阿唎等枳枳底、
與慮志謎鳴、阿唎等枳枳底、莽紀佐具、避能伊陀圖鳴、飫斯毘羅枳、倭例以梨魔志、阿
都圖利、都磨怒唎絁底、魔倶囉圖唎、都磨怒唎絁底、伊慕我堤鳴、倭例儺魔柯絁每、倭

はるびの―枕詞也、霞むと續けて春日に掛くつまごもる―枕詞、眞淵云、端（ツマ）の手にこもる籠とつゞくを小籠（チサ）と掛けたりしゝじもの―鹿の如き物みづくべごもり―久老はべを濁らず、水就隱（ミヅキコモリ）の義とすわくご―壯士の義あさりつな―久老云、慕を發かむを恐れて云へるならむ

我堤嗚麽、伊蔡儞魔柯絁毎、磨左棄逗囉、多多企阿藏播梨、矢自矩矢盧、于魔伊儞矢度儞、儞播都等唎、柯稽播儺倶儺梨、奴都等唎、枳蟻矢播等余武、婆絁稽矩謨、伊麻娜以幡孺底、阿開儞啓梨倭蟻慕、

八洲國妻覓不得春日やしまぐに、つまままきかねて、はるびの、春日國かすがのくにに、妙女くはしめを、在ありときゝて、

淑女よろしめを、在ありときゝて、聞眞木割まきさく、檜板戸ひのいたどを、押開おしひらき、吾入われいりまし、あ

取衣裔ととり、つまどりして、爲枕まくらとり、取衣裔つまどりして、妹いもがてを、吾手われにまかしめ、吾枕

手がてをば、妹いもにまかしめ、令枕薜荔まさきづら、叩糾たゝきあざはり、宍串しゝくしろ、味寢うまいねしとに、

庭津鳥にはつどり、雞鳴在かけはなくなり、野津鳥ぬつどり、雉響動きゝしはとよむ、愛はしけくも、未言いまだいはず

而明て、吾妹あけにけりわぎも、

妃和唱曰、

筥母唎矩能、簸都細能哿婆庾、那我例倶屢駄開能、以矩美娜開余囊開、謨等陛嗚麽、筥等儞都倶唎、須衞陛嗚麽、府曳儞都倶唎、府企儺須、美母盧我紆倍儞、能朋梨陀致、倭

わがてをば―「ば」文字原文によりて補ふ
たゝきあざはり―久老は手抱の義とす
しゝくしろ―久老云、啖（クシ）呂（助詞）酒（クシ）也
にはつどり―枕詞
ぬつどり―枕詞

我彌細麽、都奴婆播府、以簸例能伊開能、美儺矢駄府、紆嗚謨紆倍儞、堤堤那皚矩、野須美矢矢、倭我於朋枳美能、於魔細屢、婆佐羅能美於寢能、武須彌陀例、駄利夜矢比等母、紆陪儞泥堤那皚矩、

隱口從泊瀨川流來竹こもりくの、はつせのかはゆ、ながれくるたけの、幾三竹いくみたけよたけ、四竹本邊もとべをば、箏こ

造末邊とにつくり、するべをば、造笛ふえにつくり、吹鳴ふきなす、三諸みもろがうへに、上登立のぼりたち、我わ

見羅がみせば、つぬさはふ、盤余池いはれのいけの、水下みなしたふ、經魚うをもうへに、上出でてなゆく、欺八や

隅知すみしゝ、我大君わがおほきみの、所帶おはせる、御帶さゝらのみおびの、結垂むすびたれ、誰人たりやしひと

上うへにでてなゆく、

二十四年、云云、冬十月調吉士至自任那、奏言、云云、是歲毛野臣、被召到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、

比櫟賀駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿府美能野、愷那能倭倶吾何、輔曳符枳能朋樓、

從平潟ひらかたゆ、笛吹浜ふえふきのほる、近江あふみのや、毛野若子けなのわくごが、笛吹浜ふえふきのぼる、

いくみたけ―久老云、節込（ヨコミ）竹也
いはれ―原本「いわれ」おはせる―原文に據れば「おませる」と訓ずべし
さゝら―前に註したる「さゝちかた」に同じ
あふみのやーのやは助詞
けなー「な」は「ぬ」の轉

目頬子初到任那時、在彼郷家等贈歌曰、

柯羅屨儞嗚、以柯儞輔居等所、毎豆羅古枳駄樓、武哿左屨樓、以祇能和駄唎嗚、梅豆羅古枳駄樓、

韓國からくにを、如何言事いかにふことぞ、目頬子來めづらこきたる、向放むかさくる、豆岐渡いきのわたりを、目頬子來めづらこきたる、

いかにふ―「ふ」は「いふ」の略
めづらこ―珍しき意を掛く
むかさくる―相對ひ乍ら離れたる

同　欽明紀二首

二十三年秋七月、云云、遣大將軍、云云、時所虜調吉士伊企儺、云云、見殺、云云、其妻大葉子、亦並見禽、愴然而歌曰、

柯羅倶儞能、基能倍儞陀致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、耶魔等陛武岐底、

韓國からくにの、城邊立きのへにたちて、大葉子おほばこは、領巾振ひれふらすも、日本方向やまとへむきて、

或有和曰、

ひれ―領巾は女のかくるもの、そを振るは懐郷の意なり

柯羅倶儞能、基能倍儞陀陀志、於譜磨故幡、比禮甫羅須彌喩、那儞婆陛武岐底、

韓國からくにの、城邊立きのへにたゝし、大葉子おほばこは、領巾振ひれふらすみゆ、難波方向なにはへむきて、

同　推古紀三首

二十年春正月辛巳朔丁亥、置酒宴群卿、是日大臣上壽、歌曰、

夜須彌志斯、和餓於朋耆彌能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、異泥多多須、瀰蘇羅嗚彌禮麼、豫呂豆余珥、訶句志茂餓茂、知余珥茂、訶句志茂餓茂、知余珥茂、訶句志茂餓茂、

訶之胡彌氏、菟伽倍摩都羅武、烏呂餓彌弖、菟伽倍摩都羅武、宇多豆紀摩都流、

八隅知やすみしし、我大君わがおほきみの、隱坐かくります、天あまの八十蔭やそかげ、出立いでたゝす、虛空見みそらをみれば、萬歲よろづよに、如此かくしもがも、欲得ちよにも、如此かくしもがも、欲得千歲ちよにも、如此かくしもがも、欲得

段而かしこみて、奉つかへまつらむ、拜をろがみて、而奉つかへまつらむ、仕奉うたづきまつる、

天皇和曰、

やそかげ―日の御影を云ふ、天皇の御事也
うたづきまつる―此の壽詞（ヨゴト）を獻りて仕へ奉る也

摩蘇餓豫、蘇餓能古羅破、宇摩奈羅麼、譬武伽能古摩、多智奈羅麼、句禮能摩差比、宇倍之訶茂、蘇餓能古羅烏、於朋枳彌能、菟伽破須羅志枳、

眞蘇我　蘇我子等　馬在　日向駒　太刀在　吳眞鋤諸

まそがよ、そがのこらは、うまならば、ひむかのこま、たちならば、くれのまさび、う

蘇我子等　大君　仕

べしかも、そがのこらを、おほぎみの、つかはすらしき、

二十一年十二月庚午朔、皇太子遊行於片岡、時飢者臥道垂、云云、視之、云云、則歌之曰、

斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾慧弓、許夜勢屢、諸能多比等阿波禮、於夜那斯爾、那禮奈理雞迷夜、佐須陀氣能、枳彌波夜那祇、伊比爾惠弓、許夜勢留、諸能多比等阿波禮、

しなてる—眞淵は科(シナ)阪立てる義とす、科は階級の意　いひにゑて—「ゑて」は「うゑて」の略　こやせる—臥せる　さすたけの—枕詞

片岡山　飢而所展　彼旅人　柯怜　親無　汝

級照　しなてる、かたをかやまに、いひにゑて、こやせる、そのたびとあはれ、おやなしに、な

成　刺竹　君　無

れなりけめや、さすたけの、きみはやなき、いひにゑて、こやせる、そのたびとあはれ、

同　舒明紀一首

まそがよ—まは接頭語也　まさび—刀のこと

大臣將殺境部臣、云云、以絞之、云云、兄子毛津逃匿于尼寺瓦舍、云云、入畝傍山、云云、死山中、時人歌曰、

于泥備椰摩、虛多智于須家苔、多能彌个茂、氣菟能和區吳能、虛茂邏勢利祁牟、

畝傍山　木立　雕　薄　毛津若子　隱

うねびやま、こだちうすけど、たのみかも、けづのわくごの、こもらせりけむ、

うすけど—うすけれど

同　皇極紀七首

元年辛亥是歲蘇我大臣蝦蟆立己祖廟於葛城高宮、而爲八佾之儛、遂作歌曰、

野麻騰能、飫斯能毘稜栖嗚、倭拖羅務騰、阿庸比拖豆矩梨、擧始豆矩羅符母、

大和　忍　廣　瀨　將渡

やまとの、おしのひろせを、わたらむと、

脚帶　作　腰　裝

あよひたづくり、こしづくらふも、

あよひ—あゆひに同じ　たつくり—たは接頭語、つくりはつくろひ也

二年冬十月、云云、戊午蘇我入鹿獨謀、將廢上宮王等、而立古人大兄爲天皇、于時有童謠曰、

伊波能杯儛、古佐屢渠梅野矩、渠梅多儛母、多礙底騰袁囉栖、歌麻之之能烏賦、

たげて―契沖は擧げての義とし久老は手揚げてに奪ふ意ありとす

制羅木名乎
にごれ―久老はにごてと訓み柔手とす

きて三字疑衍
さきて―久老は拆手として醜くもそろしき手の意とす

石上小猿米焼米尙奉行去山羊老翁
いはのへに、こざるこめやく、こめだにも、たげてとほらせ、かましゝのをぢ、

山背大兄王云云、吾之一身賜於入鹿、終與子弟妃妾、一時自經俱死也、云云、時人、說前諺之應曰、伊波能杯儞、而喩上宮、以渠梅野俱、而喩林臣、林臣入鹿也、以渠梅拖儞母、陀礙底騰哀羅栖、柯麻之之能鳴賦、而喩山背王之頭髮班雜毛似山羊、又曰棄捨其宮匿深山相也、

三年乙巳、志紀上郡言、有人於三輪山、見猿晝睡、竊執其髻、不害其身、猿猶合眼、歌曰、

武柯都烏爾、陀底屢制羅我、儞古禰擧曾、倭我底鳴騰羅毎、拖我佐基泥、佐基泥曾母野、倭我底騰羅須謀野、

向丘夫等柔根我手捉
むかつをに、たてるせらが、にごねこそ、わがてをとらめ、誰幸手たがさきで、さきでぞもや、わがてとらすもや、

此是經歷數年、上宮王等、爲蘇我鞍作、圍於膽駒山之兆也、云云、

ことぞきこゆる―久老はことを言とする
をちかたのあはぬ―久老は越阿波野とともに地名とする
きゞす―すは始の假名によりてしとすべし
われ―入鹿をさす
ひと―中大兄皇子などをさす

小林地名也
以比林臣
せしひとの―久老云、殺爲（シセシ）人の也

是月國內巫覡等、折取枝葉、懸掛木緜、伺大臣度橋之時、爭陳神語入微之說、其巫甚多、不可具聽、老人等曰、移風之兆也、于時有謠歌三首、

波魯波魯爾、渠騰曾枳擧喩屢、之麻能野父播羅、
遙々琴聞島蔡原
はろばろに、ことぞきこゆる、しまのやぶはら、

其二曰、

烏智可拖能、阿婆努能枳枳始、騰余謀作儒、倭例播禰始柯騰、比騰曾騰余謀須、
彼方粟野雉寢不令響我雖寢人令響
をちかたの、あはぬのきゞす、とよもさず、われはねしかど、ひとぞとよもす、

其三曰、

烏麼野始儞、倭例烏比岐例底、制始比騰能、於謀提母始羅孺、伊弊母始羅孺母也、
小林我引入爲人面不知家不知
をばやしに、われをひきれて、せしひとの、おもてもしらず、いへもしらずもや、

秋七月、云云、勸祭蟲於村里之人曰、此者常世神也、云云、秦造河勝惡民所惑、打大生部多、其巫覡等恐休其勸祭、時人便作歌曰、

禹都麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母、
太秦 神 神 聞 來 常世神 打痛
うづまさは、かみともかみと、きこえくる、とこよのかみを、うちきたますも、

うちきたますも―久老は打消し給ふの意とす

同　孝德紀二首

大化五年、云云、皇太子妃蘇我造媛、云云、皇太子聞造媛徂逝、愴然傷怛、哀泣極甚、
於是野中川原史満、進而奉歌、歌曰、

耶麻鵝播爾、烏志賦拖都威底、陀虞毘預倶、陀虞陛屢伊慕乎、多例柯威爾雞武、
山川 鴛鴦二居 遠 妹 誰 牽去
やまがはに、をしふたつゐて、たぐひよく、たぐへるいもを、たれかいにけむ、

たぐひ―傍註の述の意にて、詩經に「窈窕淑女君子好逑」といへるが如く、つれあひの義也

其二

模騰渠等爾、婆那播左該騰模、那爾騰柯母、于都倶之伊母我、磨陀左枳涅渠農、
本毎 花雌開 何 愛 復開出不來
もとごとに、はなはさけども、なにとかも、うつくしいもが、またさきでこぬ、

白雉四年、云云、是歲皇太子奏請曰、冀欲遷于倭京、天皇不許焉、皇太子乃奉皇

祖母尊間人皇后、并率皇弟等、往居于倭飛鳥河邊行宮、于時公卿大夫百官人等、
皆隨而遷、由是天皇恨欲捨於國位、令造宮於山碕、乃送歌於間人皇后、曰、

枳那紀都該、阿我柯賦古麻播、比枳涅世儒、阿我柯賦古麻乎、比騰瀰都羅武箇、
鉗著 我飼駒 不 牽出 我飼駒 人將見
かなぎつけ、あがかふこまは、ひきでせず、あがかふこまを、ひとみつらむか、

かなぎ―小木の名といふ説あり

同　齊明紀八首

四年、云云、五月皇孫建王八歲薨、今城谷上起殯而收、天皇、云云、不忍哀、云云、
萬歲千秋之後、要合葬於朕陵、輙作歌曰、

伊磨紀那屢、乎武例我禹杯爾、倶謀娜尼母、旨屢倶之多多婆、那爾柯那嵦柯武、
今來在 木樹上 雲 尚 著 起 何將嘆
いまきなる、こむれがうへに、くもだにも、しるくしたゝば、なにかなげかむ、

乎恐當作呼

いまき―今城也大和高市郡こむれ―乎の字をと訓ずべし、むれは韓語にて山の義也　くも―天に昇られしかたみとして雲を見給ふ也

其二

伊喩之之乎、都那遇舸播杯能、倭柯矩婆能、倭柯倶阿利岐騰、阿我謨婆儺倶爾、

いゆしゝの云々―三句迄は序

射鹿いゆしゝを、繋つなぐかはべの、河邊弱草わかくさの、稚わかくありきと、我不思あがもはなくに、

其三

阿須箇我播、瀰儺蟻羅毘都都、喩矩瀰都能、阿比娜謨儺倶母、於母保喩屢柯母、

あすかがは云々―三句迄は序

飛鳥川水驀合乍あすかがは、みなぎらひつゝ、逝水ゆくみづの、間無あひだもなくも、所念故おもほゆるかも、

冬十月庚戌朔甲子幸紀湯天皇憶皇孫建王、愴爾悲泣、乃口號曰、

耶麻古曳底、于瀰倭拖留騰母、於母之樓枳、伊麻紀能禹智播、倭須羅庾麻自珥、

いまき―今城

山踰やまこえて、雖渡海うみわたるとも、阿怜おもしろき、今來内いまきのうちは、不可忘わすらゆまじに、

其二

瀰儺度能、于之褒能矩娜利、于那倶娜梨、于之廬母倶例尼、飫岐底舸庾婀武、

くれに―遙に也、原本「間」の字を傍註せるは「闇」の誤寫か

湊みなとの、潮下うしほのくだり、海下うなくだり、後うしろもくれに、置而將行おきてかゆかむ、

其三

于都倶之枳、阿餓倭柯枳古弘、飫岐底舸庾舸武、

童謠―此の童謠諸說區々たり、今伴信友の解說によりて示すべし、眞發く(發船也)綱繰連(ツノクレツレ)壓へ(仇を壓ふる意)たをらぶく(撓む意)乘碇(カリはイカリの略)が眞海門乘が(ミワダトノリ舟子の義)水脈(ミチ)の上(へ)たをらぶく乘碇が彼(カ)よと吾(ワ)よと水脈の上たをらぶく乘碇が子―與の誤とす

愛うつくしき、眹稚子あがわかきこを、置而將行おきてかゆかむ、

詔秦大藏造萬里曰、傳斯歌勿令忘於世云云、六年○是歲欲爲百濟將伐新羅、乃勅駿河國造船、已訖挽至績麻郊之時、其船夜中無故、艫舳相反、衆知終敗、科野國言、蠅群向西、飛踰巨坂、大十圍許、高至蒼天、或知救軍敗績之恠、有童謠曰、

摩比邏矩、都能倶例豆例、於能弊、陀乎邏賦倶、能理歌理鵝、美和陀騰能理歌、美烏能陛、陀烏邏賦倶能理歌理鵝、

冬十月、癸亥朔己巳、天王之喪歸就于海、於是皇太子云云、慕天皇、乃口號曰、

枳瀰我梅能、姑褒之枳舸羅儞、婆底底威底、舸矩野姑悲武謀、枳瀰我梅弘報梨、

君目きみがめの、戀こほしきから故に、泊居はててゐて、如此戀かくやこひむも、欲君目きみがめをほり、

同　天智紀五首

九年夏四月、癸卯朔壬申、夜半之後、災(ワザハヒアリホフリウジニ)法隆寺、一屋無餘、火雨雷震、五月童(ワザ)謠(ウタ)曰、

于知波志能、都梅能阿素弭爾、伊提麻栖古、多麻提能伊鞞能、野鞞古能度珥、伊提麻志能、俱伊播阿羅珥茹、伊提麻西古、多麻提能伊鞞能、野鞞古能度珥、

やへこのとに―久老は八重込の外にとす

うちはしの(打橋)、つめのあそびに(際遊)、いでませこ(出坐子)、たまでのいへの(玉代家)、やへこのとに(八重木戸)、いでまし(出坐)の、くいはあらにそ(梅有)、いでませこ(出坐子)、たまでのいへの(玉代家)、やへこのとに(八重木戸)、

小山下者位階也

十年春正月、云云、辛亥百濟鎭將、云云、以小山下、授餘達率等五十餘人也、童謠曰、

もやじ―おなじの古言

多致播那播、於能我曳多曳多、那例例騰母、陀麻儞農矩騰岐、於野兒弘儞農俱、

たちばなは(橘)、おのがえだ〳〵(己枝々)、なれゝども(雖所成)、たまにぬくとき(玉貫時)、おやじをにぬく(同緒貫)、

十年十二月、癸亥朔乙丑、天皇崩(カムサリマス)于近江宮、癸酉殯(カリモガリス)于新宮、于時童謠曰、

美曳之弩能、曳之弩能阿喩、阿喩擧曾播、施麻倍母曳岐、愛俱流之衛、奈疑能母騰、制利能母騰、阿例播俱流之衛、

みよしぬ―みえしぬと訓ずべし

せまべ―しまべと訓ずべし

あくるしゑ―愛の字なれば、えくるしゑと訓ずべし

よけむ―えけむと訓ずべし

みよしぬ(吉野)の、よしぬのあゆ(吉野鮎)、あゆこそは、せまべ(島邊)もよき、あくるしゑ(嗚呼苦)、なぎのもと(水葱下)、せりのもと(芹下)、あれはくるしゑ(我苦)、

其二

於彌能古能、野陛能比母騰俱、比騰陛多爾、伊麻拖藤柯禰波、美古能比母騰矩、

おみのこの(臣子)、やへのひもとく(八重紐解)、ひとへだに(一重)、いまだとかねば(未解)、みこのひもとく(皇子紐解)、

其三

阿箇悟馬能、以喩企波波箇屢、麻矩儒播羅、奈爾能都底擧騰、多拖尼之曳雞武、

あかごまの(赤駒)、いゆきはゞかる(行憚)、まくずはら(眞葛原)、なにのつてごと(何傳言)、たゞにしよけむ(眞吉)、

古事記上四首

八千矛神、將婚高志國之沼河比賣幸行之時、到其沼河比賣之家歌曰、

夜知富許能、迦微能美許登波、夜斯麻久爾、都麻麻岐迦泥氐、登富登富斯、故志能久邇邇、佐賀志賣遠、阿理登岐加志氐、久波志賣遠、阿理登伎許志氐、佐用婆比爾、阿理多多斯、用婆比邇、阿理加用婆勢、多知賀遠母、伊麻陀登加受氐、淤須比遠母、伊麻陀登加泥婆、遠登賣能、那須夜伊多斗遠、淤曾夫良比、和何多多勢禮婆、比許豆良比、和何多多勢禮婆、阿遠夜麻邇、奴延波那伎、佐怒都登理、岐藝斯波登與牟、爾波都登理、迦祁婆那久、宇禮多久母、那久那留登理加、許能登理母、宇知夜米許世泥、伊斯多布夜、阿麻波勢豆加比、許登能加多理碁登母、許遠婆、

やちほこのかみ―大國主神の一名

八千矛 やちほこ

やちほこの、かみのみことは、やしまぐに、つままぎかねて、とほとほし、こしのくに

に、さがしめを、ありときかして、くはしめを、ありときこして、さよばひに、ありたたし、よばひに、ありかよはせ、たちがをも、いまだとかずて、おすひをも、いまだとかねば、をとめの、なすやいたどを、おそふらひ、わがたゝせれば、ひこつらひ、わがたゝせれば、あをやまに、ぬえはなき、さぬつどり、きぎしはとよむ、にはつどり、かけはなく、うれたくも、なくなるとりか、このとりも、うちやめこせね、いしたふや、あまはせづかひ、ことのかたりごとも、こをば、

賢女 在聞 麗女 在聞 呼 在立 往來 太刀緒 解而 襲 雖未解 閉戸 押振 我立 引振 我 立 青山 鳴鶏 鳥 野鳥 雉 響 庭鳥 鶏 鳴 慨 鳴 鳥 哉 此鳥 已 慕 天 使 事 語 此者

爾其沼河日賣未開戸、自內歌曰、

夜知富許能、加微能美許等、怒延久佐能、賣邇志阿禮婆、和何許許呂、宇良須能登理叙、伊麻許曾婆、和杼理邇阿良米、能知婆、那杼理爾阿良牟遠、伊能知波、那志勢多麻比曾、伊斯多布夜、阿麻波世豆迦比、許登能加多理碁登母、許遠婆、阿遠夜麻邇、比賀迦久良婆、奴婆多麻能、用波伊傳那牟、阿佐比能、惠美佐迦延岐氐、多久豆怒能、斯路岐多陀牟岐、阿和由岐能、和加夜流牟泥遠、曾陀多岐、多多岐麻那賀理、麻多麻傳、多麻傳佐

さよばひ―さは接頭語

うちやめこせね―契沖は打止めこせと願ふ意とし、宣長は打惱ましく苦しめんとの意とす

いしたふや―契沖は石飛ぶやにて枕詞とし、宣長は拍子の詞なりとし

斯麻岐、毛毛那賀爾、伊波那佐牟遠、阿夜爾那古斐岐許志、夜知富許能、加微能美許登、許登能迦多理碁登母、許遠婆、

やちほこの、かみのみこと、ぬえくさの、めにしあれば、わがこゝろ、うらすのとりぞ、いまこそは、わどりにあらめ、のちは、などりにあらんを、いのちは、なしせたまひそ、いしたふや、あまはせづかひ、ことのかたりごとも、こをば、あをやまに、ひがかくらば、ぬばたまの、よはいでなん、あさひの、ゑみさかえきて、たくづぬの、しろきたゞむき、あわゆきの、わかやるむねを、そたゝき、たゝきまながり、またまで、たまでさしまき、もゝながに、いはなさんを、あやになこひきこし、やちほこの、かみのみこと、ことのかたりごとも、こをば、

ぬえくさの―枕詞
わどり―宣長は和を知の誤として千鳥と釋き、などりを平和の義とす
たくづぬの―白と云はんための枕詞
あわゆきの―枕詞
わかやる―わかやかなる也
そたゝき―そは接頭語
まながり―抱く意
なこひきこし―戀ひ慕ふ勿れ

故其夜者不合、而明日夜爲御合也、又其神之嫡后、須勢理昆賣命甚爲嫉妬、故其日子遲神和備氏、三字以音、云云、歌曰、

奴婆多麻能、久路岐美祁斯遠、麻都夫佐爾、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、

牟作當字下同
牟(ム)にてよかるべし

疑―古事記傳には疑の上に佐あり
うなみる―むなみると訓ずべし、胸見るの義
たゝきー宣長は上の「は」より續けて「はたゝき」とし鼓揚の意とす
そをぬぎうて―本文の「遐」に從ひ「そにぬぎうて」と訓ずべし
まきしー宣長は求きしとす

多多藝母、許禮波布佐波受、幣都那美、曾邇奴岐宇氏、蘇邇杼理能、阿遠岐美祁斯遠、麻都夫佐邇、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、多多藝母、許母布佐波受、幣都那美、曾邇奴棄宇氏、夜麻賀多爾、麻岐斯阿多尼都岐、曾米紀賀斯流邇、斯米許呂母遠、麻都夫佐邇、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、多多藝母、許斯與呂志、伊刀古夜能、伊毛能美許等、牟良登理能、和賀牟禮伊那婆、比氣登理能、和賀比氣伊那婆、那迦士登波、那波伊布登母、夜麻登能、比登母登須須岐、宇那加夫斯、那賀那加佐麻久、阿佐阿米能、疑理邇多多牟叙、和加久佐能、都麻能美許登、許登能加多理碁登母、許遠婆、ぬばたまの、くろきみけしを、まつぶさに、とりよそひ、おきつとり、うなみるときは、たゞぎも、これはふさはず、へつなみ、そにぬぎうて、そにどりの、あをきみけしを、まつぶさに、とりよそひ、おきつとり、うなみるときは、たゞぎも、こもふさはず、へつなみ、そをぬぎうて、やまがたに、まきしあたにつき、そめぎがしるに、しめごろもを、まつぶさに、とりよそひ、おきつとり、うなみるときは、たゞぎも、こしよろし、いと

いとこやの―宣長云、妹といふ枕詞にていとほしき子と云ふ義也

きりに―古事記傳には「さきりに」とあり

屋妹命群鳥吾連行控鳥吾控去不
こやの、いものみこと、むらどりの、わがむれいなば、ひけどりの、わがひけいなば、な
泣汝雖云倭一莖薄低頭汝欲泣朝
かじとは、なはいふとも、やまとの、ひともとすすき、うなかぶし、ながなかさまく、あ
雨霧起弱草婦命事語此者
さあめの、きりにたゝんぞ、わかくさの、つまのみこと、ことのかたりごとも、こをば、

爾其后取大御酒抔、立依指舉而歌曰、

夜知富許能　加微能美許登夜、阿賀淤富久邇奴斯許曾波、遠邇伊麻世婆、宇知微流、斯
麻能佐岐邪岐、加岐微流、伊蘇能佐岐於知受、和加久佐能、都麻母多勢良米、阿波母與、
賣邇斯阿禮婆、那遠岐氐、遠波那志、那遠岐氐、都麻波那斯、阿夜加岐能、布波夜賀斯
多爾、牟斯夫須麻、爾古夜賀斯多爾、多久夫須麻、佐夜具賀斯多爾、阿和由岐能、和加
夜流牟泥遠、多久豆怒能、斯路岐多陀牟岐、曾陀多岐、多多岐麻那賀理　麻多麻傳、多麻
傳佐斯麻岐、毛毛那賀爾、伊遠斯那世、登與美岐多氐麻都良世、
八千矛神命我大國主男坐見島
やちほこの、かみのみことや、あがおほくにぬしこそは、をにいませば、うちみる、し
前不落弱草婦持吾
まのさきざき、かきみる、いそのさきおちず、わかくさの、つまもたせらめ、あはもよ、

さやぐ―さやさやと音する也

たてまつらせ―奉れ也、飲み給への意

宇岐由比―盞結、固めの盃

宇那賀氣理―項（ウナジ）に手を掛けあふ意、親しく相雙びて居給ふをいふ

女在汝除男無汝除夫無綾墻屋下
めにしあれば、なをきて、をはなし、なをきて、つまはなし、あやがきの、ふはやがし
蒸衾屋下拷衾下沫雪稚
たに、むしぶすま、にこやがしたに、たくぶすま、さやぐがしたに、あわゆきの、わか
胷拷綱白腕扣玉手玉扣曲
やるむねを、たくつぬの、しろきたゞむき、そだたき、たゝきまながり、またまで、た
手差纏股長寢爲豐御酒獻
までさしまき、もゝながに、いをしなせ、とよみきたてまつらせ、

如此歌、卽爲宇岐由比、四字以音而宇那賀氣理氐、六字以音至今鎭坐也、此謂之神語也、

神武天皇段七首

故坐日向時、云云、然更求爲大后之美人、云云、於是七媛女、遊行於高佐士野、伊
須氣余理比賣在其中、爾大久米命、見其伊須氣余理比賣、而以歌白於天皇曰、

夜麻登能、多加佐志怒袁、那那由久袁登賣抒母、多禮袁志摩加牟、
倭高野七行少女等誰枕
やまとの、たかさしぬを、なゝゆくをとめども、たれをしまかむ、

爾伊須氣余理比賣者、立其媛女等之前、乃天皇見其媛女等、而御心知伊須氣余

えーえをとめ也

あめつゝちとりましとゝ―契沖はあめは天、つつは千鳥を喚ぶ聲、ましは汝（イマシ）とゝは千鳥を呼ぶ詞とし、宣長は四つの鳥として天は胡燕子（アマトリ）、つゝは鶺鴒、ちとりは千鳥、ましとゝは巫鳥（シトヾ）とす、其等の目の如くと下に續く

理比賣立於最前、以歌答曰、

加都賀都母、伊夜佐岐陀氐流、延袁斯麻加牟、
かつがつも、いやさきだてる、えをしまかむ、

爾大久米命、以天皇之命、詔其伊須氣余理比賣之時、見其大久米命黥利目、而思奇歌曰、

阿米都都、知杼理麻斯登登、那杼佐祁流斗米、
あめつゝ、ちとりましとゝ、などさけるとめ、

爾大久米命答歌曰、

袁登賣賣爾、多陀爾阿波牟登、和賀佐祁流斗米、
をとめに、たゞにあはんと、わがさけるとめ、

故其孃子、云云、參入宮內之時、天皇御歌曰、

阿斯波良能、志祁去岐袁夜爾、須賀多多美、伊夜佐夜斯岐氐、和賀布多理泥斯、

しげこき―宣長云、鶺の意

こき反き

さやぎぬ―さやさやと鳴り騷ぐな

くもとる―雲と居、夕方は風となるべき雲の畫の程は靜かに山際に懸り居ると也

あしはらの、しげこきをやに、すがだたみ、いやさやしきて、わがふたりねし、

然而阿禮坐之御子、云云、故天皇崩後、其庶兄當藝志美美命、娶其嫡后伊須氣余理比賣之時、將殺其三弟、而謀之間、其御祖伊須氣余理比賣患苦、而以歌令知其御子等、歌曰、

佐韋賀波由、久毛多知和多理、宇泥備夜麻、許能波佐夜藝奴、加是布加牟登須、
さゐかはゆ、くもたちわたり、うねびやま、このはさやぎぬ、かぜふかんとす、

又歌曰、

宇泥備夜麻、比流波久毛登韋、由布佐禮波、加是布加牟登曾、許能波佐夜牙流、
うねびやま、ひるはくもとる、ゆふされば、かぜふかむとぞ、このはさやける、

景行天皇段八首

倭建命、云云、爾到相武國之時、其國造詐白、云云、著向火而燒退、云云、自其入

幸渡(マシテ)走水海之時、其渡神興浪、云云、爾其后名弟橘比賣命白之、妾易御子、云云將入海、云云、其后歌曰、

佐泥佐斯、佐賀牟能袁怒邇、毛由流肥能、本那加邇多知氐、斗比斯岐美波母、

さねさし―枕詞

胸刺(相武小野)さねさし、さがむのをぬに、燐火(火中立)もゆるひの、ほなかにたちて、訪君(とひしきみ)はも、

而還來尾張國、入坐先日所期美夜受比賣之許、云云、爾美夜受比賣、其於意須比之襴著月經(ツケリツキ)、故見其月經御歌曰、

比佐迦多能、阿米能迦具夜麻、斗迦麻邇、佐和多流久毗比波、煩曾多和夜、賀比那袁麻迦牟登波、阿禮波須禮杼、佐泥牟登波、阿禮波意母閉杼、那賀祁勢流、意須比能須蘇邇、都紀多知邇祁理、

くひひは云々―宣長は「くひ」にて句とし、「ひはほそたわやかひなを」とせり「ひはほそ」は弱細

久堅(天香山利鎌)ひさかたの、あめのかぐやま、とかまに、さわたるくひひは、細弱杭ほそたわや、枕腕かひなをまかむとは、我雖爲あれはすれど、寢思汝著あれはおもへど、ながけせる、襲裾おすひのすそに、月發(つきたち)にけり、

爾美夜受比賣答御歌曰、

多迦比迦流比能美古、夜須美斯志、和賀意富岐美、阿良多麻能、登斯賀岐布禮波、阿良多麻能、都紀多多那牟余、

高光日皇子(たかひかるひのみこ)、八隅知(やすみしし)、我大君(わがおほきみ)、荒玉年(あらたまの)、來經(としがきふれば)、荒玉月來經往(たまの、つきはきへゆく)、諾諾(うべなうべな)、君待難(きみまちがたに)、我着(わがけせる)、襲裾(おすひのすそに)、月發(つきたちにけり)、

あらたまの―枕詞

云云、此時御病甚急、爾御歌曰、

袁登賣能、登許能辨爾、和賀淤岐斯、都流岐能多知、曾能多知波夜、

をとめ―尾張の美夜受比賣をいふ

少女床邊我置(をとめの、とこのべに、わがおきし)、劒太刀(つるぎのたち)、其太刀(そのたち)はや、

那豆岐田―宣長の説に、四方の周圍にありて御陵に屬附(ナミツキ)たる田

岐田(キタ)、自那下三字以音、而哭(ミナキシリテ)爲歌曰、

歌竟卽崩(マス)、云云、於是坐(ニ)倭后等及御子等諸下到(リキテ)、而作(リ)御陵、卽匍匐(ハラバヒモトホリテ)迴其地之那豆(ナヅ)

上能恐術

なづきたの―「なづきのたの」とすべし

あしよゆくな―足より行くな也、なは感動の助詞

うみが―宣長はクヌガ(陸)に對して海をウミガと云ふとす

あはは―ちの―「あはかはちの」の誤

那豆岐能多能、伊那賀良邇、伊那賀良爾、波比母登富呂布、登許呂豆良、

なづきたの、いながらに、いながらに、はひもとほろふ、ところづら、

於是化二八尋白智鳥一、翔レ天而向レ濱飛行、云云、其后御子等、云云、哭追、此時歌曰、

阿佐志怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、

あさしぬはら、こしなづむ、そらはゆかず、あしよゆくな、

又入二其海鹽一、而那豆美行時歌曰、

宇美賀由氣婆、許斯那豆牟、意富迦波良能、宇惠具佐、宇美賀波伊佐用布、

うみがゆけば、こしなづむ、おほはらの、うゑくさ、うみかはいさよふ、

又飛二居其磯一之時歌曰、

波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布、

はまつちどり、はまよはゆかず、いそづたふ、

是四歌者、皆歌二其御葬一也、云云、

應神天皇段三首

古事記傳には比比の一字は衍とす、本書は之を除けるも也

一時、天皇越二幸近淡海國一之時、云云、故到二坐木幡村一之時、麗美孃子過二其道衢一、云云、

於是天皇、任レ令レ取二其大御酒盞一、而御歌曰、

許能迦邇夜、伊豆久能迦邇、毛毛豆多布、都奴賀能迦邇、余許佐良布、伊豆久邇伊多流、

伊知遲志麻、美志麻邇斗岐、美本杼理能、加豆伎伊岐豆岐、志那陀由布、佐佐那美遲袁、

須久須久登、和賀伊麻勢婆夜、許波多能美知邇、阿波志斯袁登賣、宇斯呂傳波、袁陀氐

呂迦母、波那美波、志比斯那須、伊知比韋能、和邇佐能邇袁、波都邇波、波陀阿可良氣

美、志波邇波、邇具漏岐由惠、美都具理能、曾能那迦都邇袁、加夫都久、麻肥邇波阿氐

受、麻用賀岐、許邇加岐多禮、阿波志斯袁美那、迦母賀登、和賀美斯古良、迦久母賀登、

阿賀美斯古邇、宇多氣陀邇、牟迦比袁流迦母、伊蘇比袁流迦母、

このかにや、いづくのかに、もゝづたふ、つぬかのかに、よこさらふ、いづくにいたる、

みほどり―鳰鳥に同じ
しなたゆふ―上り下りたゆたふこと
をだてろかも―かは哉にて、ろともは助詞
はなみはしひし―なすー宣長は齒並喙（ハシ）菱如（ナス）とす
しはには―宣長は底の土とす
うたげだに―宣長はうたたけにとし、轉た宴にの意とす
いそひ―いは發語

布下脫留字
紀上脫由字

すゑふゆ云々―宣長は「すゑふゆ、ふゆきのすゑ、かちがしたきの、さや〳〵」とし、末振冬木如（ノヌ）枯（カラ）之下樹之清々の意とす

いちぢしま、みしまにとき、みほどりの、かづきいきづき、しなたゆふ、さゝなみぢを、
すぐすぐと、わがいませばや、こはたのみちに、あはししをとめ、うしろでは、をだてろかも、はなみは、しひしなす、いちひゐの、わにさのにを、はつには、はだあからけみ、しはには、にくろきゆゑ、みつくりの、そのなかつにを、かぶつく、まひにはあてず、まよかき、こにかきたれ、あはししをみな、かもがと、わがみしこら、かくもがと、
あがみしこに、うたげだに、むかひをるかも、いそひをるかも、

又吉野之國主等、瞻大雀命之所佩御刀歌曰、

本牟多能、比能美古、意富佐邪岐、意富佐邪岐、波加勢流多知、母登都流藝、須惠布由
布由紀能、須加良賀志多、紀能佐夜佐夜、
ほんだの、ひのみこ、おほさゝぎ、おほさゝぎ、はかせるたち、もとつるぎ、すゑふゆ
ふるゆきの、すがらがした、ゆきのさやさや、

百濟國、云云、知釀酒人名仁番、亦名須須許理等參渡來也、故是須須許理、釀大御酒

ことなぐしゑぐし―事和ぐ酒（クシ）咲（エ）酒也

之玖―宣長は之の字を羅の重點とす、又文は久、夜は岐の誤かと云へり
つちしく―宣長はつちしくくとし、數多連なる意とす
もろさや―宣長はくろさきとし、備中黑崎かと云へり

以獻、於是天皇、宇宴羅宜是所獻之大御酒、而字羅宜三字以音、御歌曰、

須須許理賀、迦美斯美岐邇、和禮惠比邇祁理、許登登那具志、惠具志爾、和禮惠比邇祁理、
すゝごりが、かみしみきに、われゑひにけり、ことなぐし、ゑぐしに、われゑひにけり、

仁德天皇段九首

爾天皇、云云、吉備海部直之女名黑日賣、云云、喚上而使也、然畏其太后之嫉、逃下本國、天皇坐高臺、望瞻其黑日賣之船出浮海以歌曰、

淤岐幣邇波、袁夫泥都羅之玖、文漏邪夜能、摩佐豆古和藝毛、玖邇幣玖陀良須、
おきへには、をぶねつらしく、もろさやの、まさつこわぎも、くにへくだらす、

故太后聞是之御歌大忿、遣人於大浦追下、而自歩追去、於是天皇戀其黑日賣、欺太后曰、欲見淡道島、而幸行之時、坐淡道島、遙望歌曰、

於志氏流夜、那爾波能佐岐由、伊傳多知氏、和賀久邇美禮婆、阿波志摩、淤能基呂志摩、

あはしま―契沖は紀伊粟島とす　きけつしま―未詳

にし―西風也　あげて―擧げて、開けて、兩說あり

阿遲摩佐能志麻母美由、佐氣都志摩美由、
臨照おしてるや、從難波崎出立なにはのさきゆ、いでたちて、吾國見わがくにみれば、阿波島あはしま、自凝島おのころじま、
檳榔島見あちまさのしまもみゆ、さけつしまみゆ、
乃自其島傳而幸行吉備國、爾黑日賣命令大坐其國之山方地、而獻大御飯、於是爲煮大御羹、採其地之菘菜時天皇到坐其孃子之採菘處歌曰、
夜麻賀多邇、麻祁流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦、
山方やまがたに、所時菘菜まけるあをなも、吉備人きびびとと、共ともにしつめば、採樂たぬしくもあるか、有哉
天皇上幸之時、黑日賣獻御歌曰、
夜麻登幣邇、爾斯布岐阿宜氏、玖毛婆那禮、曾岐袁理登母、和禮和須禮米夜、
倭方やまとべに、西吹擧にしふきあげて、雲離くもはなれ、退居そきをりとも、我忘われわすれめや、開
又歌曰、
夜麻登幣邇、由玖波多賀都麻、許母理豆能、志多用波閇都都、由久波多賀都麻、

こもりつの―宣長云、隱水之也、「つ」濁る　したよばへつゝ―宣長云、從下延乍也、「へ」清む

美母呂能云々―古事記傳には流の下に意富韋古賀波良の七字あり

みもろの―三輪山のことおほゐこがはら―宣長云、大猪子之腹也　きもむかふ―枕詞

宣當作賀

倭方やまとべに、去ゆくはたがつま、誰夫こもりつの、隱角したよばへつゝ、作去ゆくはたがつま、誰夫
八田若郎女、云云、天皇聞看太后自山代上幸、而使舍人名謂鳥山人、送御歌曰、云云、又續遣丸邇臣口子而歌曰、
美母呂能、曾能多迦紀那流、意富韋古賀波良邇阿流、岐毛牟加布、許許呂袁陀邇迦、阿
比於母波受阿良牟、
室みもろの、其高城在そのたかきなる、おほゐこがはらにある、原在きもむかふ、膽向こゝろをだにか、心あ
ひおもはずあらむ、相想有
天皇戀八田若郎女、賜遣御歌、其歌曰、
夜多能比登母登須宜波、古母多受、多知迦阿禮那牟、阿多良須賀波良、許登袁許曾、須
宜波良登登伊波米、
八田一莖菅やたのひともとすげは、子不持こもたず、植去たちかあれなん、惜菅荒去あたらすがはら、言ことをこそ、菅
原言がはらといはめ、惜清あたらすがしめ、女

爾八田若郎女答歌曰、

夜多能比登母登須宜波、比登理袁理登母、意富岐彌斯、與斯登岐許佐婆、比登理袁理登母、

八田一苹菅やたのひともとすげは、獨雌居ひとりをりとも、大君おほきみし、好聞看よしときこさば、獨雌居ひとりをりとも、

よし―宜長は縦しや個子は無くともの意とす

故爲二八田若郎女之御名代一定二八田部一也、

天皇云云、興二軍欲殺、爾速総別王女鳥王共逃退、而騰二于倉埼山一、於是速総別王歌曰、

伊毛云々―古事記傳には第四句を伊波迦伎加泥弖とす　はしたての―枕いもはきかねて―宜長はいはかきかねてとして岩搔きかねての意とす

波斯多氏能、久良波斯夜麻袁、佐賀志美登、伊毛波伎加泥氏、和賀氏登良須母、

梯樹はしたての、倉梯山くらはしやまを、嶮さかしみと、妹來不得いもはきかねて、我手執わがてとらすも、

履中天皇段二首

字良宜而―醉ひ興じて我を忘れ

たつこも―立薦の義也、席もて屏風の如くす

かぎろひ―こゝは輝く火のこと

崩―カンサリ

本坐二難波宮一之時、坐二大嘗一、而爲二豐明一之時、於二大御酒一宇良宜而大御寢也、云云、

故到二于多遲比野一而寤詔、此間者何處、爾阿知直白、墨江中王火著二大殿一、故率二逃一於倭一、爾天皇歌曰、

多遲比怒邇、泥牟登斯理勢婆、多都碁母暮、母知氏許麻志母能、泥牟登斯理勢波、

丹比野たちびぬに、寢知ねんとしりせば、防壁たつこもも、持來者もちてこましもの、寢知ねんとしりせば、

到二於波邇賦坂一、望二見難波宮一其火猶炳、爾天皇亦歌曰、

波邇布邪迦、和賀多知美禮婆、迦藝漏肥能、毛由流伊弊牟良、都麻賀伊幣能阿多理、

埴生坂はにふざか、我立見わがたちみれば、炎火かぎろひの、燎家邑もゆるいへむら、妻家邊つまがいへのあたり、

允恭天皇段七首

天皇崩之後、定二木梨之輕太子所二知日繼一、未レ卽二位之間、奸二其伊呂妹輕大郎女一、而歌曰、云云、又歌曰、

佐佐婆爾、宇都夜阿良禮能、多志多志爾、韋泥氏牟能知波、比登波加由登母、宇流波斯登、佐泥斯佐泥氏婆、加理許母能、美陀禮婆美陀禮、佐泥斯佐泥氏婆、

ささばに云々―第二句迄は序也　ひとはかゆとも―宣長云、人に譏らるとも也　かりこもの―枕詞

小竹葉ささばに、打霰うつやあられの、たしたし健に、牽寢ゐねてんの後のちは、人離ひとはかゆとも、愛人うるはしと、さねしさねてば、寢寢、刈菰かりこもの、亂みだればみだれ、亂寢さねしさねてば、

したた―下々と重ねて強めいへるならん　よりねて―人目につかぬ樣身を潛め伏しての意か

是以百官及天下人等、背輕太子、而歸穴穗御子、爾輕太子畏、而逃入大前小前大臣之家、云云、其太子被捕歌曰、云云、又歌曰、

衣通王者乃輕大郎女也

阿麻陀牟、加流袁登賣、志多多爾母、餘理泥氏登富禮、加流袁登賣杼母、

天飛あまたむ、輕少女かるをとめ、下寄したたにも、よりねてとほれ、通輕少女かるをとめども、

故其輕太子者流於伊餘湯也亦將流之時歌曰、

阿麻登夫、登理母都加比曾、多豆賀泥能、岐許延牟登岐波、和賀那斗波佐泥、

天飛あまとぶ、鳥使とりもつかひぞ、鶴音たづがねの、聽時きこえんときは、我名間わがなとはさね、

其衣通王獻歌、其歌曰、

あひねのはま―地名なるべし

けながく―宣長云、けは來經（キヘ）の約也　むかへを―をは助詞

はたはりたて云云―幕を張りてこゝを墓所と定めたる意なちんたてりたてりも―「そのまゝに爲し置き來て復た取る事もあらじと思ひしにこ

那都久佐能、阿比泥能波麻能、加岐賀比爾、阿斯布麻須那、阿加斯氏杼富禮、

夏草なつくさの、あひねのはまの、濱蠣貝かきがひに、足莫蹈あしふますな、明而通あかしてとほれ、

故後亦不堪戀慕、追往時歌曰、

岐美加由岐、氣那賀久那理奴、夜麻多豆能、牟加閉袁由加牟、麻都爾波麻多士、

君行きみがゆき、息長成けながくなりぬ、山鐘やまたづの、迎將行むかへをゆかん、待不待まつにはまたじ、

故追到之時、待懷而歌曰、

許母理久能、波都世能夜麻能、意富袁爾波、波多波理陀氏、佐袁袁爾波、波多波理陀氏、意富袁爾斯、那加佐陀賣流、淤母比豆麻阿波禮、都久由美能、許夜流許夜理母、阿豆佐由美、多氏理多氏理母、能知母登理美流、意母比豆麻阿波禮、

隱口こもりくの、泊瀨山はつせのやまの、大峽おほをには、旛張立はたはりたて、小峽さをには、旛張立はたはりたて、大峽おほをにし、汝定ながさだめる、思妻おもひづまあはれ、嗚呼つくゆみの、槻弓こやるこやりも、伏こやりも、梓あづさ弓、起たてりたてりも、起後のちもとりみる、取見おもひづまあはれ、思妻嗚呼

れは又弓にもまさりて」と意を補ひて見るべきか

たま、かゞみ―思ふ人を譬へたる也

あがもふつま云云―斯く迄に我思ふ最愛の妻のあればこそ、家國も慕はるゝなれ、今斯く妻が此方に來れる以上何の家ぞ何の國ぞ、我はさる所の戀しくもあちず行きたくもなしと也

又歌曰、

許母理久能、波都勢能賀波能、賀美都勢爾、伊久比袁宇知、斯毛都勢爾、麻久比袁宇知、伊久比爾波、加賀美袁加氣、麻久比爾波、麻多麻袁加氣、麻多麻那須、阿賀母布伊毛、加賀美那須、阿賀母布都麻、阿理登伊波婆許曾、伊幣爾母由加米、久爾袁母斯怒婆米、

こもりくの、はつせのかはの、かみつせに、いくひをうち、しもつせに、まくひをうち、いくひには、かがみをかけ、またまをかけ、またまなす、あがもふいも、かがみなす、あがもふつま、ありといはばこそ、いへにもゆかめ、くにをもしぬばめ、

隱泊瀬川上瀬杙打下瀬眞杙打鏡懸眞玉懸眞玉如我思妹鏡如我思妻在云家可往國可忍

如此歌卽共自死、故此二歌者讀歌也、

雄略天皇段十二首

初太后坐日下之時、云云、行立其山之坂上、歌曰、

久佐加辨能、許知能夜麻登、多多美許母、幣具理夜夜麻能、許知碁知能、夜麻能賀比爾、

登下脫幣子

いくみだけ―宣長は入り隱り竹の義といふ

たしみだけ―宣長は立繁（タチシミ）竹の意といふ

いくみ―宣長云、入籠り也

多知邪加由流、波毘呂久麻加斯、母登登爾波、伊久美陀氣淤斐、須惠幣爾波、多斯美陀氣淤斐、伊久美陀氣、伊久美波泥受、多斯美陀氣、多斯爾波韋泥受、能知母久美泥牟、曾能淤母比豆麻阿波禮、

くさかべの、こちのやまと、たゝみこも、へぐりのやまの、こちごちの、やまのかひに、たちさかゆる、はびろくまがし、もとへには、いくみだけおひ、すゑへには、たしみだけおひ、いくみだけ、いくみはねず、たしにはゐねず、のちもくみねん、そのおもひづまあはれ、

日下蔕榮葉廣熊樫本邊幾竹生末邊彼此山峽平群山彼此山峽竹生組不寢牽不寢後組寢其思妻怜

卽令持此歌、而返使也、

一時天皇、遊行到於美和河之時、河邊有洗衣童女、云云、仰待天皇之命、既經八十歲、云云、天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚憂悲心裏、欲婚憚其極老不得成婚、而賜御歌、其歌曰、

美母呂能、伊都加斯加母登、加斯賀母登、由由斯伎加母、加志波良袁登賣、

三輪みもろの、嚴樫いつかしがもと、本かしがもと、忌ゆゆしきかも、哉樫原かしはらをとめ、女

又歌曰、

比氣多能、和加久流須婆良、和加久閉爾、韋泥氏麻斯母能、淤伊爾祁流加母、

引田ひきたの、若栗わかくるすはら、若栖原わかくべに、率寢ねてましもの、老おいにけるかも、哉

わかくべに―若かりし程に

爾赤猪子之泣涙、悉濕ウルホス其所ル服キタ之丹摺ニズリノヲ袖、答ヘテ其大御歌、而歌曰、

美母呂爾、都久夜多麻加岐、都岐阿麻斯、多爾加母余良牟、加微能美夜比登、

三諸みもろに、齋玉垣つくやたまがき、齋餘つきあまし、誰たにかもよらん、將寄神かみのみやびと、

つくや―契沖宣長など築くの意とす

ともしきろかも―宣長云、乏しに羨しの意あり

又歌曰、

久佐迦延能、伊理延能波知須、波那婆知須、微能佐加理毘登、登母志岐呂加母、

日下江くさかえの、入江蓮いりえのはちす、花蓮はなはちす、身盛みのさかりびと、乏ともしきろかも、哉

爾多サハニモノタマウテ祿ニ給其老女オムナニ、以シリタマヘリ返遣也、

天皇幸ニ行スル吉野宮ニ之時、云云、而坐シアグラニ御吳床ニ、彈キテ御琴ニ令ム爲ヒラ儺ニ其孃フトノニ子ニ、爾因テ其孃

子之好クマフニ儺作タマフ御歌ニ、其歌曰、

阿具良韋能、加微能美氏母知、比久許登爾、麻比須流流袁美那、登許余爾母加母、

吳床居あぐらゐの、神御手以彈琴ひくことに、舞爲女まひするをみな、常世とこよにもがも、

又天皇、婚ヨバヒワニ丸邇ノ之佐都紀臣ノオミ之女袁杼比賣ニ、幸ニ行于春日ニ之時、媛女ヲトメノ逢ヘリ道、卽見ニ幸

行ニ、而逃ゲルニ隱岡邊ニ、故作ル御歌ニ、其歌曰、

袁登登賣能、伊加久流袁加袁、加那須伎母、伊本知母賀母、須岐波奴流母能、

媛女をとめの、隱岡いかくるをかを、金鉏かなすきも、五百千欲得いほちもがも、挿反すきはぬるもの、物

故號ニ其岡ニ、謂ニ金鉏岡ニ也、

天皇坐シハウセ長谷之百枝槻下ノニシタマフルトヨノアカリ、爲ニ豐樂ノ之時、伊勢國之三重采女、指ニ舉ゲテ大御盞ヲ以テ獻ル、爾

其百枝槻ノノ葉、落テ浮ベリ於大御盞ニ、其采女不ル知、云云、猶獻ル大御酒ニ、天皇看ミソナハシ行其浮ル盞之

葉ヲ、打セ伏其采女ニ、以テ刀刺シテ充其頸ニ、將ヘルント斬之時、其采女白シテ天皇ニ曰、莫ナコロシマセソ殺吾身ニ、有ニ

應ヨミテ曰事ニ、卽歌ヨミテ曰、

いかくる―いは接頭語いほち―ちはつの轉にて箇なるべし

すきはぬるもの―すきはねて其隱れがを見附け出さんものを

がも―あれかし、希望の意の助辭

麻岐牟久能、比志呂乃美夜波、阿佐比能、比傳流美夜、由布比能、比賀氣流美夜、多氣能泥能、泥陀流美夜、許能泥能、泥婆布美夜、夜本爾余志、伊岐豆岐能美夜、麻紀佐久、比能美加度爾、比那閇夜爾、淤斐陀氏流、毛毛陀流都紀賀延波、本都延波、阿米袁淤幣理、那加都延波、阿豆麻袁淤幣理、志豆延波、比那袁淤幣理、本都延能、延能宇良婆波、那加都延爾、淤知布良婆閇、那加都延能、延能宇良婆波、斯毛都延爾、淤知布良婆閇、斯豆延能、延能宇良婆波、阿理岐奴能、美幣能古賀、佐佐加世流、美豆多麻宇岐爾、宇岐志阿夫良、淤知那豆佐比、美那許袁呂許袁呂爾、許斯母阿夜爾加志古志、多加比加流比能美、古許登能加多理碁登母、許袁婆、

纏向 まきむくの、日代宮 ひしろのみやは、朝日 あさひの、日出宮 ひでるみや、夕日 ゆふひの、日隱君 ひかげるみや、竹 たけのねの、根足宮 ねたるみや、木根 このねの、根延宮 ねはふみや、穂 やほによし、杵築宮 いきづきのみや、眞木割 まきさく、日御門 ひのみかどに、日並家 ひなべやに、生植 おひたてる、百足槻枝 ももたるつきがえは、末枝 ほづえは、天負 あめをおへり、中枝 なかつえは、東負 あづまをおへり、下枝 しづえは、鄙負 ひなをおへり、末枝 ほづえの、枝末葉 えのうらばは、

ひでる―日照也
いきづき―いは發語、杵にて搗固めたる也
まきさく―枕詞
ひのみかど―ひは檜也
ひなべや―宣長は前句の「に」より續けて「にひなべや」を新嘗屋とす
もゝたる―枝の多き也
おへり―覆へり

中枝 なかつえに、落降延 おちふらばへ、中枝 なかつえの、枝末葉 えのうらばは、下枝落降延 しもつえに、おちふらばへ、枝末葉 えのうらばは、三重子 みへのこが、捧 さゝかせる、瑞玉盞 みづたまうきに、浮 うきしあぶら、落 おちなづさひ、みなこをろこをろに、奇畏 こしもあやにかしこし、高光日 たかひかるひのみこ、御子 言 ことのかたりごとも、是者 こをば、

故獻レバ此歌一者、赦二其罪一也、爾大后歌ヨミシタマフ其歌曰、

夜麻登能、許能多氣知爾、古陀加流、伊知能都加佐爾、比那閇夜爾、淤斐陀氏流、波毘呂由都麻都婆岐、曾賀波能、比呂理伊麻志、曾能波那能、氏理伊麻須、多加比加流比能美古爾、登余美岐多氏麻都良勢、許登能加多理碁登母、許袁婆、

倭 やまとの、此高市 このたけちに、木高市 こだかる、いちのつかさに、日並家 ひなべやに、生植 おひたてる、葉廣 はび
嚴葉海石榴 ろゆづまつばき、其葉廣 そがはの、廣坐 ひろりいまし、其花照坐 そのはなの、てりいます、高光日 たかひかるひの
皇士 みこに、豐御酒獻 とよみきたてまつらせ、言事 ことのかたりごとも、是者 こをば、

即天皇歌曰、

おちふらばへ―落觸れ也
ありきぬの―枕詞
みへのこ―采女
自ちのこと
なづさひ―浮び
みなこをろ〳〵に―宣長云、水凝々也
てしも―是しも也

こだかる―宣長はこを小とす
つかさ―宣長は高處の意とす
ゆづまつばき―五百箇(イホツ)眞椿と解すべかちん「ゆつ」清む

毛毛志紀能、淤富美夜比登波、可豆良登理、比禮登理加氣氐、麻那婆志良、袁由岐阿閇、
爾波須受米、宇受須麻理韋氐、祁布母加母、佐加美豆久良斯、多加比加流比能美夜比登、
許登能加多理碁登母、許袁婆、
百敷もゝしきの、大宮人おほみやびとは、蜑かづらとり、肩巾取懸ひれとりかけて、鶺鴒まなばしら、尾行合をゆきあへ、
庭雀にはすゞめ、踞居うずすまりゐて、今日けふもかも、酒宴さかみづくらし、高光日宮人たかひかるひのみやびと、
言語ことのかたりごとも、是者こをば、
故於此豐樂、譽其三重采女而給多祿也、是豐樂之日、亦春日之袁杼比賣、獻
大御酒之時、天皇歌曰、
美那曾曾久、淤美能袁登賣、本陀理登良須母、本陀理斗理、加多久斗良勢斯、多賀加多
久夜、加多久斗良勢、本陀理斗良須古、
水潛みなそゝぐ、麻績童女おみのをとめ、甕ほだりとらすも、甕執ほだりとり、堅執かたくとらせし、誰堅たがかた
哉堅くや、爲執甕ほだりとらすこ、

可豆良―古事記傳には可を宇とす
もゝしきの―枕詞、眞淵云、百石城也
かづらとり―宣長は鶺鳥とす
うずすまり―宣長云、群る也
さかみづくらし―酒に漬り居る也
本一作太下同
みなそゝぐ―宣長云、水灑也
もみ―契沖宣長などは臣とす
かたく云々―宣長は「堅く取らせ、した(確)堅く、や(彌)堅く取らせ」とす
阿佐計―古事記傳には計を斗とす
あさけ―宣長はあさと(朝戸)とす
ゆふけ―宣長はゆふと(夕戸)とす
わきつき―宣長は脇息のこととす
いた―宣長云、板也
をとつ―宣長云、彼(チチ)つ也

爾袁杼比賣獻歌、其歌曰、
夜須美斯志、和賀淤富岐美能、阿佐計爾波、伊余理陀多志、由布計爾波、伊余理陀多須、
和岐豆紀賀斯多能、伊多爾母賀、阿世袁、
八隅知我大王やすみしし、わがおほきみの、朝異あさけには、寄立いよりたたし、夕異ゆふけには、寄立いよりたたす、
稚槻下わきつきがしたの、枝いたにもが、我兄あせを、

清寧天皇段四首

故將治天下之間、云云、志毘臣立于歌垣、取其袁祁命將婚之美人手、其
孃子者、菟田首等之女、名大魚也、爾袁祁命亦立歌垣、於是志毘臣歌曰、
意富美夜能、袁登都波多傳、須美加多夫祁理、
大宮少男廚袖おほみやの、をとつはたで、隅傾すみかたぶけり、
如此歌、而乞其歌末之時、袁祁命歌曰、

意富多久美、袁遲那美許曾、須美加多夫祁禮、
大工 おほだくみ、伯父 をぢなみこそ、隅傾 すみかたぶけれ、

爾志昆臣亦歌曰、

意富岐美能、許許呂袁由良美、淤美能古能、夜幣能、斯婆加岐、伊理多多受阿理、
大王 おほぎみの、心緩 こゝろをゆらみ、臣 おみのこの、八重 やへの、柴垣 しばがき、入不立有 いりたゝずあり、

云云、爾王子 ミコ 亦歌曰、

意布袁余志、斯昆都久阿麻余、斯賀阿禮婆、宇良胡本斯祁牟、志昆都久志昆、
大魚 おふをよし、鮪衝海人 しびつくあまよ、汝有 しがあれば、心戀 うらごほしけん、鮪衝鮪 しびつくしび、

をぢなみ―宣長云、拙劣也

紀記歌集跋

紀記歌集何書。解釋根源之歌謠書也。蓋有此根源。而後千枝萬派。今之歌。謠有焉。有客曰。君子務本。本立而道生。嗚呼此書行。而歌謠之事其生哉。先生及著此書。令余跋之。余辭。先生不聽。於是乎。不避不敏。採筆于負喧菴東窻下。

時天明八歲次戊申秋八月

大江魚足識

神樂歌

庭燎―神前の燒火也此の歌古今集に神遊の歌とて載す

○庭燎

深山には。深山には。霰ふるらし。外山なる。眞拆の葛。色づきにけり。色づきにけり。

阿知女作法―天鈿女命の俳優の戲れのことと云ふ

○阿知女作法

本　阿知女。於々々々。

末　於介。阿知女。於々々々。

本、末―本は左座、末は右座於々―笑聲也、於介を守部は可笑しの意かと云へり

採物―神樂の人長の採りて舞ふ物、此歌拾遺集にも出づ

八十氏人―神樂に集へる多くの人々也

此歌古今集に出づ

或說―場合によりて替へ歌ふものなりといふ

みむろ―御諸のこと

此歌拾遺集にも出づ

○採物

榊

本

榊葉の。香をかぐはしみ。とめくれば。八十氏人ぞ。圓居せりける。八十氏人ぞ。圓居せりける。

末

神籬の(ィや)。みむろの山の。榊葉は。神の御前(ィみむろ)に。茂りあひにけり。しげりあひにけり。

或說

本

榊葉に。木綿取り垂でて。誰が世にか。神の御前(ィみむろと)に。いはひそめけん。いはひそめけん。

此歌古今集にも出づ

神のきね―かんなぎの事を木根に掛く

末

霜八度。置けど枯れせぬ。榊葉の。立ち榮ゆべき。神のきねかも。神のきねかも。

幣

本

幣帛は。わがにはあらず。天にます。豐をか姫の。神のみてぐら。神のみてぐら。

末

幣帛に。ならましものを。皇神の。御手に取られて。なづさはましを(ィるべく)。なづさはましを。

杖

本

此杖は。いづこの杖ぞ。天にます。豐をか姫の。宮(ィ神)の杖なり。神の杖なり。

此歌拾遺集にも出づ

豐をか姫―豐宇氣神のこと

末　逢坂を。今朝こえくれば。山人の。千歳つけとて。くれし(ィ切れる)杖なり。くれし杖なり。

（此歌拾遺集にも出づ）

或説

本　足引の。山を險しみ。木綿附くる。榊が枝を。杖にきり(ィつき)つる。杖にきりつる。

（此歌同上）

末　皇神の。み山の杖と。山人の。千歳を祈り。きれる御杖ぞ。きれる御杖ぞ。

（山人―仙人の意）

篠

本　此篠は。いづこの笹ぞ。舍人等が。腰にさ(ィま)がれる。鞆岡のさゝ。ともをかの笹。

（鞆岡―山城の地名、其上の二句序の越あり）

末　笹分けば。袖こそ破れめ。利根川の。石は蹈むとも。いざ川原より。いざ川原より。

（いざ川原より―行かん）

或説

本　笹の葉に。雪降りつもる。冬の夜に。豐の遊を。するがたのしさ(ィき)。するがたのしさ。

（豐の遊―豐のあかりのこと）

末　瑞籬の。神の御代より。笹の葉を(ィに)。手種に(ィたぶさと)取りて。遊びけ(ィす)らしも。遊びけらしも。

（瑞籬の―久しき意）

弓

本　弓といへば。品なきものを。梓弓。ま弓槻弓。品こそあるらし。品こそあるらし。

（弓といへば―弓と一口にいへば ま弓―檀もて作る）

末

陸奥の。安達のま弓。わが引かば。やう〳〵（ィやく）寄り來。しのび〳〵に。しのびしのびに。

此歌古今集に出でたるは第四句末「さへよりこ」とあり
安達―郡名

或說

末　さつを（ィて）ちが。持たせのま弓。奥山に（ィの）。み獵すらしも。弓の弭見ゆ。弓のはず見ゆ。

さつを―狩人

本　四方山の。まも（ィほ）りに賴む。梓弓。神の寶に。今しつるかな。今しつるかな。

梓弓―これは實の弓、次なるは春の枕詞

末　梓弓。春くるごとに。皇神の。豐の遊に。あはんとぞ思ふ。あはんとぞ思ふ。

劔

本

白銀の。目貫の太刀を。さげ佩きて。奈良の都を。ねるは（ィや）誰が子ぞ。ねるは誰が子ぞ。

此歌拾遺集に出づ
さげ佩きて―紐を長く垂れて佩きて

末　石の上。ふるや男の。太刀もがな。組の緒垂でて。宮路かよはん。みやぢ通はん。

組の緒―太刀の紐

或說

本　いはひこし。神は祭りつ。明日よりは。組の緒垂でて。遊べ太刀佩き。遊べ太刀佩き。

末　奥津城に。皇神たちを。いはひこし。心は今ぞ。たのしかりける。たのしかりける。

鉾

本　此鉾は。いづこの鉾ぞ。天にます。豐をか姫の。宮の鉾なり。みやの御鉾ぞ。

杓―瓢也、飲器也

此歌古今六帖に載せたるは「大原やせが井の水を手に汲みて鳥はなくとも遊びてゆかん」とあり

鳥―曉の鳥也

此歌古今集に出づ

水さびにけり―水澁の浮く也

片折―本末の内一方ゐろしてうたふ也

末

四方山の。人の守りに。する鉾を。神のみまへに。いはひつるかな。いはひ立てたる。

杓

本

大原や。清和井の清水(ィ水を)。ひさごもて。鳥は鳴くとも。遊びてを汲め(ィゆかん)。遊びて行かん。

末

我門の。板井の清水。里遠み。人し汲まねば。水さびにけり。水草居にけり。

片折(歌ひぶりの名)

本

大原や。せがるや。せがるの水を。

諸舉―本末共に上げて謠ふ也

葛―入綾に「如此あり」て歌を記さず」云々、蓋し杓葛は杓の古稱にて、もと一個の名稱なるを、中古以後誤りて二つと心得たるものの放題なるなき也、梁塵愚案抄には「本、わぎも子があなしの山の山人と人も見るべく山かづちせよ、末、みし山には霰ふるちの外山なる正木の葛色づきにけり」とあれど宜しからず、今採物の歌として集に採りて、本歌の第一句「まきもくの」第四句「人も見るがに」とし、末

末

我門の。いたるや。板井の清水。

諸舉(歌ひぶりの名)

本

せがるや。せがるの水を。

末

いたるや。板井の清水。

葛

〔細書云、有曲名耳、無其歌曲〕

○韓神

歌乙のまゝにて出でたるをば、入綾に「日影と眞拆の歌なれどもかゞちといふにつきてもと瓠葛に借りうたひし歌ども也」といへり

三島—伊豆

韓神—大年神の御子

からをぎ—枯荻を持つ也

して—木綿垂幣

大直日—直會（ナホラヒ）とて神を祭りはてゝ後人々集りて宴する日

神さかもどれ—神榮歸の意、神よもとのおましに歸らせ給へ

本

三島木綿。肩に取り掛け。われ韓神の。からをぎせんや。からをぎ。からをぎせんや。

末

八葉盤を。手に取りもちて。われ韓神の。からをぎせんや。からをぎせんや。

或說

本

わが生れは。皆人（ィみやびと又みやびも）知らず。父が方。母が方とも。神ぞ（ィは）知るらん。神ぞ知るらん。

末

宮（ィみな）人の。しでは榮ゆる。大直日。いざわがともに。神さかもどれ。神さかもどれ（ィに）。

○大前張 或曰ニ催馬樂曲一

大前張—小前張、共に神樂の餘興としてうたへる催馬樂なるべしと守部は云へり

おほよそ衣—大裝衣とほめていへるならん

膝とほし—膝迄長くとほしてゆるやかに着る也

此歌本末一首と

あまごろも—雨衣蓑とつゞく

宮人

本

宮人の。おほよそ衣。膝とほし。着のよろしもよ。おほよそごろも。

末

ひざとほし。き（ィゆき）のよろしもよ。おほよそごろも。

難波潟

本

難波潟。汐みちくれば。海士衣。あまごろも。

末

あまごろも。田蓑の島に。田鶴なきわたる。たづ鳴きわたる。

木綿志天

本

ゆふしでし（ィの）。神の幸（ィたき）田に。稻の穗の。いなのほの。

末

いなの穗の。諸穗に垂でよ（ィされは）。かれち穗もなく（ィこれといふなし）。かれちほもなィ。

前張

本

さいばらに。衣は染めん。雨ふれど。雨ふれど。

末

雨ふれど。うつろひがたし。深く染めてば。ふかくそめてば。

階香取

本

しながどり。猪名の湊に。アイゾ。入（ィつ）る舟の。檝よくまかせ。舟（ィになし）かたぶくな。舟（ィになし）傾くな。

末

若草のヤ。妹も乘りたりヤ。アイゾ。我も乘りたりや。舟かたぶくな。舟かたぶくな。

井奈野

本

しながどりヤ。猪名の柴原。アイゾ。飛びてくる。鳴が羽音は。おとおもしろき。鳴が羽おとは（末句ィかはおと）。

末

しながどりヤ。ゐなのふし原。アイゾ。あ（ィか）みさすや。我脊（ィよ）の君は。いくらか取りけん。いくらか取りけん。

脇母古

本

かれち穗―守部云、枯朽穗也

此歌拾遺集に出づ

さいばら―辟榛（サキハリ）にて榛の木をさきて煎じて染むる事かと守部は云へり

しながどり―枕詞

猪名―攝津

アイゾ―拍子の詞

此歌拾遺集に出でたるは「しなが鳥ゐなのふし原飛渡る鳴が羽音は面白き哉」とあり

あみさすや―網を張る也

鳥も取られず―前歌の「我脊の君はいくちかとりけん」といふに對ふるにて、あだし女には心も移ちず、一つも犯さざりしとの比喩といふ

我妹子にヤ。一夜膚觸れ。アイゾ。あやまちせ(ィりに)しより。鳥も取られず。鳥も取られずヤ(末句ィ鳥とらず)。

末　然りともヤ。我がせ(ィよ)の君は。アイゾ。五つと(ィよ)り。六つ取り。七つ八つ取り。こゝのよ。十は取り。十は取りけんヤ。

○小前張

こもまくら―枕詞

贄人―魚鳥など捕りて供御に備ふる人

薦枕

本　こもまくら(ィヤ)。高瀬の淀にや。誰が贄人ぞ。鳴突きのぼる。網おろし。小網さしのぼる。アイゾ。たがにへびとぞ。鳴つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。

末　天にますヤ。豐をか姫や。その贄人ぞ。鳴つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。アイゾ。その贄人ぞ。鳴つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。

閑野―守部云、地名か又は野澤の水ゐける地か

閑野

本　しづやの小菅。鎌もて刈らば。生ひんや。生ひんや小菅。(末句ィになし)

末　天なる雲雀。よ(ィお)りこや雲雀。とみくさ。富草もち(ィくひ)て。

富草―稻

磯等

本　いそらが崎に。鯛釣る海士も(ィの)。鯛つる。たひつる(ィあまの)。

末　我妹子がためと。鯛つるあまも(ィの)。たひつるあまも(ィの)。

いそらが崎―志摩

いとこせ―愛するよるせ、一時の浮氣でなく、一生變らじとしん底から愛する女

かひなげ―手を擧ぐること

殖槻田中―共に大和

きて―おきての省略

篠波

本

さゝなみや。志賀の辛崎や。御稻搗く。女のよさゝや。それもがも(ィな)。かれもがも(ィな)。いとこせの。眞いとこせにせん。

末

蘆原田の。稻舂蟹ノャ。おのれさへ。よめを得ずとてや。さゝげて(ィや)はおろしャ(ィさゝげては)。おろしては(此句イになし)さゝげャ。かひなげをするや。

殖槻

本

うゑつきや。田中の杜や。もりやテフ。笠の淺茅が原に。

末

われをきて。二妻とるや(ィな)。とるなテフ。笠の淺茅が原に。

總角―小童もふと―おもふとの省略

大宮―内裏

少小舍人―殿上童のこと

テラニヤ―玉を賞むる意の拍子詞也

總角

本

總角を。早稻田にやりてャ。其をもふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。

末

そをもふと、何もせずして、春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。

大宮

本

大宮の。少小舍人ャ。テラニャテラニャ。玉ならば。テラニャ。

末

玉ならば。晝は手に据ゑ(ィとり)ャ。よるは纏き寢ん(ィさねてん)。テラニャ。よるは

とろちなや―生捕りたきものを取るべき手こそ口惜しけれ、とろちは取る鏑の約といふ

ねたさうれたさ―懷儀の意　オサマサ―笑ふ意の囃詞

湊田

本　みなと田に。鵠八つ居りヤ。とろちなや。とろちなや。八つながら。とろちなや。

末　八つながら。物もはず居りヤ。とろちなや。八つながら。とろちなや。とろちなや。

蛬

本　きりぐすの。ねたさうれたさヤ。御園生に參り來て。木の根をほりはんで。オサマサ。角折れね。オサマサ。角折れぬ。

末　ねたさうれたさヤ。御園生に參り來て。木の根をほりはんで。オサマサ。角折れぬ。

或說

したちがまうど―守部云、したちは姓氏か地名か、まうどは眞人の音便　なとりれそ―取入るゝ勿れ

早歌―本末共に短く合せたる歌

いづれぞも云々―何れの所に留るぞ

本　したちがまうどの。單の狩衣。なとりれそ。いと妬し。

末　なとりれそ。小雨にそぼぬらせ。夜離する。いと〳〵妬し。

千歳

本　せんざい。せんざい。せんざいや。ちとせの。せんざいや。本方なほせんざい。

末　まんざい。まんざい。まんざいや。よろづよの。まんざいや。末方なほまんざい。

早歌

本　ヤ。いづれぞも。とうどまり。

末　ヤ。かの崎こえて。

本　ヤ。深山の小葛。

末　ヤ。繰れ〳〵こつゞら。

本　ヤ。鷺の頸取ろんと。

取ろんと―取ちんと也

末　ヤ。いとはた長うて(ィとろんと)。

本　ヤ。あかゞり蹈むな。後なる子。

あかゞり―あかぎれ、皸

末　ヤ。我も目はあり。先なる子。

本　ヤ。舍人來んぞ。しり來んぞ。

しり來んぞ―後より來んぞ

末　ヤ。我も來んぞ。しりこんぞ。

本　ヤ。あちの山脊(ィを)山。

あち―彼方也

末　ヤ。脊山のあちの夫(ィて)。

本　ヤ。近衞の御門に。巾子落いつ。

巾子―冠の附屬品にて髪に插すもの

末　ヤ。髪の根の無ければ。

本　ヤ。女子のざえは。

ざえ―財、えも

末　ヤ。霜月しはすの。かきこぼり。

かきこぼり―かきこぼれたる籾、落穂

本　ヤ。あふり戸や。ひわ(ィは)りど。

ひわりど―檜割戸

末　ヤ。ひわ(ィは)りどや。あふりど。

本　ヤ。ゆすりあげよ(ィん)。そ(ィす)ゝりあげん。

末　ヤ。そ(ィす)ゝりあげよ。ゆすりあげん。

本　ヤ。谷からゆ(ィい)かば。岡から行かん。

末　ヤ。岡から行かば。谷から行かん。

本　ヤ。これからゆ(ィい)かば。かれから行かん。

末　ヤ。かれからゆかば。これからゆかん。

○明星

吉々利々

本

きゝりゝ。千歳榮。白衆等。聽說晨朝。清淨偈や。明星は。明星は。くはやこゝなりや。なにしかも。今宵の月の。たどこゝにますや。たどこゝに。たどこゝにますや。

末

びやくしゆんと。ちやうせつ。しんてう。清淨偈や。あかぼしは。みやうじやうは。くはやこゝなりや。何しかも。今宵の月の。たどこゝに。たどこゝにますや。たどこゝに。たどこゝにますや。

得錢子

本

とくせにこが。閨なる標結ふひばを。誰か手折りし。とくせにこや。たゝらこきひば(ィよ)や。誰か手折りし。とくせにこや。

きゝりゝ―元きりきりと重ねたる詞ならん
千歳榮云々―法華懺法の讃なり
くはやこゝ―くは此、はやは感嘆の詞
びやくしゆんと―白衆等を末は謠方にて撥ぬる也
得錢子―得選、女官の名稱
ひば―檜葉か或は柴の轉音
たゝらこき―其意詳ならず

末

我こそは。見ればや。うれたさンに。手折りて來しかや。とくせにこや。たゝらこきひば(ィよ)や。手折りて來しかや。とくせにこや。

木綿作

本

木綿作る。志那の原にや。朝たづンね。朝尋ね。あさたづねや。

末

あさたづンね。汝も神ぞや。遊べあそンべ。あそべあそべ。あそべあそべや。

晝目歌

本

いかばかり。よきわざしてか。天照るや。ひるめの神を。暫留めん。しばしとどめん。

末

うれたさンに―ねたさに、彼檜は得選子が他の人と隱れん蔭なればそれが妬さに我手折りて來れりと也
志那―ゆふに作る木と云ふ
汝も神ぞや遊べ―神に仕ふる以上は汝も神也いざ遊びせよとなるべし
ひるめの神―日神を大日靈貴と云ふ

いづこにか―拾遺集「我駒は早くゆきなん朝日子がやへさす岡の玉笹の上に」

いづこにか。駒をつながん。朝日子が。さすや岡邊の(ィあさるさはへの)。玉笹のうへに。玉ささの上に。

或說

なにわざを。われはしつょか。

弓立―湯立の借字

弓立

本

伊勢島や。海士のとねらが。燒く火の氣。於介於介

末

たく火の氣。いそらが崎に。かをりあふ。於介於介

本

大君の。ゆきとる山の。若櫻。於介於介

末

とねら―公に仕ふる者の總名にて賤しき者迄を云ふ

ゆき―守部云、齋木か

わかざくら。とりにわれゆくや。舟檝棹。人貸せ。於介於介。

本

皇神の。今朝の神上に。あふ人は。千歲の命。延ぶ(ィにこヌあり)とこそ聞け。

末

皇神は。よき日祭れば。明日よりは。あけの衣を。褻衣にせん。

朝倉

本

あさくらや。木ンの丸殿にヤ。わが居れば。わがをれば。

末

わがをれば。名のりをしつょヤ。行くは誰が子ぞ。ゆく人やたれ。

或說

本

あけの衣―明衣、明白清淨なる齋服

朝倉―筑前也、此歌天智天皇の御製を聊か改めて歌ふ也

木の丸殿―黑木作の御所

朝倉や。おめの湊に。網引き居れば。あ(ィた)まの童女に。な(ィあ)びき(ィに)あひにけり。なびきあひにけり。

末

葛城や。渡る久米路の。繼橋の。こゝろも(ィころもも)知らず。いざかへりなん。朝かへりなん。

葛城云々—大和也、役小角鬼神を使ひて岩橋を架けしと云ふ、「繼橋の」までを序と見て其次に「つぎ〳〵にわたり來つれど其の心の中絶えしも知るべからねば」と補ひて見るべし

其駒

その駒ぞや。我に(ィになし)。我に(ィになし)草乞ふ。草は取り飼はん。轡(ィみつは)取り。草は取りかはんや。水は取りかはんや。

或說

あしぶちのや。もりの。杜の下なる。若ごま(ィさ)率てこ。足斑の。虎毛の駒。

籠殿歌

本

籠殿—神供を調ずる所にて、春秋に祭を行はる

豐竈。御遊すらし。久かたの。天の川原に。琴の聲する。ひざの聲する。ひざの聲する。

末

久かたの。天の川原に。豐へつひ。御(ィになし)あそびすらしも。ひざ(ィは)の聲する(ィよし)。ひざの聲する(ィことのこゑよし)。

ひざ—膝也、膝打ちて樂しむ也

酒殿歌

本

さかどのは。廣し眞廣し。甕越に。我が手な取りそ。然はせぬわざ。然告げなくに。

酒殿—朝廷の酒殿、酒の神を祭れり

我が手な取りそ—女の男を制する詞

末

さかどのは。今朝はな掃きそ。とね(ィむれ)り女の。裳引き裾引き。今朝は掃きてき。今朝庭掃きゝ。

或說

天の原。ふりさけ見れば(ィる)。八重雲の。雲の中なる。雲の中臣の。中臣の。天の小

中臣—天兒屋命の裔

菅を。拆きはらひ。祈りしことは。今日の日のため。あなたふとや。わが皇神の。かむ（ィみ）ろぎのよさ（ィこ）。

又

庭鳥は。かけろと鳴きぬなり。起きよ。起きよ。わが一夜妻（ィかとによのつま）。人もこそ見れ。人もこそ見れ。

かむろぎ―皇祖神也

庭鳥は―萬葉集「我門に千鳥しばなく起きよ起き上我一夜妻人に知らゆな」の作りかへ

催馬樂

○律

我駒

一段

いで我駒。早く行きこ（ィま）せ。待乳山。アハレ。まつち山。ハレ。

二段

つち（ィつゝら）山。待つらん人を。行きてはや。アハレ。ゆきてはや見ん。

澤田川

一段

いで我駒云々―此歌萬葉集十二に「いで吾駒早くゆきこそまつち山待つらん妹を行きてとく見ん」とある詞をかへたる也

待乳山―大和つち山―まを略す

恭仁―山城
高橋わたす―斯る淺き小流に課錢して斯る高き橋をわたさしむるよとの誹の意を含めて味ふべからん

澤田川。袖つくばかり。淺けれど。ハレ。

二段

淺けれど。恭仁の宮人。高橋わたす。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。高橋わたす。

高砂

一段

さいさご―眞砂

高砂の。さいさごの。たかさごの。

二段

白玉やなぎ―高貴の家の二人の處女に喩ふ

尾上に立てる。白玉椿。玉やなぎ（ィつばき）。

三段

まし―汝の意

それもがと。サン。ましもがと。ましもがと。

さみを―染緒也

四段

練緒さみをの。御衣掛にせん。玉やなぎ。

五段

何しかも―何としてまア

何しかも。サン。何しかも。なにしかも。

六段

まだいけん―あわて急ぎし事なりけん、緩やかにものすべかりしものを

心もまだいけん。百合花の。さゆり花の。

七段

今朝咲いたる。初花に。あはましものを。さゆり花の。

夏引

一段

夏引―ひきまゆといへるよき絲也

夏引の。白糸。七量あり。さごろもに。織りても著せん。ましめ離れよ（ィに）。

二段

七量―衣七八段分の織料也
ましめ離れよ―汝本妻と離れよと女が男にいふ也

かたくなに云々―男が其女にいふ返答也　こくび―襟のこと　著せめかも―反語　貫河―三河國なるべしと云ふ、「ぬき川の……るはしも」女の詞、「しかし……買ひにかん」男の詞、「沓……かよはん」女の詞　おや避くる夫―父母が間を引きさく夫　るはしも―愛すべし、うを省く　線鞋―草履の紐をつけたるものとぞ

かたくなに。ものいふ女かな。汝麻衣も。我妻のごとく。袂よ(ィせ)く。著よく肩よく。こくびやはらかに。縫ひ(ィまし)著せめかも。

貫河

一段

ぬき川の。瀬々の小菅の。やはら手枕。やはらかに。寢る夜はなくて。おや(ィき)避くる夫。

二段

おやさくる夫は。ましてるはしも。しかし(ィも)あらば。矢矧の市に。沓買ひにかん。

三段

沓かはば。線鞋の。細底を買へ。さしはきて。上裳とり著て。宮路かよはん。

東屋

一段

まやのあまり―まやはあづまやの反復にて、あまりは軒(ツマ)の餘り卽ち葺下し也　とンのど―殿戸　我や人妻―我は人妻ならず君が妻なるものを何のか遠慮が入るものか　走井―流れ水　飛鳥井―二條萬里小路にあり　みもひ―もひは盥なり、飲水のこと　此歌古今集に出て「といふ」を「てふ」に作る

あづまやの。まやのあまりの。雨そゝぎ。われ立ちぬれぬ。そのとンのど開かせ。

二段

鎹も。扃もあらばこそ。そのとンのど。われさゝめ。おし開いて來ませ。我や人妻。

走井

はしりゐの。小萱刈り收めか(ィお)け。それにこそ。繭つくらせて。糸引きなさめ。

飛鳥井

あすかゐに。あすかゐに。宿りはすべし。オケ。蔭もよし。かげもよし。みもひも寒し。御秣もよし。

青柳

一段

あをやぎを。あをやぎを。片糸によりてヤ。オケヤ。鶯の。オケヤ。

二段

うぐひすの。縫ふといふ笠は。オケヤ。梅の花笠や。

伊勢海

伊勢の海の。いせのうみの。清き渚の。しほがひに。なのりそや摘まん。貝や拾はん（イヤ）。玉やひろはん（イヤ）。

しほがひ―潮の間、故障の起ちぬ間に早く女を手に入れんとの比喩
なのりそ―神馬藻、穂俵（ホンダハラ）也

庭生

庭に生ふる。庭におふる（此句イになし）。から薺は。よき菜なり。ハレ。みやびとンの。下ぐる袋を。おのれ懸けたり。

みやびとン―宮人
下ぐる袋―薺の實は三角形にて袋の如ければいふ

我門爾

一段

わが門にャ。わがかどに。上裙の裾ぬれ。下裳の裾ぬれ。朝菜摘み。夕菜つみ。あさな

上裙―和名抄「上曰」裙下曰」裳」

二段

朝菜つみ。夕菜つみ。我名を。知らまくほしからば。御園生の。みそのふの。

三段

みそのふのや。みそのふの。あやめの郡の。大領の。愛娘といへ。弟娘と。こそいはめ。

あやめの郡―讃岐か河内か詳なちず
大領―大郡の司

我門乎

一段

わが門を。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

とさんかうさん―とざまかうざまねる―練り歩く
寄來ざるらしや―言ひ寄り來れば よいと思ふのに寄りては來ぬのか、それとも言ひ寄る由がなくてかと、内なる女のやるせなき小さき胸の惱

二段

よしなしに（イさらば）。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

大路

一段

大路に。沿ひてのぼれる。青柳が花や。あをやぎが花や。

二段

しなひ—柳の枝の撓み垂れたるをいふ　大芹—博奕にたとへて樗蒲を大羅と云ふ　小芹—雙六を小羅と云ふ　せんばんさんたのき—栂檀珊瑚の木かと守部は云ふ　むしかめ—卒些食也、勝ちのこと　かすめ浮けたる—ほのかに浮紋をつけたる也　淺水—越前ふりにし—舊りにし、上の句は序也　消息し—案内の意　サキンダチヤ—公達也、拍子詞とす　たけくし—越前武生　じよう—國司の中の掾也

青柳が。しなひを見(ィし)れば。今(ィいと)さかりなりや。今さかりなりや。

大芹

大芹は。國の禁物。小芹こそ。ゆでてもうまし。是やこの。せんばん。さんたのきの。柞の木の盤。むしかめの筒。犀角の賽。平賽投賽。兩面。かすめ浮けたる。切りとほし。金はめ盤木。五六がへしの。一二のさいや。四三のさいや。

淺水

あさンづの橋の。とどろ〳〵と。降りし雨の。ふりにし我を。誰ぞ此。中人たてて。御許のかたち。消息し。とぶらひに來るや。サキンダチヤ。

插櫛

さしぐしは。十ま(ィは)り七つ。ありしかど。たけくのじよう(ィざう)の。朝に取り。よ(ィゆ)うさり取り。とりしかば。さしぐしもなしや。サキンダチヤ。

鷹子

鷹の子は。余に賜らんや。手にするゑて。粟津の原の。御栗栖の。めぐりの鶉。取らさんヤ。サキンダチヤ。

逢路

あふみちの。しののをずす(ィふよ)き。はやひかず。子持。待ちやか(ィと又せ)ぬらん。しののをずすきヤ。サキンダチヤ。

道口

みちのくち。武生の國府に。我はありと。親には申したべ。心あひの風ヤ。サキンダチヤ。

更衣

ころもがへせんや。サキンダチヤ。我衣は。野原篠原。萩の花摺や。サキンダチヤ。

何爲

いかにせん。せんや(ィになし)。鴛鴦の鴨鳥。出でてゆけ(ィか)ば。親はありくと。さいなめど—叱責すれど

しのをずすき—しのは簾く物の意、小薄也、女に譬ふ　はやひかず—早くうけひかざり　子持云々—今は子持となりて我を待ち兼ぬらん　心あひの風—我が戀ひ思ふ親の方に吹き行く風

めど。夜妻(ィはぁり)さだめつや。サキンダチヤ。

とゞこほれ―出發も滯る、旅程の後朝のさま也

鷄鳴

鷄は鳴きぬてふ。今朝くらまぎれ。下紐の緒に。おしすがりゐてこそ。とゞこほれ。泣く子なすまで。

西寺の云々―父子心を合せて御物をかすめ取る者あるを早く公へ訴へよとの諷諫なるべしと、守部の說也

老鼠

西寺の。おいねずみ。若鼠。御裳喰づ。袈裟つんづ。けさつんづ。法師に申さん。師にまうせ。法師に申さん。師に申せ。

くぼのな云々―陰部の異名を列べたるものなるべし、「近來不用」と古註本に見えたり

隱名

くぼ(ィを)のなをば。なにとかいふ。くぼ(ィを)のなをば。なにとかいふ。つび(ィう又ら)たり。けふくなう。たもろ(ィは)。ひのなかの。ひつき(ィく)めな。けふくなう。たもろ。

此歌は續日本紀に見ゆ、聖武天

○呂

安名尊

一段

あなたふと。あなたふと(ィになし)。今日の尊さや。いにしへも。ハレ。

二段

いにしへも。かくやありけんヤ。今日のたふとさ。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。けふのたふとさ。

新年

一段

あたらしき。あたらしき。年のはじめにヤ。かくしこそ。ハレ。

皇天平十四年正月群臣に宴を賜ひし時六位以下の人の歌へるなり

二段

かくしこそ。仕へまつらめヤ。よろづ代までに。

三段

アハレ。ソコヨシャ。よろづよまでに。

梅枝

一段

此歌古今集にあり

むめがえに。來居る鶯ヤ。春かけて。ハレ。

二段

春かけて。鳴けどもいまだヤ。雪は降りつゝ。

三段

アハレ。ソコヨシャ。雪は降りつゝ。

櫻人

櫻人―尾張作良郷の人

一段

さくらびと。さくら人。その舟ちゞめ。島つ田を。十町つくれる。見て歸り來んヤ。ソヨヤ。あ(ィさ)すかへりこんヤ。ソヨヤ。

ちゞめ―とゞめ

二段

ことをこそ。明日ともいはめ。をちかたに。

つまさるせな―有禁忌常不用也、よばふひと―仍替用之、

眞來じヤ。しあ(ィしや)すもさねこじや。ソヨヤ。

ことを―言葉
つまさせる―妻とせる女あるりの意
眞來じヤ―口にはいへど實際は歸り來ぬに相違なし
しあす―明後日

葦垣

一段

あしがき。まがき。かきわけて。踏み越す(ィてふこす又けふこす)と。追ひ越すと。ハレ。

二段

踏み(ィてふ)越すと誰か。たれか。此ことを。親に。まうよこし。申しゝ(ィけらしも)。

三段

まうよこし―横言を申し、讒言し

とどろける―議言によりて騒ぎ立ちたる意

とどろける。この家。此いへの。弟嫁。親にまうよこし。けらしも。

四段

天地の云々―以下嫁の辯解の辭

天地の。神も。かみも。證したべ。我はまうよこし。申さず。

五段

すがな―すげなき也、「菅の根の」は序詞

菅の根の。すがな。無情ことを。我は聞く。われは聞くかな。

山城

一段

狛のわたり―山城木津の渡に近き名所にて昔黐瓜の名物を出したる所

山しろの。狛のわたりの瓜つくり。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。瓜つくり。うりつくり。ハレ。

二段

瓜つくり。我を欲しといふ。いかにせん。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。いかにせん。いかにせん。ハレ。

三段

瓜たつまでに―破瓜の年頃に、みづあげしてもよい年頃に

いかにせん。なりやしぬら(ィなま)し。瓜たつまでに。ヤライシナヤ。サイシナヤ。瓜たつまでに。

眞金吹

一段

此歌古今集に出づ

まがねふく。眞金ふく(イになし)。吉備の中山。帶にせる。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。帶にせる。ハレ。

二段

帶にせる。細谷川の。音のさやけさ。ヤライシナヤ。サイシナヤ。音のさや。おとのさやけさ。

紀伊國

一段

きのくにの。紀の國のヤ(イになし)。白良の濱に。ましらゝの濱に。おり(イきて)ゐる鷗。ハレ。その玉もてこ。

二段

風しも吹いたれば。餘波しも立てれば。水底霧りて。ハレ。その玉見えず。

其玉ひかる有、怪時替用、

餘波―波の引きたる後に泡立ち殘る波

葛城

一段

かつらきの。寺の前なるや。豐浦の寺の。西なるや。

此歌は光仁天皇、龍潛の時童の謠也

二段

榎の葉井に。白璧沈くや。眞白璧沈くや。おしとンど。おしとンど。

榎の葉井―皇天の妃井上内親王の意を掛く

白璧―天皇の諱也、續日本紀に白璧王とあるは此歌によれば璧は璧の誤なるべし

三段

しかしてば(イしらてしては)。國ぞ榮えんや。我家らぞ。富せんや。おしとンど。おしとンど。おし

竹河

一段

竹河の。橋のつめなるヤ。橋のつめなる(イヤ)。花園に。ハレ。

竹河―伊勢多氣郡齋宮にあり

二段

花ぞのに。我をば放てや。我をば放てや。めざしたぐへ(イたゝえ)て。

めざしたぐへて―童女を一所に添へて、めざしは童女の一名

河口

一段

かはぐちの。關の荒垣や。關のあらがきや。まもれども。ハレ。

二段

まもれども。出でて我寢(イになし)ぬや。出でてわれ寢ぬや。關のあらがき。

出でて我寢ぬ―忍び出でて思ふ人と寢たり

此殿者

一段

三つば四つばー三棟四棟、子孫一族の榮ゆるをいふ也

春日すら云々ー春の長き日に行き行きてすら盡きぬ程長き倉の垣よと也

うばたまりー守部云、姥專女(ウバタウメ)也

このとのは。むべも。宜も(イになし)富みけり。三枝の。アハレ。さきくさの。ハレ。

二段

さき草の。三つば四つばの中に。殿づくりせりヤ。とのづくりせりヤ。

此殿西

一段

この殿の。此殿の。西の。西の倉垣。春日すら。アハレ。春日すら。ハレ。

二段

春日すら。ゆけど。ゆけどもつきず。西の倉垣や。にしのくらがきや。

此殿奥

一段

この殿の。此殿の。おくの。奥の造酒舍の。うばたまり。アハレ。うばたまり。ハレ。

二段

こざかごゆー小賢し肥えにて男の嘲る意の詞かと云ふ

招くをなみー招き呼ぶべき手段なく閉口す

此歌古今集に出づ

みまさかや云々ー上二句「さらさらに」の序

うばたまり。われを。我を戀ふらし。こざかごゆ(イえす)なるや。こざかごゆなるや。

鷹山

一段

たか山に。たかを。鷹を(イになし)放ちあげて。招くよし(イちあけて)を無み。アハレ。をくをなみ。ハレ。

二段

をくをなみ。わがす。わがする時に。會へる夫かも(イり)ヤ。あ(イの)へるせなかも。

美作

一段

みまさかや。くめの。久米の佐良山。さら〳〵に。ナヨヤ。さら〳〵に。ナヨヤ。

二段

さら〳〵に。わがな。我名はたえ(イて)じ。よろづよまでにヤ。萬代までにヤ。

藤生野―山城
しめはやし―定めたる意
がに―寫めに
朱雀―大路也
まだい―まだきの音便

藤生野

一段

ふぢふのの。かたち。かたちが原に(ィを)。しめはやし。ナヨャ。しめはやし。ナヨャ。

二段

しめはやし。いつき。いはひしも(ィになし)しるく(ィし)。時にあへるかも(ィャ)。時にあへるかもャ。

妹與我

いもとわれと。妹と我と。いるさの山の。山蘭。手な觸れそャ。香を薫す(ィまさる)がにャ。香を(ィとく)增さすがにや。

淺綠

あさみどりャ。濃い縹。染めかけたりと。見るまでに。玉光る。下光る。新京。朱雀の。しだり柳。まだい(ィは)田居となる。前栽秋萩撫子。唐葵。しだり柳。

青の云々―此宛字凡て守部の入綫の說に據る
凌箭矢―凌羽として風を凌ぎて直に飛ぶ也、其羽の眞箭(サヤ)也
肱笠―袖笠、久方の雨といふ枕詞より轉じ來れる語なるべし
席田―美濃

青馬

青の(ィう有り)ま。放れば取り繫げ。眞青(ィせ)の馬。はなれば取りつなげ。しのいざやの。凌箭矢の。箭雄(ィせ)子が孫なる。眞郎子。眞大膽(ィたはろん)子の。大氣のわら(ィろ)はの。さを(ィせ)こがひこなる。さいろンこ。

妹之門

妹が門や。夫が門。行き過ぎかねてや。わがゆかば。肱笠の。ひぢがさの。雨もや降らなん。郭公。雨やどり。笠やどり。やどりてまからん。しでたをさ。

席田

一段

むしろだのャ。席田の。伊津貫川にャ。住む鶴の。いつぬき川にャ。すむつるの。

二段

すむ鶴のャ。すむつるの。千歲をかねてぞ。あそびあへる。よろづよ(ィちとせを)かね

込んだり―五月の菖蒲を多く持寄りたる也
さやめ―あやめ、さあやめの略也
總角―童男
かより―かは接頭語、寄り
本滋―木の茂りたること

てぞ。あそびあへる。

大宮

大宮の。西の小路に。菖蒲込んだり。さやめこんだり。タリ。ヤリ。タンナ。

總角

あげまきや。タ(ィト)ウ〳〵。尋ばかりや。タ(ィト)ウ〳〵。放りて寢たれども。まろび逢ひにけり。タ(ィト)ウ〳〵。かより逢ひにけり。タ(ィト)ウ〳〵。

本滋

一段

もとしげき。もとしげき。吉備の中山。昔より。むかしから。

二段

むかしから。昔より。名の舊りこぬは。今の世のため。けふの日のため。

美濃(ィ蓑)山

わかせヤ―まゐれとも謠ふ
まゆとじめ―眉の美しき女、又は眉を拔かずして立てたる女なるべし、とじめは刀自女
たふとこりんぞ―たふ〳〵戀りんぞ也
まうでくる―やつて來る途に

美濃山に。繁に生ひたる。玉柏。豐の明に。あふがたのしさヤ。あふがたのしさヤ。

眉止之女

大御酒わかせヤ(ィみまくさとりかへ)。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめ。

酒飲

酒をたうべて。たべ醉うて。たふ(ィん)とこりんぞや。まうでくる。なよろほひそ。まうでくる。タンナ。タンヤ。タリヤ(ィリ)。ランナ(ィリラ、又タンナ)タリチリラ(ィウ)。

田中井戸

田中の井戸に(ィも)。光れる田水葱。摘め〳〵吾子女。田中の子あこめ(ィこめこめて)。タラリ。ラリ。田中の子あこめ。

無力蝦

ちからなき(ィい)かへる。力なき(ィい)かへる。骨なき(ィい)蚯蚓。骨なき(ィい)みゝず。

なんばーなには也

めぐるもしるくーめぐるが如く我もさまゝ〳〵に惱みたるが、遂に其甲斐ありて時にあへりと也こゝ迄凡て時にあへるといふ爲めの序也比喩也帶を取られてー高麗人が好色の情より女の帶を取りしなるべし

難波海

なんばの海。なんばの海。漕ぎもてのぼる。小舟大舟。つくし津までに。今すこし(ィい)のぼれ。山崎までに。

鈴之川

すゞか川。すゞか川。八十瀨の瀧を。みな人の。めぐ(ィつ)るもしるくや。時にあへる。時にあへるかもや。

石川

一段

いしかはンの。高麗人に。帶を取られて。からき悔する。

二段

いかンなる。いかンなる帶ぞ。縹の帶の。中は絕えたる。

三段

かやるか。かやるか。中は絕えたるか(ィなかはたいれたるか)。

奥山

おく山に。木伐るや翁。木を(ィう)やは削る。眞木やはけンづる。木けンづるをぢ。

奥々山

おく山に。木流すと。木伐る翁(ィさか木かをち)。木やと木やと。木を(ィう)やはけンづる。眞木やはけンづる。木けンづる翁。

我家

わいへン(ィわがいへ)は。帷帳をも。垂れたるを。大君きませ。聟にせん。御肴に。何よけん。鮑さだえ(ィを)か。石陰子よけん。あはびさだえか。かぜよけん。

わいへンー我家也

さだえー栄螺

手―琴笛の手
さかむのね―盛の音か

なゝくさ―人名か地名かならん
さ癈―さは發語

東遊

一歌

ヲヲヲヲ。ハレナ。手を調へろな。歌とゝのへむな。さかむのねエ。ヲヲヲヲ。

二歌

エ我脊子が。今朝の琴手は。アハレ。七つ絃の。八つ緒の琴を。調べたることや。なをかけや。あまのかつのをけや。ヲヲヲヲ。

駿河歌

ヤ。有度濱に。駿河なる。有度濱に。打ち寄する波は。なゝくさの妹。ことこそよし。ことこそよし」。なゝくさのいもは。ことこそよし。あへるとき。いささ寢なんや。なゝくさのいも。ことこそよし」。あな安らけ。あな安ら安ら。あな安らけ。練の緒の。衣の

うれ―末
いはたした―地名なるべし
あせか―何故か

袖を垂れて。あな安らけ」。千鳥故に。濱に出て。遊ぶ千鳥故に。文も無き小松がうれに。網な張りそ。網な張りそ」。いはたしたエ。笠忘れたりや。いはたしたエ。殿原もしるくもがなや。笠奉り置かむ。笠奉り置かむや」。知らざらむ。あせか其殿原。知らざらむ。いはたなるや。たへのとのは。近き隣を。近き隣を」。以上六段

千早振―この歌古今集東歌の最末に出づ

求女子歌

アハレ。千早振。賀茂の御社の。姫小松。アハレ姫小松。萬代經とも。色はかは。アハレ色はかはらじ。

おほひれ、をひれ―大比枝小比枝か
よちなれや―寄らぬが如し
とほめ―吾が遠妻をいふ

於保比禮

おほひれや。をひれの山は。よりてこそ。よりてこそ。山はよらなれや。とほめはれと。

風俗

こゆるすりきぬ―眞淵云、こゆすぐりきぬの誤也、此所より過來ぬと也
戀すくせ―戀のやりすごしにくき也
此歌古今集東歌に見え「菜摘む」を「磯菜摘む」に作る

小筑波

小筑波を。こゆるすりきぬ。かへりきてヤ。たが戀すくせ。をつくばを。こゆるすきぬ。

小由流支

小淘綾の。磯立ち馴らし。磯ならし。菜摘む。童女ぬらすな。ぬらすな沖に折れ。をれ波ヤ。

濡ろ〳〵も。君が食すべき。めすべき。菜をし摘み。摘みて。ハヤ。

玉垂

玉だれの。小瓶を。中にすゑて。主はもや。肴覓ぎに。肴とりに。こゆるぎの。磯の若和布。刈りあげに。

鶴―和名抄「多加閉、貌似鴨而小背上有文」まね―眞に也

鴛鴦

鴛鴦。鴨さへ來ゐる。原の池のヤ。玉藻はまねな刈りそヤ。生ひも續ぐがにや。おひもつぐがに。

之太乃浦

しだの浦を。朝こぐ小舟。さし寄せろ。我さへ乘りてナ。しだよ。しだの浦みむヤ。

君乎置天

此歌古今集に見ゆ

君を置きて。あだし心を。我持たばヤ。ナヨヤ。末の松山。波も越えなむヤ。波もこえなむ。

越方

おのをによする―己を似寄する、己をそれに比する意なるべし

遠方や。彼方や。安達の原にたよるからに。たよるからに。うわるからに。おのをによする。さ寢としなくに。よせばよせ。よせばよせ。よそふる人の。憎からなくに。

宵りを―宵より、をはよと同意の強辭なるべし

小車

小車。綿の紐とかむ。宵りをしのばせヨヤナ。われしのばせこ。われしのばせ。そよまさに。ねてけらしも。月の面を。さわたる雲の。まさやけく。みるこ。さやけくみる。

此歌古今集に見ゆ

陸奥

アハレヤ。阿武隈に。霧立ちわたり。明けぬとも。夫をばやらじ。待てばすべなしヤ。

此歌同上

甲斐

甲斐が嶺を。さやにも見しがヤ。けよれなく。心なく。横ほり立てる。さやの中山。

さやにも見しが云々―明らかに見たしと思ふのに心なくも

常陸

筑波嶺の。このもかのもに。陰はあれどヤ。君がみかげに。ます陰も。ますかげもなしヤ。

此歌古今集に出ヅ

常陸にも。田をこそ作れ。あだ心や。兼ぬとや君が。山を越え。野を越え。雨夜きませる。

筑波山

筑波山。葉山しげ山。しげきをぞや。たが子も通ふな。下にかよへ。我つまは下に。

月面

月のおもを。さわたる雲の。まさやけくみる。なはの。圓江の。秋なれば。霧立ちわたる。なはのつぶら江。

大鳥

大鳥の。羽根に。ヤレナ。霜降れり。ヤレナ。誰かさ云ふ。千鳥ぞさいふ。鶏ぞさいふ。蒼鷺ぞ。京より來て。さ云ふ。

奈末不利

なはのつぶら江の。春なれば。霞みて見ゆる。なはのつぶら江。

大鳥―鶴

よこほち云々―今井似閑は横大路に酒を買ひの意とす

ちゝちゝ―眞淵は父母とす　うそふい―嘯きなるべし　てうと―調度也、弓矢の類　しだら―しだるに同じ、垂也

荒田

あらたに生ふる。富草の花。手に摘み入て。宮へ參らむ。なかつたえ。

東路

あづまぢに。かるかやの。よこほちになさけを。かいかるかやの。見ねばや。こともやすらに。かるかやの。しさや。かいかるかやの。

菅牟良

すがむらの。ヤハレ。小菅叢のヤ。むらのヤ。生ひては我こそ。かい刈らめ。

知々良々

ちゝらゝが門に。うそふい。まろこそ立てれ。てうとをひさげて。などかはや立てりしもせざらむ。おのれかや。最愛者の門に。てうとをひさげて。

我門

わが門のや。しだら小柳。サハレ。トウ〳〵しだる小柳。しだるカイテハ。ナヨヤ。し

だる小柳。
しだるカイテハヤ。國ぞ富せむ。郡ぞ榮えむ。里ぞ富せむ。吾家ぞ富せむヤ。しだるこ
やなぎ。

乎之高倍

をしたかべ。鴨さへ來ゐる。原の池に。生ふる玉藻はヤ。よき草の。ゆかりぞヤ。まね
な刈りそヤ。

此歌前の賀歌と略同じ

伊勢人

伊勢人は。あやしきものをヤ。なとてへば。小舟に乘りてヤ。波の上を漕ぐヤ。波のへ
をこぐヤ。

あやしきものをヤ―奇しき事をなすよの意なとてへば―何と云へば也

加比加禰

甲斐が嶺に。白きは雪かヤ。否をさの。かひの褻衣や。ならす調布や。さらすてふくり
ヤ。

鳴高

一段

鳴高しヤ。鳴高し。大宮近くて。なりたかし。アハレノ。なりたかし。

鳴高し―音高しとて制する也

二段

音なせそや。音なせそ。

三段

あなかま。こむともヤ。あそかなれ。

あなかま―あゝ喧し、制止の詞　あそか―密（ミソ）か

八乎止女

八少女は。わが八少女ぞ。立つや八少女。立つや八少女。神の坐す。高天の原に。立つ
や少女。立つや八少女。

八少女―あまたの少女

彼乃行

かの行くは。雁か鵠か。雁ならば。ハレヤ。トウ〳〵。

雁ならば。名のりぞせまし。猶くどひなりや。トウ〳〵。

今様

春の初（郢曲譜）

ヤ。春のはじめのヤ。梅の花ヤ。よろこびひらけて。みなるはな。おまへの池なる。薄こほり。こゝろとけたるヤ。たどいまかな。

蓬萊山（同　上）

ヤ。蓬萊山にはヤ。千とせふるヤ。萬歲千秋かさなれりン。松のえだには。鶴すくひ。巖がそばには。龜あそぶ。

りやうぜんみやま（同　上）

靈山みやまのヤ。五葉松ヤ。竹葉なりとぞ。人はいふ。われも見る。竹葉なりとも。折りもてこん。閨のかざしに。まつさゝん。

千手―觀音也

ふるき都　（源平盛衰記所載）

ふるき都を。來て見れば。淺茅が原とぞ。なりにける。月の光は。くまなくて。秋風のみぞ。身にはしむ。後德大寺實定作

よろづの佛の　（同　上）

よろづの佛の。願よりも。千手の誓ぞ。たのもしき。枯れたる木草も。たちまちに。花さき實なる。とこそ聞け。

君をはじめて　（同　上）

君をはじめて。見る時は。千代も經ぬべし。姫小松。おまへの池なる。龜岡に。鶴こそむれゐて。あそぶなれ。

佛も昔は　（同　上）

佛もむかしは。凡夫なり。我らもつひには。ほとけなり。三身佛性具しながら。へだつる心の。うたてさよ。

ものゆゑに―ものなるに

彌陀―無量壽佛

君があげこし　（同　上）

君があげこし。手枕の。たえて久しく。なりにけり。何しにひまなく。むつれけん。ながらへもせぬ。ものゆゑに。

心のやみの　（同　上）

心のやみの。深きをば。燈籠の火こそ照らすなれ。彌陀の誓を。たのむ身は。照らさぬところも。なかりけり。

はくろは　（同　上）

白露は月の。ひかりにて。黃土うるほす。化あり。權現舟に。さをさして。むかひの岸に。よする波。

佛の方便　（同　上）

ほとけの方便。なりければ。神祇の威光。たのもしや。たゝけば必ず。ひゞきあり。仰げば定めて。花ぞさく。

さまも心も　（同　上）

さまも心も。かはるかな。おつる涙は。瀧の水。妙法蓮華の。池となり。弘誓の舟に。さをさして。沈む我身を。のせたまへ。

月も同じ　（長門本平家物語所載）

月も同じ月。空も同じ空の。いかなれば。こよひの空の。照りまさるらん。

ありのすさびの　（義經記所載）

ありのすさびの。にくきだに。ありきのあとは。戀しきに。あかで離れし。面影を。いつの世にかは。忘るべき。

わかれのことに　（同　上）

わかれのことに。悲しきは。親のわかれ。子のわかれ。すぐれてげにも。悲しきは。夫妻の別。なりけり。

春はさくらの　（同　上）

ありのすさびー
あるが儘に任せての意、源氏物語の註に「ある時はありのすさびに慣かりきなくてぞ人はこひしかりける」

すびきー素引か

春はさくらの。流るれば。吉野川とは（ィも）。なづけたり。秋は紅葉の。ながるれば。立田川とも。いひつべし。冬も末に。なりぬれば。法師も紅葉も。ながれたり。

あたりの野邊の　（同　上）

あたりの野邊の。白眞弓。おし張りすびきし。肩に掛け。なれぬほどは。何にせん。馴れての後は。そるぞくやしき。藤原實方作

月影のみ　（同　上）

月影のみよするは。田上川の。みなかみ。稻舟のわづらふは。最上川の早き瀨。そことも知らぬ。琵琶の聲。霞のひまに。まぎ（ィさ）れり。

別のことさら　（曾我物語所載）

わかれの殊更。かなしきは。親のわかれ。子のなげき。夫婦の思と。兄弟と。いづれを分きて。思ふべき。袖にあまれる。忍音を。かへしてとどむる。關もがな。

をさまりなびく　（吾妻鏡所載）

人の國―外國

をさまりなびく。時なれや。一天四海の。内のみか。人の國まで。日の本の。もろこしが原も。此ところ。

信濃にあるなる　（體源抄所載）

信濃にあるなる。木曾路川。君におもひの。深ければ。水沫に袖をも。ぬらしつゝ。あらぬ世をこそ。すぐしけれ。

竹のよなかは　（同　上）

竹の夜中は。あはれぬる。ふしも定めず。起きゐつゝ。人に知られぬ。戀をして。鳥の鳴くまで。寢も入らず。

よしなの我等が　（同　上）

よしなの我等が。獨寢や。かばかり寒き。冬の夜に。ころも薄くて。夜は長し。たのめし人は。待てどこず。

心の内には　（同　上）

たのめし人―必ず來るとたのみに思はせられし人

あやめて―怪しみて、この歌「忍ぶれど色に出にけり我が戀は物や思ふと人の問ふまで」による

かれ―うと〳〵しく離れさかる意、菊の緣にて枯れにいひ掛く

こゝろの内には。忍べども。色に出にけり。我戀は。ものやおもふと。みな人の。あやめていかにと。問ふまでに。

藥師の十二の　（古今著聞集所載）

藥師の十二の。誓願は。衆病悉除。たのもしき。一經其耳は。さておきつ。皆令滿足すぐれたり。

ませのうちなる　（同　上）

笆のうちなる。白菊も。うつろふ見るこそ。あはれなれ。我等が通ひて。見し人も。かくしつゝこそ。かれにしか。

像法轉の　（梁塵口傳集所載）

像法轉の。時にては藥師の誓ぞ。たのもしき。一たび御名を。聞く人は。よろづの病なしといふ。

四大聲聞　（同　上）

四大聲聞―一決定聲聞二退菩提聲聞三應化聲聞四增上慢聲聞

四大聲聞。いかばかり。よろこび身よりも。餘るらむ。われらは末世の佛ぞと。たしかに聞きつる。今日なれば。

熊野にまします（同　上）

熊野にまします。權現は。名草の濱にぞ。おりたまふ。和歌の浦にし。ましませば。年はゆくとも。若王子。

ちはやぶる神（同　上）

ちはやぶる神。上におはします。ものならば。あはれに。おほしめせ。神もむかしは。人ぞかし。

春のはじめ（同　上）

春のはじめの。梅の花。よろこび開けて。實なるとか。みたらし川の。うす氷。こゝろゆく―取る解けたる。たゞいまかな。

峰の嵐の（同　上）

峰のあらしの。はげしさに。木々の木の葉も。散りはてて。

松の木陰に（同　上）

松のこかげに。立ちよれば。千とせの緣は。身にしめども。松が枝かざしに。さしつれば。春の雪こそ。降りかゝれ。

松のこかげ云々―朗詠集「倚二松根一而摩レ腰千年之翠滿レ手」の句と相似たり

大宮權現（日吉山王利生記所載）

大宮權現は。おもへば教主。釋迦ぞかし。一たび此地を。蹈む人は。靈山界會の友となる。僧都慶增作

びんだたら―髪のゐちたるをいふとぞ

八千とせ―莊子逍遙游篇「上古有二大椿者一以二八千歲一爲二春八千

雜藝

鬢多々良（五節間郢曲）

びんだたらを。あゆかせばこそ。あゆかせばこそ。愛敬づいたれ。ヤレコトウトウ。

思之津（同　上）

おもひの津に。舟のよれかし。星のまぎれに。おして參らう。ヤレコトウトウ。

物云舞（又は萬歲樂）（同　上）

其一

千世に萬代。かさなるは。鶴のむれゐる。龜岡。

其二

椿のかげは八千とせ。松花のいろは。十返り。

歳寫「秋」十返り―松は百年に一度花さき其花の十回も咲く程の意、即ち「千歳之松」と漢文にいへる意也

日蔭の糸―神事に日蔭蔓の代りに冠の笄の左右に懸けたる白青の絹糸の紐

其三

見るにめでたき。花のいろ。千とせの松に。降る雪。

其四

豐年のしるしは。天に滿ちて。降る雪。

其五

年のうちに。咲く梅。くれなゐにほひの。薄雪。

其六

日蔭の糸に。むすぼほれ。小忌の袖に。置く霜。

其七

おまへの池の。鴨どり。上毛の霜の。しろさよ。

其八

ついたて。見たれば。御階の月の。あかさよ。

衣被女―見物の女

其九

ついたて。見たれば。神のます内野の。森の影の。高さよ。

其十

ついたて。見たれば。御隨身の。持ちたる。立松明の。しろさよ。

其十一

ついたて。見たれば。衣被女の。おほさよ。

其十二

ついたて。見たれば。舞姫の。おほさよ。

其十三

すさまじく。いふなる。十二月の。月夜を。豐のあかりの。光は。めづらしくぞ。覺ゆる。

水猿曲（又は水白拍子）（同　上）

昆明池―昆明國にあり、方二百里と稱す
嚴陵瀨―後漢の光武帝の時嚴子陵富春山に隱れて耕釣して終る

水のすぐれて。おほゆるは。西天竺の。白鷺池。じむしやう許由に。すみわたる。昆明池の。水の色。ゆくすゑ久しく。澄むとかや。賢人の釣を。垂れしは。嚴陵瀨の。河の水。月影ながら。漏るなるは山田の筧の。水とかや。蘆の下葉を。とづるは。三島入江の氷水。春立つ空の。若水は。汲むとも〳〵。盡きもせじ。つきもせじ。

伊佐立奈牟（同　上）

いざ立ちなん。鴛鴦の鴨鳥。水まさらば。とくぞまさらん。

白薄樣（同　上）

白うすやう。濃染紫の紙。まきあけの筆。巴書いたる。筆の軸。ヤレコトウトウ。

以下は特に民謠なり、併せてここに載す

春の野（土佐日記所載舟歌）

春の野にてぞ。音をば泣く。わがすゝきにて。手を切る切る。摘んだる菜を。親や貪食るらん。姑やくらふらん。カヘラヤ。よんべの。童女もがな。錢こはん。空言をして。

もぎのりわざ―品物と引替に金を拂はず懸にて買ふこと

おぎのりわざをして。錢ももてこず。おのれだにこず。

國のかた（同　上）

なほこそ。國のかたは。見やらるれ。わが父母。ありとしおもへば。カヘラヤ。

川そひ柳（榮花物語所載）

川そひ柳。風ふけば。動くと見れど。根はつよし。

ほとゝぎす（枕草子所載田植歌）

ほとゝぎす。おれよかやつよ。おれ鳴きてぞ。我は田に立つ。

かやつ―彼奴

夜は誰と（同書所載）

よるは。誰と寢ん。常陸の。介と寢ん。寢たる。肌もよし。

また（同　上）

男山の。峰のもみぢ葉。さぞ名が立つ。さぞ名が立つ。

和漢朗詠集　卷上

春

立春

逐レ吹潛開。不レ待二芳菲之候一。　迎レ春乍變。將レ希二雨露之恩一。　内宴進レ花賦　公乗億

吹ー風なり

池凍東頭風度解。　窓梅北面雪封寒。　立春日書懷呈二芸閣諸文友一　篤茂

東頭ー東方、頭はほとりの意

年のうちに春は來にけりひととせを　こぞとやいはんことしとやいはん　（古今）　在原元方

年のうちに春は來にけりー舊年の内に立春の節來りたれば、この一年を今年といはんか去年といはんかと也

柳無二氣力一條先動。　池有二波文一氷盡開。　白居易

今日不レ知誰計會。　春風春水一時來。　府西池　同

計會ー豫めもくろみ合はせしか